

現代中国語のヴォイスに関する研究  
— 能動文、受身文、使役文の意味・機能を中心に —

2020 年 9 月

新潟大学大学院

現代社会文化研究科

氏名： DU Hui

## 目次

序文 .....	v
凡例・略語 .....	vii
第 1 章 序論.....	1
1.1 はじめに.....	1
1.2 ヴォイスの定義とその範疇.....	7
1.3 中国語のヴォイスに関する先行研究の概観.....	15
1.4 本論文の目的 .....	18
1.5 本論文の研究方法と言語資料 .....	18
1.6 本論文の構成 .....	19
第 2 章 中国語のヴォイス構文の体系 .....	22
2.1 はじめに.....	22
2.2 無標ヴォイス構文と有標ヴォイス構文 .....	26
2.3 中国語のヴォイス構文の構造 .....	29
2.3.1 構文要素.....	30
2.3.2 語順 .....	35
2.3.3 表示方法.....	37
2.4 中国語のヴォイス構文を体系化する基準 .....	38
2.4.1 各構文要素の文法関係 .....	38
2.4.2 参与者の意味役割.....	39
2.4.3 述語動詞句の種類.....	40
2.5 中国語のヴォイス構文の体系 .....	41
2.5.1 中国語のヴォイス構文の種類 .....	42
2.5.2 中国語のヴォイス構文の体系表 .....	46
2.5.3 体系に基づく能動文、受身文、使役文の定義.....	48
2.5.4 能動文、受身文、使役文の下位分類 .....	50
2.6 中国語のヴォイス構文の体系上の特徴 .....	52
2.6.1 統語的特徴 .....	52
2.6.2 意味的特徴 .....	55

2.6.3	各ヴォイス構文の構造上の対応・関連	56
2.7	結び	56
第3章	中国語の能動文	59
3.1	はじめに	59
3.2	中国語の能動文における各構文の使用状況	60
3.3	中国語の能動文の基本的特性	62
3.3.1	能動文の情報構造	62
3.3.2	出来事の客観的描写	65
3.4	“把”能動構文の意味的・機能的分析	66
3.4.1	先行研究	66
3.4.2	“把”能動構文に課される意味的・機能的制約	70
3.4.2.1	N <sub>2</sub> の「絶対的・相対的状态変化」制約	71
3.4.2.2	N <sub>2</sub> の「絶対的・相対的既存性」制約	75
3.4.3	“把”能動構文の意味的・機能的特徴	80
3.4.3.1	“把”能動構文の情報構造上の特徴	80
3.4.3.2	N <sub>2</sub> への「関心」	84
3.4.3.3	N <sub>1</sub> への「責任付与」	85
3.4.3.4	影響結果の「意外性」	86
3.4.3.5	N <sub>2</sub> への「強影響性」	87
3.4.3.6	「命令・警告」文への出現	91
3.4.3.7	影響結果を表すN <sub>3</sub> との共起	92
3.5	結び	94
第4章	中国語の受身文	96
4.1	はじめに	96
4.2	中国語の受身文における各構文の使用状況	96
4.3	中国語の受身文の基本的特性	98
4.3.1	受身文の情報構造	98
4.3.2	「影響性」制約	99
4.3.3	「特徴付け」制約	100
4.3.4	「関与性」制約	101

4.4	“让”受身構文の意味的・機能的分析	102
4.4.1	先行研究	102
4.4.2	“让”受身構文に課される意味的・機能的制約	104
4.4.2.1	非意図的動作主の禁止	104
4.4.2.2	N <sub>1</sub> への認識表現に対する制限	105
4.4.2.3	N <sub>2</sub> の義務的明示	106
4.4.2.4	N <sub>1</sub> への受益表現に対する制限	107
4.4.2.5	出来事実現の可能性表現に対する制限	108
4.4.3	“让”受身構文の意味的・機能的特徴	109
4.4.3.1	受身標識“让”の文法化	109
4.4.3.2	N <sub>1</sub> への「責任付与」	111
4.4.3.3	N <sub>1</sub> の「非被害認識」	113
4.5	結び	114
第5章	中国語の使役文	116
5.1	はじめに	116
5.2	中国語の使役文における各構文の使用状況	117
5.3	中国語の使役文の基本的特性	120
5.3.1	使役文の情報構造	120
5.3.2	使役主の意図性の暗示	121
5.4	“让/叫/使/把”使役構文の意味的・機能的分析	123
5.4.1	先行研究	124
5.4.2	意味構造に基づく使役文の分類	127
5.4.2.1	使役文の構造の表示方法	127
5.4.2.2	〈+意図〉と〈-意図〉	127
5.4.2.3	〈スル〉と〈ナル〉	129
5.4.2.4	使役文の意味構造の分類表	130
5.4.3	“让/叫/使/把”使役構文と各使役構造の対応関係	131
5.4.3.1	使役構造I: 許容使役	131
5.4.3.2	使役構造II: 要求使役	132
5.4.3.3	使役構造III: 無作為使役	133

5.4.3.4	使役構造IV: 誘動使役.....	134
5.4.3.5	使役構造VI: 主観助力使役.....	135
5.4.3.6	使役構造VIII: 客観原因使役.....	136
5.4.3.7	使役構造X: 人間対象使役.....	138
5.4.3.8	使役構造XII: 物対象使役.....	139
5.4.4	“让/叫/使/把”使役構文の意味的・機能的特徴.....	139
5.5	結び.....	142
第6章	結論.....	144
6.1	議論のまとめ.....	144
6.1.1	中国語のヴォイスに関する概念.....	144
6.1.2	中国語のヴォイス構文の体系.....	144
6.1.3	中国語の能動文、受身文、使役文の意味・機能.....	146
6.2	本論文の独自性.....	149
6.3	今後の課題.....	151
参考文献	.....	152
謝辞	.....	159

## 序文

本論文は現代中国語のヴォイスに関する研究である。本論文の内容の一部は、以下に示す筆者の研究成果に加筆・修正を加えたものである。

### [第3章]

杜暉 2017. <“把”能動句的成立条件和语义特征—以影响性和主观性为中心—>, 日本中国語学会第67回全国大会。2017年11月12日。於：於中央大学多摩キャンパス。『日本中国語学会第67回全国大会 予稿集』, 233-237頁。東京：日本中国語学会第67回全国大会準備会。

杜暉 2017. 「能動を表す“把”構文の成立条件に関して一文の意味と構造から—」, 新潟大学東アジア学会平成29年度第3回例会。2017年12月16日。於：新潟大学。

杜暉 2018. 「“把”能動構文の機能—情報構造に基づく意味と使用の分析—」, 『言語研究』第3号, 13-26頁。新潟：新潟大学大学院現代社会文化研究科。

杜暉 2018. 「“把”能動構文の成立要件再考—各構文要素の意味関係から—」, 『東方學術論壇』第47号, 41-50頁。坡州：株式会社韓国學術情報。

### [第4章]

杜暉 2011. 「中国語の受身表現について—受身マーカーと動詞の類を中心に—」, 新潟大学言語研究会第44回研究発表会。2011年10月17日。於：新潟大学。

杜暉 2015. 「中国語無マーカー受身文の意味分析と形式上の特徴」, 『現代社会文化研究』第61号, 49-66頁。新潟：新潟大学大学院現代社会文化研究科。

杜暉 2016. 「現代中国語の受身マーカー“被”と“让”について—使用条件と意味分析を中心に—」, 『言語研究』第1号, 55-70頁。新潟：新潟大学大学院現代社会文化研究科。

[第5章]

- 杜暉 2016. 「中国語の使役表現について—使役マーカ—の使用条件と意味分析を中心に—」, 新潟大学大学院現代社会文化研究科プロジェクト「中国語の諸文法形式と意味的相違に関する研究」平成28年度第2回研究会。2016年7月20日。於：新潟大学。
- 杜暉 2017. 「中国語の使役マーカ—について」, 新潟大学大学院現代社会文化研究科プロジェクト「中国語の諸文法形式と意味的相違に関する研究」平成29年度第1回研究会。2017年1月18日。於：新潟大学。
- 杜暉 2017. 「使役マーカ—“让”と“使”の使用条件と意味的相違」, 『言語研究』第2号, 28-43頁。新潟：新潟大学大学院現代社会文化研究科。
- 杜暉 2018. <“把”使役句的成立条件—从命题内和命题外的角度进行分析—>, 日本中国語学会第68回全国大会。2018年11月4日。於：神戸市外国語大学。『日本中国語学会第68回全国大会 予稿集』, 69-70頁。千葉：日本中国語学会大会運営委員会。
- 杜暉 2019. <“把”使役句的成立条件—从命题内和命题外的角度进行分析—>, 『言語研究』第4号, 10-22頁。新潟：新潟大学大学院現代社会文化研究科。
- 杜暉 2019. <有标记“宾语前置”使役句的语用功能、语义特征—从参与者的意图性来分析—>, 日本中国語学会第69回全国大会。2019年11月3日。於：お茶の水女子大学。『日本中国語学会第69回全国大会 予稿集』, 61-62頁。東京：日本中国語学会第69回全国大会運営委員会。
- 杜暉 2020. 「使役標識“让”、“叫”、“使”、“把”の意味的・機能的特徴—使役文の体系化に基づいて—」, 『日中言語対照研究論集』第22号, 102-116頁。東京：日中対照言語学会。

## 凡例・略語

1. 例文・訳文・図表・下線については、特別な説明や引用の表示がない限り、筆者によるものである。
2. 例文に付されている記号。
  - \* (左肩) : 当該の表現が文法的・意味的に不適格であることを表す。
  - ? : 当該の表現が文法的・意味的に容認可能性が低いことを表す。
  - = : 同じ例文を再掲することを表す。例文では“被”、“让”、“叫”、“使”などのヴォイス標識に下線を付ける。また、当該の節で論じている部分に波線を付ける。
3. 本論文で使用したその他の記号・略語は以下の通りである。本文中で解説されているものについては省略する。

NEG	否定辞 (negative marker)
PREP	前置詞 (preposition)
PRF	完了 (perfect)
PROG	進行 (progressive)
PTCL	小辞 (particle)
SFP	文末助詞 (sentence-final particle)
am	能動標識 (active voice marker)
cm	使役標識 (causative voice marker)
pm	受身標識 (passive voice marker)
vm	ヴォイス標識 (voice marker)



## 第 1 章 序論

### 1.1 はじめに

日常生活においては、動作・行為に関するさまざまな出来事が常に起こっている。中国語、日本語、英語、朝鮮語、ドイツ語などの多くの言語では、これらの出来事は複数の言語形式（構文形式）を用いて表現される（鷺尾龍一 1997；柴谷方良 2000；木村英樹・鷺尾龍一 2008；木村雄太郎 2008；高見健一 2011；木村英樹 2012；张伯江 2013）。例えば図 1 の出来事の場面を考えよう。



図 1-1 出来事の場面

図 1-1 の出来事を日本語で言語化するならば、「王さんは劉さんを殴った」、あるいは「劉さんは王さんに殴られた」となる。図 1-1 の出来事において、「殴る」という動作を行う主体は「王さん」、「殴る」という動作を受ける対象は「劉さん」である。この出来事は、中国語、日本語、英語では以下の(1)-(3)のように表される。

(1) a. 小王 打了 小刘。

王さん 殴る-PRF 劉さん

b. 小刘 被 小王 打了。

劉さん bei 王さん 殴る-PRF

- (2) a. 王さんは劉さんを殴った。  
b. 劉さんは王さんに殴られた。
- (3) a. Wang hit Liu.  
b. Liu was hit by Wang.

(1)-(3)が示すように、話し手の眼前の出来事を表現するのに、中国語、日本語、英語のいずれも(a)と(b)の2つの言語形式が存在する。2つの言語形式を比較すると、(1a)-(3a)は、動作主である「小王/王さん/Wang」が主語の位置、動作対象である「小刘/劉さん/Liu」が主語以外の位置に置かれ、(1b)-(3b)は動作対象である「小刘/劉さん/Liu」が主語の位置、動作主である「小王/王さん/Wang」が主語以外の位置に置かれているという相違点が観察される。また、(2)-(3)が示すように、日本語では、「殴る→殴られる」のように接尾辞「られる」が付加されており、英語では“hit→was hit”のように「be 動詞 + 過去分詞」に動詞の形態が変化している。それに対して、(1)が示すように、中国語の場合には、“被”という虚詞<sup>1</sup>の付加が観察される。では、そもそもなぜ同一の出来事が異なる2つの言語形式を用いて表現されるのであろうか。また、2つの言語形式は形式上の相違のほかにもどのような相違点があるのだろうか。すなわち、どのような場合に(1a)-(3a)が用いられ、どのような場合に(1b)-(3b)が用いられるのだろうか。これは言語学の観点から考えるべき問題である。まず思いつくことは話し手のその出来事に対する視点が異なっている点である。

話し手の視点について、高見健一（2011）は次の規則が働いていると指摘する。

---

<sup>1</sup> 虚詞とは、中国語では、前置詞や接続詞、助詞など、単独で具体的な意味を持たない、文法上の機能を示す語を指す。

(4) 話し手の視点規則:

話し手（や書き手）は一般に、自分に近い、親しみのある人や物寄りに自分の視点を置き、それを文の主語（または主題）にして当該事象を述べる。

（高見健一 2011:15-16）

高見健一（2011）が(4)で述べるように、一般的に主語に置かれる要素には話し手の視点が置かれているものと判断することができる。

次の(5)-(6)とその会話場面を考えよう。(5)-(6)は話し手の息子の承平と承平の友人の啓太がボールで遊んでいる場面での発話である。息子が力いっぱい乱暴に啓太にボールを投げてしまった。それを見た話し手は息子の承平に(5)のように言い、息子の友人の啓太に(6)のように言った。

(5) 承平 欺負 啓太 了。 不可以这样哦！

承平 いじめる 啓太 SFP

（承平は啓太くんをいじめたね。そんなこととしてはダメだよ！）

(6) 啓太 被 承平 欺负了。 不好意思！

啓太 bei 承平 いじめる-PRF

（啓太くんは承平にいじめられたのね。ごめんね！）

同じ客観的出来事を表現するのに、なぜ(5)と(6)のような異なる言い方が用いられるのであろう。これは、話し手の視点が異なることが原因であると考えられる。高見健一（2011）の視点図<sup>2</sup>に倣えば、以上の会話場面における視

---

<sup>2</sup> 高見健一（2011）は、話し手が山田先生寄りの視点か、中立の視点をとって以下の図の事象を述べれば、「山田先生は木村君を褒めた」のような能動文で表現するが、話し手が木村君寄りの視点をとれば、この視点からこの事象を表す単独の動詞がないので、受身形が用いられる。つまり、受身文「木村君は山田先生に褒められた」が用いられることになると指摘する。

点の違いは次の図 1-2 のように図示される。

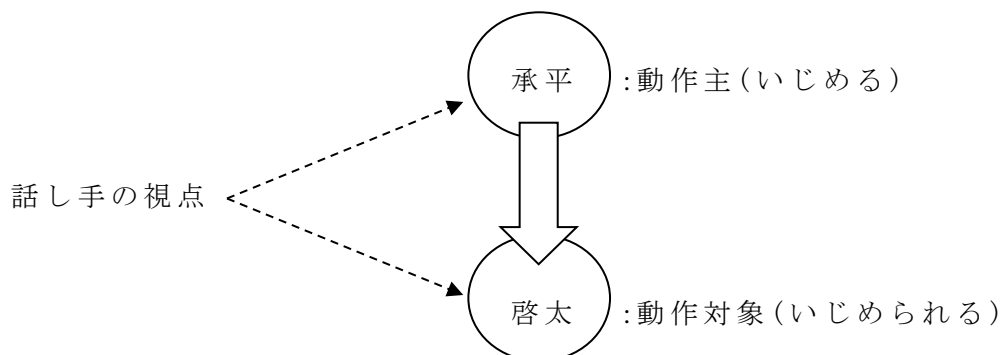
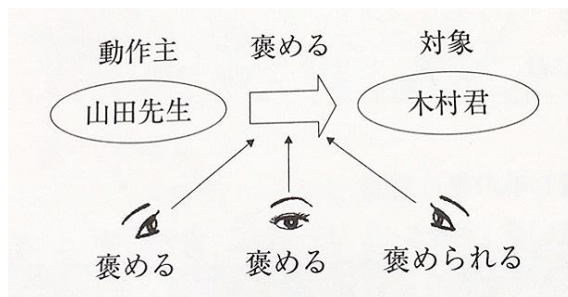


図 1-2 話し手の視点図

図 1-2 における太矢印は動作・行為の力・影響の方向を表す。つまり、動作・行為の力・影響は動作主の承平から動作対象の啓太に与えられている。点線の矢印は話し手の視点の方向を表す。話し手が視点を動作主の承平に向け、承平側から出来事を表現する場合、(5) “承平欺负啓太（承平は啓太をいじめる）” が用いられる。それに対して、話し手が視点を動作対象の啓太に向け、啓太側から出来事を表現する場合、(6) “啓太被承平欺负（啓太は承平にいじめられる）” が用いられる。

改めて図 1-1 の場面と例(1)-(3)を考えよう。(1a)-(3a)の話し手の視点は「小王/王さん/Wang」に、(1b)-(3b)は「小刘/劉さん/Liu」に向けられていると考えられる。つまり、話し手の視点が異なれば、同じ出来事が異なる言語形式で表現される。ただし、注意しなければならないことは、中国語に



(高見健一 2011:16)

は図 1-1 の出来事を表す場合、次の(7)-(8)が示すように 2 つ以上の言語形式があるということである。

- (7) a. 小王 打了 小刘。  
王さん 殴る-PRF 劉さん
- b. 小王 把 小刘 打了。  
王さん ba 劉さん 殴る-PRF
- c. 小王 将 小刘 打了。  
王さん jiang 劉さん 殴る-PRF  
(王さんは劉さんを殴った。)
- (8) a. 小刘 被 小王 打了。  
劉さん bei 王さん 殴る-PRF
- b. 小刘 让 小王 打了。  
劉さん rang 王さん 殴る-PRF
- c. 小刘 叫 小王 打了。  
劉さん jiao 王さん 殴る-PRF  
(劉さんは王さんに殴られた。)

(7)の話し手の視点は主語の位置にある動作主“小王(王さん)”、(8)の話し手の視点は主語の位置にある動作対象“小刘(劉さん)”である。しかし、視点が同じであっても、(7)-(8)が示すように、3つの言語形式が存在する。Bolinger (1977:ix-x) は、“[...] the natural condition of a language is to preserve one form for one meaning, and one meaning for one form.”と述べ、形式が違えば意味にも違いがあり、意味が違えば形式にも違いがあり、意味と形式は1対1の対応をなすと主張している。本論文は Bolinger (1977) の主張を支持し、(7)-(8)の6つの言語形式はそれぞれ異なる意味を表すという立場に立つ。

中国語母語話者は各言語形式の意味上の違いを意識しなくても適切な形式を選択し発話することができる。しかしながら、中国語学習者は各言語形式の意味上の違いが分からないと、しばしば不適格な文を発話してしまう。

次の中国語学習者の誤用例(9)-(10)をみてみよう。

(9) a.\*我 小时候，很 被 祖父 宠爱。

私 幼い時 とても bei 祖父 かわいがる

(私は幼い時祖父にととてもかわいがられました。)

b. 小时候，祖父 很 宠爱 我。

幼い時 祖父 とても かわいがる 私

(幼い時祖父はとても私をかわいがりました。)

(鲁元宝 2005:258)

(10) a.\*这个提案 叫 否定了。

この提案 jiao 否定する-PRF

b. 这个提案 被 否定了。

この提案 bei 否定する-PRF

(この提案は否定されました。)

(鲁元宝 2005:261)

(9)-(10)が示すように、“被”を用いる(9a)は不適格であるが、“被”を用いない(9b)は適格である。また、“叫”を用いる(10a)は不適格であるが、“被”を用いる(10b)は適格である。

(11) a. 门 被 打开了。

ドア bei 開ける-PRF

b.\*门 让 打开了。

(杨德峰 2008:222)

ドア rang 開ける-PRF

(ドアが開けられた。)

c. 门 让 人 打开了。

(杨德峰 2008:222)

ドア rang 人 開ける-PRF

(ドアが人に開けられた。)

(11)が示すように、動作対象が明示されていない場合、“被”を用いる(11a)は適格であるが、“让”を用いる(11b)は不適格である。また、動作対象が明示されている場合、“让”を用いる(11c)も適格となる。これらの例から明らかかなように、“让”を用いる文の成立にはそれぞれ一定の制約条件が課されていると考えられる。

中国語の言語現象を深く理解するために、同じ出来事を表す各言語形式がそれぞれどのような意味的特徴を持っているのか、また、どのような条件のもとで適格となるのか、すなわち、各言語形式の意味・機能を明らかにする必要があると考える。

本論文で考察する(1a)-(3a)、(5)、(7)、(9b)のような能動文、(1b)-(3b)、(6)、(8)、(9a)、(10)、(11)のような受身文はヴォイス(voice)という文法範疇に属する。本章では、まずヴォイスという概念を検討したうえで、その定義と範囲を明確にする。次に、現代中国語<sup>3</sup>におけるヴォイスに関する従来の研究を概観・分析する。最後に、本論文の目的、方法、構成を述べる。

## 1.2 ヴォイスの定義とその範疇

本節では、英語、日本語のヴォイスに関する概念に基づいて、中国語の言語現象と結び付けて、ヴォイスという概念を改めて定義する。

伝統的な中国語学の分野においては、能動文や受身文に関する研究は多く見られるものの、それが「ヴォイス」という文法範疇と関連付けて論じられることはなかった。しかし、近年、木村英樹(2000)、古川裕(2005)、中島悦子(2007)、高橋弥守彦(2012)、張黎(2012)、張岩紅(2012)、佐々木勲人(2013)、張伯江(2013)、楊凱榮(2018)などは、動詞の形態変化に関わる言語現象として限られていたヴォイスという文法概念をもつ

---

<sup>3</sup> 黄伯荣、廖序东(1991)によれば、現代中国語は、狭義には、北京語の発音を標準とする、権威ある現代白話文の著作で用いられている文法を規範とする、北方語を基礎に成立した“普通话(標準語)”と呼ばれる共通漢語を指す。現代中国語が使われるようになった時期は明確ではないが、1919年の五四運動前後の白話文運動からである。本論文の対象は狭義の現代中国語である。

と広く捉え、中国語にもヴォイスという文法概念を認めるようになってきている。ヴォイスとは何か、中国語のヴォイスはどのようなものであるかについて次に検討する。

ヴォイスは一般的に中国語では“态”、英語では *voice*、日本語の漢字では「態」と訳され、その概念及び文法範疇をめぐってこれまでさまざまな見解が出ている。伝統的な英語学の辞典では、「ヴォイス」は次のように定義されている。

(12) *Voice* (態) 主語と、動詞の表す動作との主格関係を表す動詞の形態をいう。Jim *read* ‘Hamlet’ と ‘Hamlet’ *was read* by Jim のような変化という。前者を能動態 (ACTIVE VOICE)、後者を受動態 (PASSIVE VOICE) という。両者の伝える客観的事実そのものは同じであるが、話者の観点が違うのであって、前者は動作主の観点から、後者は動作を受ける対象の観点から述べている。

(大塚高信 1970:1089)

(13) *Voice* (態) 文の主格 (NOMINATIVE (CASE)) と他動詞 (TRANSITIVE VERB) の表す動作との関係を表す形態をいう。英語には、受動態 (PASSIVE (VOICE)) と能動態 (ACTIVE (VOICE)) との2つの態がある。He *opened* the door. といえば能動態であり、The door *was opened*. といえば受動態である。能動態と受動態とは、同じ知的意味 (COGNITIVE MEANING) をもつとは限らない。

(安井稔 1996:851)

(12)-(13)の定義は、主語と動詞の表す動作の関係、他動詞の形態変化、同じ出来事を表す2つの言い方、能動態と受動態の対立という点が英語のヴォイス現象を反映しているが、これらの点全てがヴォイス現象を判断するための必要な項目であろうか。視野を広げて、英語だけでなく、ほかの言語の場合も考えてみよう。

伝統的な日本語学では、ヴォイスという概念は次のように捉えられている。



(14) ヴォイスとは、同内容のことを違った声（形）で表すことである、という原義的かつ狭義の解釈に従えば、他動詞の能動形と受動形が考察対象となるが、実際には、自他の対応、使役形、及び可能形などが考察範囲に含まれるのが普通である。

（柴谷方良 1982:256）

(14)を英語の定義(12)-(13)と比べて観察すると、日本語においては、ヴォイスの範囲が広げられ、能動形と受動形のほか、動詞の語尾変化に見られる使役形、可能形も日本語のヴォイスの範疇に入っている。しかし、(14)の日本語の定義は(12)-(13)の英語の定義と同じように、動詞の形態変化をヴォイスの必要な項目としている。この定義に従えば、中国語など動詞の形態変化がない言語ではヴォイスという文法現象を捉えられないため、より普遍性のある定義が必要であると思われる。近年、各国言語学の学术交流の活発化に伴い、「ヴォイス」に関して再考察が行われてきている。斎藤純男・田口善久・西村義樹 編（2015）の『明解言語学辞典』では次のようにヴォイスが定義されている。

(15) ヴォイス（態）      アスペクトやテンスと並ぶ文法範疇であり、典型的には動詞の屈折接辞によって標示される、狭義には名詞句が担う動作主、被動者といった意味役割と、その項が担う主語、目的語といった文法関係の対応を指す。動詞の基本形を用いる構文が無標のヴォイス、派生形を用いる構文が有標のヴォイスとされる。ヴォイスの交替は多くの場合名詞句の担う意味役割と文法関係の対応に変更をもたらす。これをヴォイスの本質とする立場もある。

（古賀裕章 2015:174）

---

<sup>4</sup> 古賀裕章は斎藤純男・田口善久・西村義樹 編（2015）『明解言語学辞典』における「ヴォイス（態）」の執筆者である。

(15)の定義に従えば、動詞の形態変化を持つ文法現象は典型的なヴォイス現象と言えるが、ヴォイスの本質ではない。つまり、ヴォイスの本質は、交替できる名詞句の担う意味役割と文法関係の対応に変更をもたらす言語形式が存在するという点である。名詞句の担う意味役割と文法関係の対応に変更をもたらす中国語は、語順の入れ替えやヴォイスを表す虚詞の有無によって、複数の形式が存在していると判断できる。すなわち、複数の形式の名詞句の担う意味役割と文法的役割は異なっているという点で、中国語はヴォイスの本質的な特徴を備えている。そのため、中国語にもヴォイスという文法現象が存在すると考えられる。

中島悦子(2007)は日中対照の観点から、日本語と中国語のヴォイスに関する文法現象を研究し、ヴォイスを次のように定義している。

(16)ヴォイスは形態的・構文的には、動詞の形態的变化に伴って起こる格形式の規則的な交替現象であるとし、意味的には同一の事象内容を2つの異なった視点から述べる文法機能である。

(中島悦子 2007:9-10)

中島悦子(2007)は(16)の定義に基づいて、日本語のヴォイスの範疇には、自・他の対応・受身・使役・可能・自発などの諸形態を含めると考え、中国語においても同様のことが言えることを指摘する。中国語はもともと動詞の形態変化がないので、中国語の受身文、使役文などをヴォイスの文法的範疇に取り込むために、動詞の形態的变化から解放して、“被”や“使”などを伴う現象を形態的・構文的な交替現象であると中島悦子(2007)は考えている。

さらに、木村英樹(2012)は伝統的な定義を推し広げ、ヴォイスを以下のように捉え直している。

(17) ヴォイスとは、動詞の形態変化の有る無しにかかわらず、動作者と主語の関係を中心に、名詞表現の意味役割と格標示の対応関係の変更が何らかのかたちで言語形式の上に明示的かつ規則的に反映される現象である。

(木村英樹 2012:187)

木村英樹(2012)は(17)に基づき、「中国語は、動詞の形態変化こそ伴わないものの、統語的ないしは構文的レベルにおいては、ヴォイスと呼ぶにふさわしい文法現象をもち合わせている」と明確に中国語もヴォイスという文法現象があると指摘する。ヴォイスの本質は名詞表現の意味役割と格標示の対応関係の変更が複数の言語形式で表されるという点は、木村英樹(2012)と古賀裕章(2015)は同じである。また、本論文がヴォイスの本質に対して理解しているところとも一致している。

ヴォイスの本質を確認したうえで、本論文は、ヴォイスをヴォイスと密接な関係を持っている「動詞の形態変化」という枠から解放して、「統語構造の変化」と見なす。動詞の語形変化がなくても、語順の入れ替えや虚詞の有無などの「統語構造の変化」から生じる各言語形式も異なる言語形式と考えられるからである。従って、本論文はヴォイスという概念を次の(18)のように定義する。

(18) 本論文におけるヴォイス:

ヴォイスとは、動作・行為を中心とした客観的には同一の事態を、名詞句の意味役割と文法関係の対応関係の変更などの理由で、複数の言語形式で表現される文法現象である。

(18)の「名詞句」は事態の参与者を表す。参与者の担う意味役割(動作主、受け手、使役手、被使役手など)と文法関係(主語、目的語など)の変更が必要であるため、一般的に事態に2つ以上の参与者がある場合、ヴォイスという文法現象が見られる。つまり、ヴォイス構文は、「参与者が2つ以上の動作・行為を中心とした事態」を表す文である。従って、ここまであげた例

文(1)-(3)、(5)-(11)は全てヴォイスの定義に合うため、ヴォイス構文と言える。

(19) 山茶花 和 櫻花 都 很 漂亮。  
椿 と 桜 どちらも とても 綺麗だ  
(椿と桜はどちらも綺麗だ。)

(20) 孩子 哭了。 (张伯江 2013:143)  
子供 泣く -SFP  
(子供は泣いた。)

(21) 我 很 高兴。 (木村英樹 2012:188)  
私 とても うれしい。  
(私はとてもうれしい。)

(18)の定義に従えば、(19)は、“山茶花(椿)”と“櫻花(桜)”という2つの参加者があるが、動作・行為を中心とした事態ではないため、ヴォイス構文と言えない。(20)は、“哭(泣く)”という動作を中心とした事態であるが、この事態の参加者は“孩子(子供)”しかいない、名詞句“孩子(子供)”の意味役割と文法関係の対応関係に変更が得られず、複数の言語形式で表現することができないため、ヴォイス構文と言えない。(21)は、「動作・行為を中心とした事態」と「複数の言語形式で表現される」ための条件をいづれも満たしていないため、ヴォイス構文と言えない。従って、本論文はヴォイス構文を次の(22)のように定義する。

(22)本論文におけるヴォイス構文:

ヴォイス構文とは、意味役割の異なる参加者が明示するか否かに関わらず2つ以上ある、動作・行為を中心とした事態を表す文である。

さらに、ヴォイス構文となる例をあげる。

(23) 他 喝了 酒 了。 (张伯江 2001:520)

彼 飲む-PRF 酒 SFP

(彼は酒を飲んだ。)

[無標能動構文]

(24) 他 把 酒 喝了。 (张伯江 2001:520)

彼 ba 酒 飲む-PRF

(彼は酒を飲んだ。)

[“把”能動構文]

(25) 副书记 乖乖地 将 皮鞋 和 雪白的袜子 脱下了。

副書記 素直に jiang 革靴 と 真白な靴下 脱ぐ-PRF

(副書記は素直に革靴と真白な靴下を脱いだ。)

[“将”能動構文]

(26) 他 被 流氓 打了。 (张万禾 2007:45)

彼 bei ならず者 殴る-PRF

(彼はならず者に殴られた。)

[“被”受身構文]

(27) 他 让 流氓 打了。 (张万禾 2007:45)

彼 rang ならず者 殴る-PRF

(彼はならず者に殴られた。)

[“让”受身構文]

(28) 他 叫 流氓 打了。 (张万禾 2007:45)

彼 jiao ならず者 殴る-PRF

(彼はならず者に殴られた。)

[“叫”受身構文]

(29) 杯子 打碎了。 (王灿龙 1998:15)

湯呑 打ち-砕く-PRF

(湯呑は打ち砕かれた。)

[無標受身構文]

(30) 司机 叫 我 在这 等 他。 (加納光・平井勝利 1994:92)

運転手 jiao 私 ここで 待つ 彼

(運転手は私にここで彼を待つように言った。<sup>5</sup>)

[“叫”使役構文]

(31) 这件事 真 让 我 担心。 (加納光・平井勝利 1994:92)

このこと 本当に rang 私 心配する。

(このことは本当に私を心配させた。)

[“让”使役構文]

(32) 故乡的一草一木 都 令 我 感到 亲切。 (古川裕 2003:33)

故郷の一木一草 全て ling 私 感じる 親しみ

(故郷の一木一草が全て私に親しみを感じさせた。)

[“令”使役構文]

(33) 他们的事迹 使 我 很 受感动。 (加納光・平井勝利 1994:92)

彼らの行い shi 私 とても 感動する

(彼らの行いは私をととても感動させた。)

[“使”使役構文]

(34) 三千米 把 他 跑 得 气喘吁吁。 (张豫峰 2006:28)

3キロ ba 彼 走る de 息も絶え絶え

(3キロ走って彼は息も絶え絶えになった。)

[“把”使役構文]

(35) 侯宝林的相声 听笑了 大伙儿。 (施春宏 2010:298)

侯寶林の漫才 聞く-笑-PRF 皆

(侯寶林の漫才は皆を笑わせた。)

[無標使役構文]

---

<sup>5</sup> 三宅登之(2012)は、日本語では、対象が働きかけに従った場合は「～させた」(「子供に宿題をさせた」)、従わなかった場合は「～するように言った」(「子供に宿題をするように言った」)という異なる表現を使うが、中国語の使役文は「～するように言った」と訳すことが少なくないことであると指摘する。

(23)-(35)は語順や主語の位置に立つ名詞句の意味役割、また、“把”、“被”、“叫”、“让”などの標識<sup>6</sup>の有無による、異なる形式のヴォイス構文であると考えられる。本論文では、上記の例をそれぞれ、(23)を無標能動構文、(24)を“把”能動構文、(25)を“将”能動構文、(26)を“被”受身構文、(27)を“让”受身構文、(28)を“叫”受身構文、(29)を無標受身構文、(30)を“叫”使役構文、(31)を“让”使役構文、(32)を“令”使役構文、(33)を“使”使役構文、(34)を“把”使役構文、(35)を無標使役構文と呼ぶ<sup>7</sup>。本論文はこのような具体的なヴォイス構文を研究対象とする。

### 1.3 中国語のヴォイスに関する先行研究の概観

20世紀後半に、言語研究が「言語を調査する」ということから「言語を科学する」という発想へ大転換したのに伴い、王力(1943)、吕叔湘(1948, 1957, 1979)、丁声树(1961)、赵元任(1979)、朱德熙(1980, 1982)、刘月华(1983)などの研究者に代表される科学的な現代中国語研究の幕が開かれた。以来、現在まで、中国語に関する研究は盛んに行われ、たくさんの成果が上げられている。その中には、中国語のヴォイスに関する研究成果も多くみられる。

---

<sup>6</sup> 虚詞としての“被”、“让”、“叫”、“使”、“把”、“给”などは研究者によって「準動詞(coverb)」(木村英樹 2012; 黄利斌 2013)、「使役・被動・能動動詞」(江藍生 2000; 三宅登之 2012)、“介词(前置詞)”(佐々木勲人 1997; 中島悦子 2007)、“态标记(ヴォイス標識/ヴォイスマーカー)”(加納光・平井勝利 1994; 王振来 2006; 屈哨兵 2008; 今村圭 2011)と呼ばれる。本論文では、これらの虚詞がヴォイスを表す合図と捉え、「ヴォイス標識」と呼ぶ。

<sup>7</sup> 本論文では、ある言語形式をその形式上の特徴が反映される場合、「～構文」と呼ぶことにする。例えば、ヴォイス構文、無標能動構文、有標能動構文、“把”構文、“把”能動構文、“把”使役構文などである。その形式上の特徴が反映されない場合、「～文」と呼ぶことにする。例えば、能動文、受身文、使役文などである。ただし、先行研究において原著者が使役構文、自動詞構文、他動詞構文などと表記している場合には原著で使用されている表記の通りに呼ぶことにする。

中国語のヴォイスの体系について、一般的に、「能動態」、「受動態」、「使役態」は並列のヴォイスの下位分類と見なされている。これらの三種類のヴォイスを個々の文法現象として扱う研究は多いが、マクロな観点からの系統的な研究は少ない。木村英樹（2000, 2012）はヴォイス構文の構造と事態の関係に基づいて、中国語におけるヴォイスのカテゴリ化を試みており、その成果はたくさんの研究者に引用されている（玄幸子 2006<sup>8</sup>；加藤宏紀 2006；今村圭 2011；加藤晴子 2012；佐々木勲人 2013）。しかしながら、木村英樹（2000, 2012）の研究対象には無標受身構文、無標使役構文が含まれていない。高橋弥守彦（2017）は中国語における受身表現の体系について、まず中国語の受身表現には、“被字句”と意味上の受身表現と語彙上の受身表現の3種類があると指摘し、さらに“被字句”の組立構造を「名詞 1+ “被/为” + 名詞 2+ “所” + 動詞」、「名詞 1+ “被” + （名詞 2+） + 動詞+ “为/做/作/成” + 名詞語句」、「名詞 1+ “被/让/叫/给” + （名詞 2+） + 動詞+その他」、「名詞 1+ “被/让/叫” + 名詞 2+ “给” + （名詞 3+） 動詞+その他」に分類し、それぞれの構造を検討した。しかし、高橋弥守彦（2017）は“被/让/叫/给”の相違点については論じていない、さらに中国語の能動態、使役態にも言及していない。また、ヴォイスの体系の観点から「能動態」、「受動態」、「使役態」の定義に関する検討は数少ないため、先行研究において、同じ“小红把我拽倒了（シヤオホンは私を引き倒した）。”のような例文は「能動文」であるか「使役文」であるか、“我军让敌人突破了防线（わが軍隊は敵に防衛線を突破させてしまった。/わが軍隊は敵に防衛線を突破された。）”のような例文は「受身文」であるか「使役文」であるかについて、その判断も統一されていない。つまり、中国語のヴォイスの体系についての研究は不十分であると言える。

中国語の能動態について、従来の研究では、「能動」という概念そのものの検討は数少なく、能動文に関する研究は主に“把”構文に焦点を当てて分析

---

<sup>8</sup> 玄幸子（2006）は近世語のヴォイスを研究対象にしている。近世中国語は、一般に、およそ中国の五代十国（907年～）という時代から清王朝の初期（1636年～）の間の白話小説で代表される中国語を指している。



するものであった。従って、“把”構文について、その成立要件、構文の意味をめぐっては多くの研究成果が出されている。しかし、これらの研究は説明できない例文がたくさんあるため、再検討する必要がある。また、無標能動構文の研究はあまり見られない。つまり、中国語の能動態に関する研究は十分に行われてきたとは言えない。

中国語の受動態について、従来の研究では、“被”構文や“被”の品詞としての性格の解明が中心であった。20世紀後半から、中国語学、言語学研究の国際的交流の発展に伴い、中国語にも「受益」を意味する“被”構文も存在することが明らかにされてきたことから、“被”構文の意味と成立要件の再検討が求められ、受動態に用いられる“被”と“让”、“叫”、“给”の相違や無標受身構文の特性に関する研究が盛んになった（王力 1943；劉月華・潘文娛・故韓 1991；楊国文 2002）。しかしながら、受身文の成立要件、各具体的な受身文の意味的・機能的相違については、まだ十分に解明されていない。

中国語の使役態について、従来の研究では、“使役句（使役文）”という用語を用いる代わりに、“兼语句（兼語文）”と呼ばれることが多い。しかし、「兼語文」を「使役文」と同じ文法概念と見なすことはできないと王亜新（2011）は指摘している。近年の言語学の発展に伴い、木村英樹（2000；2012）、張豫峰（2006；2007）、中島悦子（2007）、楊凱榮（2008；2018）、張黎（2012）などの研究者は中国語にもヴォイスという文法概念を認め、「使役」がヴォイスの範疇に入ると見なしている。使役態を表す“让”、“使”、“叫”、“把”について、多く論じられている（呂叔湘 1980；岩田憲幸 1983；陳月吾 1992；加納光・平井勝利 1994；木村英樹 2000；叶向阳 2004；邵敬敏・趙春利 2005；今村圭 2011；三宅登之 2012）。しかし、使役文の定義や“让”使役構文、“使”使役構文、“叫”使役構文、“把”使役構文の使い分けについては、管見の限り明らかにされていない。

総じていえば、中国語のヴォイスの体系という基礎的な問題も、“把”能動構文、“让”受身構文、“让”使役構文、“叫”使役構文などの具体的なヴォイス構文も一定の研究成果が認められるものの、未だ十分に解明されているとは言えない。

#### 1.4 本論文の目的

上述の問題を解決するため、本論文は、中国語のヴォイス構文の体系を明らかにした上で、各ヴォイス構文の意味・機能を明らかにすることを目的とする。本論文の研究目的は具体的に以下の2つの部分からなる。

(i) マクロの観点から、中国語のヴォイス構文を全面的に考察し、体系化する。具体的には、中国語のヴォイス構文の構造と、ヴォイス構文を分類する基準を検討し、統一的な基準で中国語のヴォイス構文を体系化する。それに基づいて、能動文、受身文、使役文の定義を提案し、それぞれの下位分類を考察する。また、中国語のヴォイス構文の体系上の特徴を説明する。これは具体的な各ヴォイス構文を深く分析するための基盤を作る作業となる。

(ii) ミクロの観点から、各ヴォイス構文の意味・機能を明らかにする。具体的には、能動文、受動文、使役文の基本的特性を検討したうえで、“把”能動構文、“让”受動構文、“让”使役構文、“叫”使役構文、“使”使役構文、“把”使役構文の意味・機能を明らかにする。

#### 1.5 本論文の研究方法及言語資料

現代の言語研究は「科学的手法」に基づいている点、意味論、語用論、統語論の相互関連性を重視している点で伝統的な言語研究との相違がある。着想や着眼点によって生成文法、認識意味論、形式意味論、機能的構文論、選択体系機能文法、形態論などのさまざまな理論が生み出されていると内田恵・前田満（2007）が指摘している。本論文は、統語論、意味論、語用論、認識言語学などの研究成果も参考にすが、構文の意味・機能の解明を目指すため、研究の手法としては主に機能的構文論<sup>9</sup>の分析方法を用いる。

研究全体の手順としては、まず先行研究の成果と問題点を踏まえて、中国語におけるヴォイスという概念の再検討を行う。それに基づいて、統語構造

---

<sup>9</sup> 機能的構文論（Functional Syntax）は、1970年代から久野暉が中心となり提唱している文法理論で、文の構造やその文法性・適格性をその文の意味や伝達機能、情報構造などの観点から分析するものである（高見健一 2015:44）。

や認識意味などの側面からヴォイス構文を全面的に体系化する。あわせて、能動文、受身文の定義、対応・関連の関係を明確にする。また、機能的構文論の観点から中国語の能動文、受身文、使役文の基本的特性を明確にしたうえで、さらに“把”能動構文、“让”受身構文、“让”使役構文などの具体的なヴォイス構文の意味・機能を究明し、各章で議論を展開する。

本論文は現代中国語のヴォイス構文に関する仮説を提起し、具体的な例文の考察・分析を通して、仮説を検証する。筆者は研究対象である現代中国語の母語話者であるので、主に自作の内省資料<sup>10</sup>を例文として用いる。ただし、より多面的な言語資料を利用するために、以下の2つの方面から手に入る言語資料も用いる。1つは、先行研究中の例文である。これらの例文は研究者によって検証され、信頼性が高いと考えられるため、問題点の論証には有効である。もう1つはコーパス言語資料である。本論文は主に北京大学中国語言語研究センターが開発したコーパス(略称CCL: <http://ccl.pku.edu.cn>)、北京言語大学が開発したコーパス(略称BCC: <http://bcc.blcu.edu.cn>)を活用することにする。なお、本論文で用いられている全ての例文は標準語を話す中国語母語話者によるインフォーマントチェックを受けている。

## 1.6 本論文の構成

本論文は本章「序論」を含む6章から構成されている。

第1章 序論

第2章 中国語のヴォイス構文の体系

第3章 中国語の能動文

第4章 中国語の受身文

---

<sup>10</sup> 風間喜代三・上野善道・松村一登・町田健(2004)によって、研究者が自分でその研究のため作文した作例、ある文の適格性についての研究者自身による判定などの研究者の内省によって得られた言語資料(言語データ)は内省資料である。内省資料は、1人の研究者が母語を対象として行う文法研究の際に、もっとも一般的な資料形態となっている。

## 第 5 章 中国語の使役文

## 第 6 章 結論

第 1 章の序論では、中国語の能動文、受身文、使役文の意味・機能を体系的に解明するために、ヴォイスの概念を導入する。まず、英語や日本語における同種の構文に関する先行研究を検証し、本論文で考察する中国語のヴォイス及びヴォイス構文を明確に定義する。次に、中国語のヴォイスに関する研究を概観する。そして、本論文の目的、研究方法と言語資料、構成について述べる。

第 2 章では、中国語におけるヴォイス構文の体系を分析する。まず、中国語のヴォイス構文を体系化する際に検討すべき問題を解決する。具体的には、中国語の無標ヴォイス構文・有標ヴォイス構文を再検討し、名詞句、ヴォイス標識、述語動詞句などの構文要素及び語順を考察し、ヴォイス構文の表示方法を定める。また、中国語のヴォイス構文の各構文要素の文法関係、参与者の意味役割、述語動詞句の類型を検討する。次に、ヴォイス構文の体系化を行う。具体的には、中国語のヴォイス構文の種類を検討し、体系表を作り、体系に基づく能動文、受身文、使役文の定義と下位分類を明らかにする。そして、中国語のヴォイス構文の体系上の特徴を明らかにする。具体的には、中国語におけるヴォイス構文の体系の統語的特徴と意味的特徴、各ヴォイス構文の構造上の対応・関連という関係を分析する。

第 3 章では、中国語の能動文を分析する。まず、中国語の能動文に関する先行研究、及び中国語の能動文における各構文の使用状況を概観する。次に、受身文との比較を通して、情報構造と意味の観点から中国語の能動文の基本的特性を分析する。そして、無標能動構文との比較を通して、“把”能動構文の意味・機能を明らかにする。

第 4 章では、中国語の受身文を分析する。まず、中国語の受身文に関する先行研究、及び中国語の各受身文における各構文の使用状況を概観する。次に、能動文との比較を通して、情報構造と意味の観点から中国語の受身文の基本的特性を分析する。そして、“被”受身構文との比較を通して、“让”受身構文の意味・機能を明らかにする。

第 5 章では、中国語の使役文を分析する。まず、中国語の使役文に関する先行研究、及び中国語の使役文における各構文の使用状況を概観する。次に、能動文、受身文との比較を通して、情報構造と意味の観点から使役文の基本的特性を分析する。そして、使役文の意味構造を体系的に分類し、異なる意味構造と“让”使役構文、“叫”使役構文、“使”使役構文、“把”使役構文の対応関係を考察し、これらのヴォイス構文の意味的・機能的特徴を明らかにする。

第 6 章の結論では、第 1 章～第 5 章で論述した内容を振り返り、結論をまとめる。また、本論文の独自性及び今後の課題について述べる。

## 第2章 中国語のヴォイス構文の体系

### 2.1 はじめに

従来の研究では、中国語のヴォイス構文を能動文、受身文、使役文という三種類に大別して取り上げるのが一般的であった（劉月華・潘文娛・故韓 1991；沈力 1996；佐々木勲人 1997、2013；王灿龙 1998；江藍生 2000、2001；木村英樹 2000、2012；加藤宏紀 2006；鲁元宝 2005；中島悦子 2007；三宅登之 2009；石村広 2000、2011；高橋弥守彦 2012、2014；黄利斌 2013；陆俭明 2016；楊凱榮 2018）。しかし、ヴォイス構文の下位分類としての能動文、受身文、使役文については、過去の研究では統一的な定義がなく、それぞれに対応する具体的な構文の呼び方も“主动宾句（SVO 構文）”、“主动句（能動文）”、“処置文（処置文）”、“把字句（“把”構文）”、“被字句（“被”構文）”、“被动句（被動文）”、“受事主语句<sup>11</sup>（受け手主語文）”、“自然被动句（無標受身構文）”、“意义上的被动句（無標受身構文）”、“兼语句（兼語文）”、“致使句（致使文）”、“使令句（使役文）”、受影文<sup>12</sup>、受身文、使役文のようにさまざまに混在している。そのうえ、能動文、受身文、使役文が個々の文

---

<sup>11</sup> 中国語学では、動作・行為の作用・影響を受ける対象（人/物/事）が主語の位置に置かれるときに、それを受事と呼ぶ。

<sup>12</sup> 木村英樹（2012）は従来「被動文（“被动句”）」の名で呼ばれてきた“X被Y V”は、主語に立つ対象Xが単に動作・行為を受けることを述べるだけでは成立し難く、Xが動作・行為の結果として被る何らかの具体的な〈影響〉を明示する表現、もしくはそれを強く含意する表現を述語成分に要求するという点にあるため、“X被Y V”構文を「受影文」と呼ぶゆえんであると指摘する。

法現象として研究されることや、能動文と受身文<sup>13</sup>、受身文と使役文<sup>14</sup>をペアにして研究することはしばしばあるが、ヴォイスの体系という総合的視座から各ヴォイス構文の定義や関係を研究するものは少なく、さらに、中国語に、相互文、再帰文、逆受動文、適用文などのヴォイス構文があるかどうかに関しても言及する研究はほとんどない。つまり、中国語のヴォイス構文の体系に関する研究は十分であるとは言えない。これは伝統的な中国語学において、ヴォイスという文法現象が十分に認識されていなかったからではないかと考えられる。

近年、対照言語研究の発展とともに、日本の中国語学の学界では、中国語の「能動態」、「受動態」、「使役態」に関する研究も盛んになっている（木村英樹 2000, 2012；中島悦子 2007；楊凱榮 2008, 2018；三宅登之 2009, 2012）。その中でも、中国語のヴォイス構文の体系を深く研究する、木村英樹（2000, 2012）はヴォイス構文の構造と事態の関係に基づいて、次のように中国語におけるヴォイスのカテゴリ化を試みている。

- (1) (I) 指示使役文  $\textcircled{X}$  叫  $\textcircled{Y}$  A  
 (II) 許容使役文 X 让  $\textcircled{Y}$  A  
 (III) 誘発使役文 X 使  $\nabla Y$  S  
 (IV) 受影文  $\nabla X$  被  $\textcircled{Y}$  AS  
 (V) 執行使役文  $\textcircled{X}$  把  $\nabla Y$  AS  
 (A: 〈スル〉 S: 〈ナル〉 AS: 〈スル-ナル〉)

(木村英樹 2012:198,203)

<sup>13</sup> 張伯江（2001）は“把”構文、“被”構文、“主动宾句（SVO 構文）”を同じグループに入れて互いに比較し、それらの共通点と相違点を分析した。施春宏（2010）は“句式群（construction group）”という概念を提案し、“把”構文、“被”構文、受事主語構文などの構文を同じのグループに入れて、“把”構文を中心に分析した。

<sup>14</sup> 小林立（1986）、江藍生（2000）、木村英樹（2012）は中国語の受身文と使役文を関連付けて分析した。

(1)では、中国語のヴォイス構文が(Ⅰ)指示使役文、(Ⅱ)許容使役文、(Ⅲ)誘発使役文、(Ⅳ)受影文、(Ⅴ)執行使役文と異なるカテゴリーに分類されている。これら5つの構文のそれぞれが表す事態、構造、意味の示差的特徴について木村英樹(2012)は次のように分析している。(1)のAは動作・行為、すなわち、〈スル〉を意味する述語形式を表し、Sは状態・変化、すなわち、〈ナル〉を意味する述語形式を表す。○印は、当該の人またはモノが何らかの動作・行為を「〈スル〉主体」であることを示す。▽印は、当該の人またはモノが何らかの状態・変化に「〈ナル〉主体」であることを示す。こうした区分に基づいて、木村英樹(2012)は各ヴォイス構文の表す事態、各構文の特徴と相互の関連性を分析している。

表 2-1 ヴォイス構文とヴォイス標識の対応関係<sup>15</sup>

	C	
	分割系	統合系
指示使役文	叫	叫or让
許容使役文	让	
誘発使役文	使	
受影文	被	
執行使役文	把	把

(木村英樹 2012:206)

また、木村英樹(2012)は“叫”、“让”、“使”、“被”、“把”をヴォイス構文においてYをマークする準動詞として表2-1のように異なる準動詞(coverb)を使用する「分割系」と、主に話し言葉に多用される際の、執行使役文を除く他の4つの構文に同一の“叫”か“让”を用いる「統合系」と言われる、二つのパターンが存在すると指摘する。

<sup>15</sup> 表 2-1 のタイトル「ヴォイス構文とヴォイス標識の対応関係」は筆者による。



本論文はヴォイス構文の体系化を行う際、主に木村英樹（2012）のヴォイス構文の表示方法と分類の方法を参考にする。しかし、さらに多くの例を観察すると、木村英樹（2012）の指示使役文、許容使役文、誘発使役文、受影文、執行使役文と“叫”、“让”、“使”、“被”、“把”は必ずしも「一対一」の関係ではない。また、「統合系」の“叫”、“让”は話し言葉において、指示使役文、許容使役文、誘発使役文、受影文の準動詞として用いられると木村英樹（2012）は指摘するが、実際には、“叫”、“让”は話し言葉においても誘発使役文には用いられない。

(2) 杯子 打碎了。 (王灿龙 1998:15)

湯呑 打ち砕く-PRF

(湯呑は打ち砕かれた。)

[無標受身構文]

(3) 我的好女儿啊， 可想死我了！

私のかわいい娘よ 誠に 思う 死 私 SFP

(私のかわいい娘よ！お前に会いたくて私は死にそうだ！)

[無標使役構文]

(4) 这本书 使 我 重新 审视了 自己的研究方法。

この本 shi 私 改めて 考える-PRF 自分の研究方法

(この本は、私に自分の研究方法について改めて考えさせた。)

[「X 使 Y A」構造の使役文]

また、(2)のような無標受身構文、(3)のような無標使役構文、(4)のような述語動詞が<スル>を意味する動詞“审视(考える)”の「X 使 Y A」構造の使役文について、木村英樹（2000, 2012）の研究は言及していない。

(5) 小红 把我 拽倒了。

シヤオホン ba 私 引く-倒れる-PERF

(シヤオホンは私を引き倒した。)

(木村英樹 2012:202)

木村英樹（2012）は、(5)が示すように、“拽倒（引き倒す）”という AS 構造は“把”構文の全用例数のうちの 85%に及ぶ圧倒的多数であるため、“把”構文の典型的な意味・機能は“致使”を表すことにあると結論し、従来「処置文」と呼ばれてきた(5)のような構文を、「執行使役文」と呼び換えた。しかし、「処置文」と「能動文」の関係について木村英樹（2012）は説明していなかった。さらに、(5)のような構文は「使役文」であるのか「能動文」であるのかについて、今までの研究の中では未だに統一されていない。

総じて言えば、ヴォイス構文に用いられる“叫”、“让”、“被”、“把”の機能、どのような構文が無標ヴォイス構文であり、どのような構文が有標構文であるのか、能動文、受身文、使役文の判定基準、ヴォイス構文の分類などの問題点は未だ明らかにされていない。中国語のヴォイス構文の体系に関して、全体的な観点からの研究は未だに不十分で、さらに研究を進めることが必要であると思われる。中国語のヴォイス構文は、中国語のヴォイスの研究にとって基礎的な問題として体系的に明らかにしない限り、能動文、受身文、使役文、“把”構文、“被”構文、“让”構文などのヴォイス構文の定義、及び関係は明確にならない。各ヴォイス構文の相互の関係や意味・機能を深く分析するために、具体的な問題点を再検討したうえで、統一的な基準でヴォイス構文を全面的に体系化する必要がある。

本章では、まず先行研究を踏まえて中国語のヴォイス構文を体系化する際に検討すべき問題を検討し、然る後、中国語のヴォイス構文を体系化する。次に、中国語のヴォイスの体系に基づいて、能動文、受身文、使役文を定義し、それぞれに対応する各形式を考察する。また、中国語のヴォイス構文の体系の統語的・意味的特徴及び各ヴォイス構文の関係を分析する。

## 2.2 無標ヴォイス構文と有標ヴォイス構文

中国語のヴォイス構文はその形式上、“叫”、“让”、“使”、“被”、“把”などの虚詞を用いる構文と、これらの虚詞を用いない構文に分類できる。今井敬子（1987）、王灿龙（1998）、加納光・平井勝利（1994）、王振来（2006）、今村圭（2011）などに代表される先行研究はヴォイス構文に

用いられる“叫”、“让”、“使”、“被”、“把”を“态标记（ヴォイス標識/ヴォイスマーカ）”と呼び、ヴォイス標識を持つ構文は有標ヴォイス構文、ヴォイス標識を持たない構文は無標ヴォイス構文であると見ている。しかし、能動文を無標ヴォイス構文、能動文以外の受身文、使役文などのヴォイス構文を有標ヴォイス構文であると見なしている研究もある（柴谷方良 2000；木村英樹 2012）。

柴谷方良（2000）はヴォイスの形態的・構造的側面から日本語の能動文と受身文を分析して、動詞の基本形と派生形は構文自体の基本と派生を示しているとする。能動・受動の動詞の対応、例えば「殺す」と「殺される」を見ると、能動文に使用される形式が無標（つまり基本形）で、受身文における形式には「れる」、「られる」が付加され、有標（つまり派生形）の形式であることが分かる。つまり、有標性という概念において、能動と受動は次のような関係にあると指摘する。

(6) 無標態:能動

有標態:受動

(柴谷方良 2000:124)

柴谷方良（2000）によれば、能動文は普通の（無標の）表現方法であり、それに対応する受身文は特別な（有標の）表現方法である。言い換えれば、受動の標識（「れる」、「られる」）は特別な状況を示すための標識である。しかし、日本語では有標のヴォイスは「れる」、「られる」という接尾辞の存在によって動詞の形態的な範疇として捉えることができるが、言語によってはヴォイスの交替が1つの動詞の形態的な範疇に納まりきらず、構文というレベルによって表されるものがあると柴谷方良（2000）は指摘する。

木村英樹（2012）は中国語のヴォイス構文において、(7)-(10)のような動作者や経験者が格標識を伴わず主語の位置に立つ文を基本的な文構造、「無標識」のかたちと見なし、(11)-(14)のような動作主もしくは作用主体が、何らかの意味的要因に動機づけられ、主語以外の位置に用いられるかたちで構文化され、有標化される文は「有標」と見なしている。

(7) 小红 念 课文。

シヤオホン 朗読する テキスト本文

(シヤオホンがテキストを朗読する。)

(8) 我 好好儿 想想。

私 よ〜く 考える

(私はよ〜く考えてみよう。)

(9) 我 很 高兴。

私 とても うれしい

(私はとてもうれしい。)

(10) 小红 把我 拽倒了。

シヤオホン ba 私 引く-倒れる-PRF

(シヤオホンは私を引き倒した。)

(11) 我 叫 小红 念 课文。

私 jiao シヤオホン 朗読する テキスト本文

(私はシヤオホンにテキストを朗読させようとした。)

(12) (你别逼我!) 你 让我 好好儿 想想。

あなた rang 私 よ〜く 考える

( (私をせっつかないで!) 私によ〜く考えさせてちょうだい。 )

(13) 他的 信 使我 很高兴。

彼の 手紙 shi 私 とても うれしい

(彼の手紙は私をととてもうれしがらせた。)

(14) 我被 小红 拽倒了。

私 bei シヤオホン 引く-倒れる-PRF

(私はシヤオホンに引き倒された。)

(木村英樹 2012:188,189)

木村英樹(2012)によれば、中国語のヴォイス構文の有標・無標について、動作主・経験者が主語の位置に立つヴォイス構文は無標ヴォイス構文、動作主・経験者が主語の位置に立たず、「特定の形式」に導かれるヴォイス構文は有標ヴォイス構文と区別することができる。つまり、木村英樹(2012)は能動文は無標で、使役文と受身文は有標であると見なしている。

柴谷方良（2000）と木村英樹（2012）は能動文を「無標」、能動文以外の文は「有標」と見なしている点で共通している。日本語においては、動詞が基本形である点から、柴谷方良（2000）の「日本語の能動文は無標、能動文以外のヴォイス構文は有標」という捉え方は形式上<sup>16</sup>も意味上<sup>17</sup>も「有標・無標の判断」に合っている。しかしなら、中国語には、動詞の「基本形」というものがないため、中国語の能動文は「基本形」という形式上の特徴を持つとは言えない。中国語の能動文の表現においては、“把”を用いない構文が数多く見られる。また、中国語の受身文、使役文において、“被”、“叫”、“让”、“使”、“把”などの虚詞を用いない文も、これらを用いる文もそれぞれ存在する。そのため、木村英樹（2012）の能動文は無標であり、使役文と受身文は有標であるという捉え方は、形態的有標性の観点からではなく、意味的有標性の観点からであると思われる。また、木村英樹（2012）はヴォイス構文に用いられる“被”、“叫”、“让”、“使”、“把”はYをマークする「準動詞」と呼んでいるが、このことは形態的有標性の観点からのみ考えて、“被”、“叫”、“让”、“使”、“把”をマーカー（標識）として考えていると思われる。

ヴォイスは統語的操作と関わっている文法現象である。中国語のヴォイス構文の統語的操作は、語順の入れ替えと“被”、“叫”、“让”、“使”、“把”という構文要素の有無で表現される。そのため、本論文では、形態的有標性の観点から、“被”、“叫”、“让”、“使”、“把”などを用いないヴォイス構文を「無標ヴォイス構文」、「被”、“叫”、“让”、“使”、“把”などを用いるヴォイス構文を「有標ヴォイス構文」と呼ぶ。

### 2.3 中国語のヴォイス構文の構造

本論文は主に機能的構文論の方法を用いて、文の構造に基づいて、情報構造や意味・機能などの観点から中国語のヴォイス構文の体系と各具体的な構文の文法性・適格性を分析する。中国語のヴォイス構文の表現形式は多様で

---

<sup>16</sup> 形態的有標性:ある形態素の有無によって対立する語のペアについて、形態的な標示があることを指して有標であると言う（長屋尚典 2015:227）。

<sup>17</sup> 意味的有標性:意味的に対立する語のペアについて意味的に特定の意味特徴を持つことを指して有標と呼ぶ（長屋尚典 2015:227）。

あるため、構文を分析する際、まずは文の構造を明らかにすべきである。本節では、中国語のヴォイス構文の構文要素、語順、表示方法を検討して、中国語のヴォイス構文の構造を明らかにする。

### 2.3.1 構文要素

中国語のヴォイス構文の構文要素は、その果たす文法的な役割によって、名詞句、述語動詞句、ヴォイス標識<sup>18</sup>、形容詞、副詞、助詞などに分けられる。次の例文を観察して、中国語のヴォイス構文の構文要素をそれぞれ説明する。

(15) 老张 打了 小李。

張さん 殴る-PRF 李さん

(張さんは李さんを殴った。)

(16) 小红 笑着 打开了 礼物。

紅さん ニコニコをしている 開く-PRF プレゼント

(紅さんはニコニコしながらプレゼントを開いた。)

(17) 妈妈 让 小红 买 菜。

母 rang 紅ちゃん 買う 食材

(母は紅ちゃんに食材を買わせた。)

(18) 小王 被 打了。

王さん bei 殴る-PRF

(王さんは殴られた。)

---

<sup>18</sup> 伝統的な中国語学では、品詞の観点から虚詞の“把”、“被”、“让”、“叫”などは“介词（前置詞）”という範疇に分類されている（呂叔湘 1980；朱德熙 1982；劉月華・潘文娛・故韡 1991）。本論文では、虚詞の“把”、“被”、“让”、“叫”を用いる文は必ずヴォイス構文であるという点、そして、“把”、“被”、“让”、“叫”は話し手の「受益」、「被害」などの主観性を表すことができることによって助詞の機能を持っているという点から、虚詞の“把”、“被”、“让”、“叫”を「標識」と見なす。

(19) 小王 被 打哭了。

王さん bei 殴る-泣く-PRF

(王さんは殴られて泣いた。)

中国語のヴォイス構文における名詞句は、事態の参加者を表す。ヴォイスの定義によって、事態の参加者は少なくとも2つが必要である。(15)は、“老張(張さん)”と“小李(李さん)”という2つの名詞句がある。(16)は、“小红(紅さん)”と“礼物(プレゼント)”という2つの名詞句がある。(17)は、“妈妈(母)”、“小红(紅ちゃん)”、“菜(食材)”という3つの名詞句が含まれる。しかし、(18)-(19)が示すように、行為者が省略されても文が適格である。構造上から見ると、(18)-(19)は、“小王(王さん)”という1つの名詞句だけが現れているが、(18)-(19)の事態において、動作対象である“小王(王さん)”と、“打(殴る)”という動作の行為者という2つの参加者が存在するはずである。そのため、ヴォイス構文においては、名詞句は明示的にせよ暗示的にせよ2つ以上が必要な構文要素である。

動作・行為を中心とする事態を表すヴォイス構文は、当然、その述語動詞句は重要な構文要素として必要である。述語動詞句の表す動作・行為や影響・変化などによって、名詞句の表す参加者の意味役割を決めるため、述語動詞句は事態において最も重要な情報であり、省略することができない。中国語のヴォイス構文における述語動詞句には、事態における述語動詞とその付加成分が含まれる。つまり、述語動詞句は述語動詞とその付加成分、特に補語動詞に区別する必要がある。(15)では、述語動詞は“打(殴る)”である。(16)では、述語動詞は自動詞である“笑(ニコニコする)”ではなく、他動詞である“打开(開ける)”である。(17)では、述語動詞は“买(買う)”である。(18)では、述語動詞は“打(殴る)”である。(19)では、述語動詞は“哭(泣く)”ではなく、“打(殴る)”である。このように、動詞の自・他や前後位置によって述語動詞を判断できる<sup>19</sup>。

---

<sup>19</sup> 范晓(2001)は“打死(殴られて死んだ/殴って死なせた)”の述語として用いられる動詞“打(殴る)”をV<sub>1</sub>、補語として用いられる動詞“死(死ぬ)”をV<sub>2</sub>と表記す

ヴォイス構文が表す事態において、名詞句の表す参与者、述語動詞句の表す動作・行為/影響・変化は最も中核的な内容である。そのため、名詞句と述語動詞句はヴォイス構文において核心の構文要素であると考えられる。

(20) a. 老张 {把/ 将 / 给} 小李 打了。

張さん ba jiang gei 李さん 殴る-PRF

b.\*老张 小李 打了。

張さん 李さん 殴る-PRF

c. 老张 打了 小李。

張さん 殴る-PRF 李さん

(張さんは李さんを殴った。)

(21) a. 小李 {被/ 让/ 叫} 老张 打了。

李さん bei rang jiao 張さん 殴る-PRF

b.\*小李 老张 打了。

李さん 張さん 殴る-PRF

(李さんは張さんに殴られた。)

(22) a. 妈妈 {让/ 叫} 小红 买 菜。

母 rang jiao 紅ちゃん 買う 食材

b.\*妈妈 小红 买 菜。

母 紅ちゃん 買う 食材

(母は紅ちゃんに食材を買わせた。)

(23) a. 大学的建立 使 城市 发展起来。

大学の設立 shi 城市 発展する

b.\*大学的建立 城市 发展起来。

大学の設立 城市 発展する

(大学の設立は都市を発展させた。)

---

る。その理由は、“打（殴る）”と“死（死ぬ）”の動作主は異なっているからであると考えられる。



- (24) a. 两杯酒 就 把 老张 喝醉了。  
 二杯の酒 だけで ba 張さん 飲む-酔う-PRF
- b. \*两杯酒 就 老张 喝醉了。  
 二杯の酒 だけで 張さん 飲む-酔う-PRF
- c. 两杯酒 就 喝醉了 老张。  
 二杯の酒 だけで 飲む-酔う-PRF 張さん  
 (二杯の酒を飲んだだけで、張さんは酔ってしまった。)

中国語のヴォイス構文におけるヴォイス標識は、文中の名詞句が担う意味役割や、話し手の事態に対する主観性を示す。(20a)-(24a)が示すように、ヴォイス構文には、“把”、“将”、“给”、“被”、“让”、“叫”、“使”などのヴォイス標識を用いる。有標ヴォイス構文(20a)-(24a)のヴォイス標識を略する場合、(20b)-(24b)が示すように、文は成立しない。(20)、(24)が示すように、有標ヴォイス構文(20a)、(24a)に対して、同一の出来事を表す(20c)、(24c)のような無標ヴォイス構文がある。しかし、(20a)と(20c)、(24a)と(24c)では、の名詞句、述語動詞句の位置が変わり、単純にヴォイス標識の省略であるとは言えない。異なる構造のヴォイス構文になると言える。そのため、ヴォイス標識はヴォイス構文において核心の構文要素であると考えられる。

- (25) a. 暴躁的 老张 {把/ 将/ 给} 小李 打了。  
 怒りっぽい 張さん ba jiang gei 李さん 殴る-PRF  
 (怒りっぽい張さんは李さんを殴った。)
- b. 老张 {把/ 将/ 给} 小李 打了。  
 張さん ba jiang gei 李さん 殴る-PRF  
 (張さんは李さんを殴った。)
- (26) a. 老张 狠狠地 把 小李 打了。  
 張さん 容赦なく ba 李さん 殴る-PRF  
 (張さんは李さんを容赦なく殴った。)

- b. 老张 把 小李 打了。  
張さん ba 李さん 殴る-PRF  
(張さんは李さんを殴った。)
- (27) a. 小李 曾经 被 人 骗惨了。  
李さん かつて bei 人 騙す-ひどい-PRF  
(李さんはかつて人にひどく騙された。)
- b. 小李 被 人 骗惨了。  
李さん bei 人 騙す-ひどい-PRF  
(李さんは人にひどく騙された。)
- (28) a. 小李 不小心 被 偷了。  
李さん 不注意 bei 盗む-PRF  
(李さんは不注意で盗難にあった。)
- b. 小李 被 偷了。  
李さん bei 盗む-PRF  
(李さんは盗難にあった。)
- (29) a. 妈妈 竟然 叫 5岁的儿子 去 买 菜。  
母 なんと jiao 5歳の息子 行く 買う 食材  
(母はなんと5歳の息子を食材買いに行かせた。)
- b. 妈妈 叫 5岁的儿子 去 买 菜。  
母 jiao 5歳の息子 行く 買う 食材  
(母は5歳の息子を食材買いに行かせた。)
- (30) a. 这件事 真的 使 我 很 痛心。  
このこと 本当に shi 私 とても 悲しむ  
(このことは本当に私を悲しませた。)
- b. 这件事 使 我 很 痛心。  
このこと shi 私 とても 悲しむ  
(このことは私を悲しませた。)

(25a)の“暴躁的(怒りっぽい)”は形容詞であり、(26a)の“狠狠地(容赦なく)”は程度副詞であり、(27a)の“曾经(かつて)”は時間副詞であり、(28a)の“不小心(不注意で)”、(29a)の“竟然(なんと)”、(30a)の“真的(本当に)”は“情态助词(法助動詞)”である。(25b)-(30b)が示すように、形容詞、副詞、助詞などが省略されても文はなおヴォイス構文として成立する。中国語のヴォイス構文における形容詞、副詞、助詞などの構文要素は、事態の中心である動作・行為/影響・変化、参与者に関する情報を補充する部分である。そのため、形容詞、副詞、助詞はヴォイス構文において核心の構文要素ではないと考えられる。

### 2.3.2 語順

言語類型論の観点から、中国語は SVO 型の言語であり、その基本語順は一般的に SVO であると認識されている(呂叔湘 1979; 朱德熙 1980; 木村英樹 2012; 张谊生 2013; 長屋尚典 2015; 平山邦彦 2018)。高橋弥守彦(2017)は中国語における SVO<sup>20</sup>の「S(主語)、O(目的語)」と「V(動詞)」は同じ平面ではなく、「S、O」は文成分という平面、「V」は品詞という平面のものであり、中国語の代表的な文型は「SPO<sup>21</sup>」文型であると主張する。長屋尚典(2015)は「主語とは目的語・斜格語<sup>22</sup>とならぶ文法関係の1つであり、文法項のうち最も統語的に優位に立つ項である」と指摘する。劉丹青(2013:97)は、趙元任の *The Mandarin Primer* (國語入門)<sup>23</sup>では、中国語の主語・目的語は、文中での位置によって認定するべきであると指摘し、このような位置に基づいて主語・目的語を確認する方法は丁声樹(1961)等

---

<sup>20</sup> Sは主語(subject)、Vは動詞(verb)、Oは目的語(object)の略称である。

<sup>21</sup> Pは述語(predicate)の略称である。

<sup>22</sup> 長屋尚典(2015)によれば、斜格語とは、主語や目的語ではなく、文法上特に重要な成分ではないが、状況を説明するための項である。John kicked the ball to Mary in the garden 中の Mary と garden がそれに当たる。

<sup>23</sup> 劉丹青(2013:97)によれば、この著作は、1951年から1952年にかけて、李榮編訳の中国語版が『北京口語語法』と題して国内の言語学誌に連載されたのち、出版された。

で継承されたと指摘する。本論文では、SVO と SPO とどちらの表記が適切であるかという問題には立ち入らないが、対格言語である中国語の基本語順 SVO あるいは SPO における S と O の認定は文法関係に根拠し、構文要素の位置を基準とするべきであるという指摘に賛成する。

英語のヴォイス構文を分析する際、動作主や受動者を示すため、意味的關係に基づいて動作主は主語、受動者は目的語とする研究もある（鷲尾龍一 1997）。しかしながら、趙元任（1951, 1952）は主語・目的語の認定は動作主と受動者という意味的な関係に依拠するのではないと指摘する（劉丹青 2013:97）。朱德熙（1982）は主語が表す事物と動詞が表す動作のあいだの関係にはさまざまなものがあり、主語が表す事物は、動作を行う側（動作主）、動作の影響を受ける側（受動者）、動作主・受動者以外の別の関与者、動作の拠り所となる道具、動作の発生する時間や場所などがあると指摘する。

本論文では、各構文要素の捉え方を以下のように区別する。文法関係の観点から各構文要素を見る場合は、主語（subject）、目的語（object）、述語（predicate）として扱い、品詞の観点から見る場合は、名詞（noun）、動詞（verb）として扱い、意味関係の観点から見る場合は、動作主（agent）、動作対象（patient）、動作（motion）として扱う。

本論文では、意味関係に基づいて各構文要素を見た場合の中心動作の動作主を A、中心動作の動作対象を P、中心動作を M とすると、ヴォイス構文の語順は以下の 4 つのパターンに分けられる。

- (31) 老张 打了 小李。 [AMP]  
張さん 殴る-PRF 李さん  
(張さんは李さんを殴った。)
- (32) 酒 被 老张 喝了。 [PAM]  
酒 bei 張さん 飲む-PRF  
(酒は張さんに飲まれてしまった。)
- (33) 老张 把 小李 打了。 [APM]  
張さん ba 李さん 殴る-PRF  
(張さんは李さんを殴った。)

(34) 两杯酒                    喝醉了                    老张。                    [PMA]

二杯の酒 飲む-酔う-PRF 張さん

(二杯の酒で張さんは酔ってしまった。)

(31)では、中心動作“打（殴る）”の動作主は“老张（張さん）”、動作対象は“小李（李さん）”であり、語順はAMPである。(32)では、“酒（酒）”は文頭に位置するが、中心動作“喝（飲む）”との意味関係から見ると、“酒（酒）”は動作対象であり、“老张（張さん）”は動作主であり、語順はPAMである。(33)では、文頭に位置する“老张（張さん）”は動作主、動作対象である“小李（李さん）”は中心動作“打（殴る）”の前に位置する。つまり、(33)の語順はAPMである。(34)では、文頭に位置する“两杯酒（二杯の酒）”は中心動作“喝（飲む）”の動作対象、動作主である“老张（張さん）”は中心動作“喝（飲む）”の後に位置する。つまり、(34)の語順はPMAである。

つまり、組合せ上可能な語順AMP、PAM、APM、PMA、MPA、MAPの6種のうち、中国語のヴォイス構文として実際に現れる語順はAMP、PAM、APM、PMAの4種があり、日本語、英語に比べると、多様であると言える。また、「使役主—被使役主」、「受影主—動作主」のような典型的には「動作主—動作対象」という意味関係が捉えられないヴォイス構文も本論文の研究対象としている。なお、本論文は中国語ヴォイス構文の語順の多様性の指摘のみにとどめ、AやM及びPという表記を用いてのヴォイス構文の分析は行わない。

### 2.3.3 表示方法

本論文は、構造に基づいて中国語のヴォイス構文を分析する。そのため、便宜上、中国語のヴォイス構文における各核心の構文要素をその文法的な役割と語順によって、ヴォイス構文の構造を(35)-(36)のように表示する。

(35) N<sub>1</sub> VP N<sub>2</sub>

(36) N<sub>1</sub> vm N<sub>2</sub> VP

ここで、N<sub>1</sub> は文中の一番目に位置する名詞句を表し、N<sub>2</sub> は文中の二番目に位置する名詞句を表し、VP は述語動詞句を表し、vm<sup>24</sup>はヴォイス標識を表す。

## 2.4 中国語のヴォイス構文を体系化する基準

本論文のヴォイスの定義が示したように、ヴォイスは各構文要素の文法関係、名詞句の表す参加者の意味役割と密接に関わる文法現象である。また、参加者の意味役割はその参加者と述語動詞句の表す動作・行為/影響・変化の意味関係によって判断するとされる。そのため、本節では、具体的にはヴォイス構文における核心の各構文要素の文法関係、参加者の意味役割、述語動詞句の類型という3点を中国語ヴォイス構文を体系化する基準として検討し、それぞれに関する概念の定義や分類を明確にする。

### 2.4.1 各構文要素の文法関係

長屋尚典（2015）によれば、文法関係は節を構成する名詞句が担う文法機能のことであり、具体的には主語、目的語、斜格語のことを指す。主語は文法項のうち最も統語的に優位に立つ項である。文法関係は格標識、語順、一致<sup>25</sup>の3つ方法で主に示される。

中国語には格標識、動詞の語形変化がないため、文の主語は主に語順で表される。趙元任（1951, 1952）が「主語・目的語は、文中での位置によって認定すべきである」と指摘し、丁声树（1961）等に継承された（劉丹青

---

<sup>24</sup> 伝統的な品詞の観点から見ると、ヴォイス標識は名詞句、動詞句と同じ平面の文法概念ではないため、ヴォイス標識を小文字の英語 vm で表示する。

<sup>25</sup> 長屋尚典（2015）によれば、一致とは、ある語（言葉）が別の語の文法範疇に応じて屈折する現象のことであり、呼応とも呼ばれる。例えば、英語の be 動詞は主語が I ならば現在形は am、you ならば are となる現象である。

2013:97)。本論文はこのように位置に基づいて主語・目的語を確認する方法に賛成する。そのため、名詞句の位置は「N<sub>1</sub>」、「N<sub>2</sub>」で表示する。「N<sub>1</sub>」と「N<sub>2</sub>」の相違について、文法関係の観点から解釈すれば、「N<sub>1</sub>」は文頭主語の位置に立つ名詞句、「N<sub>2</sub>」は文中の二番目に位置する（主語以外の位置）名詞句である。

#### 2.4.2 参加者の意味役割

意味役割は、事態の参加者が、その事態の中で果たしている役割である（石塚政行 2015）。中国語のヴォイス構文において、各名詞句の表す参加者の意味役割は述語動詞との関係によって判断される。そのため、2つの名詞句の位置関係と意味役割を基準にして中国語のヴォイス構文を体系化する。

ヴォイス構文における名詞句の表す参加者の意味役割については、言語によっても、研究者によっても、捉え方や用語が異なっている。本論文は、石塚政行（2015）、范晓（2001）に基づいて、ヴォイスという言語現象に関わる意味役割を(37)のように定める。

#### (37) 本論文における参加者の意味役割

〈動作主〉：他動詞・自動詞の V の表す動作・行為を行う主体。

〈動作対象〉：他動詞の V の表す動作・行為の対象。

〈受影主〉：ほかの参加者から間接的な影響を受ける主体。

〈使役主〉：V の表す動作・行為の遂行に何らかの働きかけをする主体。

〈被使役主〉：何らかの働きかけを受けて、V の表す動作・行為を行う主体。

〈共同参加者〉：V の表す相互動作・相互行為を行う主体。

主格や目的格などの「格」と、その意味役割の関係は一対一の対応関係ではない。むしろ、1つの格形式が複数の意味役割を表す方が普通である（長屋尚典 2015:200）。中国語のヴォイス構文では、1つの名詞句が複数の意味役割を担うこともある。その場合、意味役割の優先順位を決めることが

ヴォイス構文の特性を明らかにするために必要である。

### 2.4.3 述語動詞句の類型

本論文における参与者の意味役割の定義(38)が示すように、各種のヴォイス構文の N<sub>1</sub> の担う意味役割は述語動詞句の中の動詞の「自・他」と関わっている。自動詞、他動詞という統語的特性による分類は項構造との関係が深い。基本的に、項構造で項を 1 つ指定された動詞は自動詞と呼ばれ、2 つ指定された動詞は他動詞と呼ばれる（長屋尚典 2015）。

中国語では、動詞の語形変化がないため、“开（開ける/開く）”、“气（怒らせる/怒る）”、“笑（あざ笑う/笑う）”などの動詞は文脈により、他動詞としても、自動詞としても用いられる。本論文では、ある動詞が他動詞として用いられる際、その文において当該の動詞を「他動詞」として扱い。ある動詞が自動詞として用いられる際、その文において当該の動詞を「自動詞」として扱う。中国語では、もともと形容詞である“红（赤い）”、“干净（きれい）”、“好（良い）”などは“红（赤くなる）”、“干净（きれいになる）”、“好（良くなる）”のように自動詞として用いる例がしばしば見られる。本論文では、ある形容詞が自動詞として用いられる場合、その文における当該の形容詞を「自動詞」として扱う。

中国語のヴォイス構文の述語動詞句において、述語動詞の補語が動詞の場合、述語動詞と補語動詞の動作主が同じ参与者であり、あるいは異なる参与者であるという複雑な現象が見られる。本論文では、“打（殴る）”のような単音節の他動詞、及び“摔打（叩き落とす）”のような 2 つの単音節の他動詞の動作主が同じ参与者である二音節の他動詞を用いる述語動詞句を、Vt で表示する。“哭（泣く）”のような単音節の自動詞、及び“哭醒（泣いて起きる）”のような 2 つの単音節の自動詞の動作主が同じ参与者である二音節の自動詞を用いる述語動詞句を、Vi で表示する。さらに、“哭醒（泣かれて起きる/泣いて起こさせる）”のような 2 つの単音節の自動詞の動作主が異なる参与者である二音節動詞<sup>26</sup>を用いる述語動詞句を、ViVi で表示する。

---

<sup>26</sup> 本論文では、二音節動詞の動作主が異なっている場合、二音節動詞のうちの前の位



“打哭（殴られて泣いた/殴って泣かせた）”のような1つの他動詞と1つの自動詞の組み合わせ、動作主が異なる参与者である二音節動詞を用いる述語動詞句を、VtViで表示する。

ヴォイス構文における名詞句が表す参与者の意味役割を判断する際には、述語動詞句の中の全ての動詞の自他性を明確にする必要がある。そのため、本論文は、述語動詞句VPを(38)のように分類し、それを中国語のヴォイス構文を体系化する基準とする。

(38) 中国語のヴォイス構文におけるVPの種類

VP	{	Vt	例:打（殴る）、摔打（叩き落とす）
		Vi	例:哭（泣く）、哭醒（泣いて起きる）
		VtVt	（存在しない）
		ViVi	例:哭醒（泣かれて起きる/泣いて起こさせる）
		VtVi	例:打哭（殴られて泣いた/殴って泣かせた）
		ViVt	（存在しない）

動作主が異なるVtVt構造の例、動作主が異なるViVt構造の例は実際には存在しない。従って、(38)が示すように、中国語のヴォイス構文におけるVPは、Vt、Vi、ViVi、VtViという4つのパターンに分類される。

## 2.5 中国語のヴォイス構文の体系

本節では、まず、例文を観察しながら、中国語のヴォイス構文の分類を検討する。次に、前節で示した基準に基づいて研究対象となるヴォイス構文を体系化する。最後に、体系に基づいて中国語の能動文、受身文、使役文を定義し、これらのヴォイス構文の下位分類を検討する。

---

置にある単音節動詞を述語動詞として扱う。

### 2.5.1 中国語のヴォイス構文の種類

中国語にもヴォイス現象が認められて以来、能動文、受身文、使役文をヴォイス構文の下位分類と見なす研究はしばしば見られる(木村英樹 2000; 中島悦子 2007; 高橋弥守彦 2012; 佐々木勲人 2013; 楊凱榮 2018)。しかし、統一的な基準でヴォイス構文を能動文、受身文、使役文に分類する研究は見られない。本論文は、 $N_1$  が表す参与者の意味役割に基づいて、中国語のヴォイス構文を分類する。

(39)  $N_1$ : 〈動作主〉

例: a. 老张 打了 小李。

張さん 殴る-PRF 李さん

(張さんは李さんを殴った。)

b. 老张 打哭了 小李。

張さん 殴る-泣く-PRF 李さん

(張さんは李さんを殴って泣かせた。)

c. 老张 把 小李 打哭了。

張さん ba 李さん 殴る-泣く-PRF

(張さんは李さんを殴って泣かせた。)

d. 孩子 哭醒了 妈妈。

子供 泣く-覚める-PRF 母

(子供が泣いてお母さんを起こしてしまった。)

e. 孩子 把 妈妈 哭醒了。

子供 ba 母 泣く-覚める-PRF

(子供が泣いてお母さんを起こしてしまった。)

(39a)-(39c)の  $N_1$  “老张 (張さん)” は述語動詞としての他動詞 Vt “打 (殴る)” という動作の〈動作主〉、(39d)-(39e)の  $N_1$  “孩子 (子供)” は自動詞 Vi “哭 (泣く)” という動作の〈動作主〉である。本論文では、(39a)-(39e) を能動文として扱う。

(39c)、(39e)のような N<sub>1</sub> “老张 (張さん)”、“孩子 (子供)” が述語動詞 Vt “打 (殴る)”、Vi “哭 (泣く)” という動作の〈動作主〉で、N<sub>2</sub> “小李 (李さん)”、“妈妈 (お母さん)” が補語の動詞 “哭 (泣く)”、“醒 (覚める)” という動作の〈動作主〉である場合、当該の構文は能動文か使役文かについて、過去の研究では見解が統一されていない。木村英樹(2012)は“小红把我拽倒了 (シヤオホンは私を引き倒した)。”のような N<sub>2</sub> についての結果表現がある“把”構文を「執行使役文」と呼ぶ。これは一般的言語学で言う「使役<sup>27</sup>」の概念を根拠にしており、原因事象と結果事象を持つ文は使役文であるという考え方である。本論文で扱う使役文は、ヴォイス構文としての使役文である。従って、使役文であるのか、能動文であるのか、受身文であるのかは、統一的な基準、すなわち N<sub>1</sub> の意味役割によって判別すべきである。そのため、本論文では、N<sub>1</sub> が〈動作主〉である(39c)、(39e)を「能動文」として扱う。

(40) N<sub>1</sub>: 〈動作対象〉 / 〈受影主〉

例: a. 小李 被 老张 打了。

李さん bei 張さん 殴る-PRF

(李さんは張さんに殴られた。)

b. 老张 跑了 老婆。

張さん 逃げる-PRF 妻

(張さんは妻に逃げられた。)

c. 妈妈 被 孩子 哭醒了。

母 bei 子供 泣く-覚める-PRF

(お母さんは子供に泣かれて目が覚めた。)

---

<sup>27</sup> 言語学で言う「使役」は、対応する英語表現 causation (cause は「原因(となる)」を意味する)と同じく、因果関係を意味の中核とする用語であると西村義樹(2015)は指摘する。

(40a)の N<sub>1</sub> “小李 (李さん)” は他動詞 Vt “打 (殴る)” という動作の〈動作対象〉、(40b)の N<sub>1</sub> “老张 (張さん)” は自動詞 Vi “跑 (逃げる)” という動作の〈受影主〉、(40c)の N<sub>1</sub> “妈妈 (お母さん)” は自動詞 Vi “哭 (泣く)” という動作の〈受影主〉である。本論文では、(40a)-(40c)を受身文<sup>28</sup>として扱う。

(41) N<sub>1</sub>: 〈使役主〉 / 〈使役主〉兼 〈動作対象〉

例: a. 妈妈 让 小红 去 买 菜。

母 rang 紅さん 行く 買う 食材  
(母は紅さんを食材買いに行かせた。)

b. 这件事 使 小红 很 生气。

このこと shi 紅さん とても 怒る  
(このことは紅さんを怒らせた。)

c. 两杯酒 喝醉了 老王。

二杯の酒 飲む-酔う-PRF 張さん  
(二杯の酒で、王さんは酔ってしまった。)

d. 你 真是 把 我 想死了。

あなた 本当に ba 私 思う-死ぬ-PRF  
(私、死ぬほどあなたを思っていたのよ。)

(41a)の N<sub>1</sub> “妈妈 (お母さん)” は VP “去买菜 (食材を買う)” という行為の〈使役主〉、(41b)の N<sub>1</sub> “这件事 (このこと)” は VP “生气 (怒る)” という行為の〈使役主〉、(41c)の N<sub>1</sub> “两杯酒 (二杯の酒)” は VP “喝醉 (飲んで酔う)” の中の他動詞 “喝 (飲む)” という動作の〈動作対象〉であると同時に、自動詞 “醉 (酔う)” という結果の原因として捉えられ、〈使役主〉である。(41d)の N<sub>1</sub> “你 (あなた)” は VP “想死 (死ぬほど思う)” 中の他動詞 “想 (思う)” という動作の〈動作対象〉であると同時に、自動詞 “死 (死ぬ)” という結果の原因として捉えられ、〈使役主〉である。本論文では、

---

<sup>28</sup> 本論文では、「受動文」という用語ではなく、「受身文」という用語を用いる。

(41)を使役文として扱う。

ここで、(41c)-(41d)など、N<sub>1</sub>が〈動作対象〉であると同時に〈使役主〉でもあるような例文はどのような理由で「使役文」として扱われるのかについて説明する。(41c)-(41d)のVPは他動詞と自動詞で「動作・行為/影響・変化」を表す。N<sub>1</sub>は他動詞の表す動作の〈動作対象〉であり、N<sub>2</sub>は他動詞の表す動作の〈動作主〉であると同時に、自動詞の〈動作主〉でもある。そのため、(41c)-(41d)は使役文として扱われる。一方、(41c)-(41d)の自動詞から〈動作対象〉であるN<sub>1</sub>への影響・変化を表さず、〈動作主〉であるN<sub>2</sub>への影響・変化を表すという点によって、(41c)-(41d)は受身文として扱われない。

(42) N<sub>1</sub>: 〈共同参与者〉

例: a. 小明 和 小红 结婚了。

明さん と 紅さん 結婚する-PRF

(明さんと紅さんは結婚した。)

b. 小王 跟 小李 打架了。

王さん と 李さん けんかする-PRF

(王さんと李さんはけんかした。)

(42a)のN<sub>1</sub>“小明(明さん)”とN<sub>2</sub>“小红(紅さん)”は互いに結婚相手であり、N<sub>1</sub>“小明(明さん)”はV“结婚(結婚する)”という行為の〈共同参与者〉、(42b)のN<sub>1</sub>“小王(王さん)”とN<sub>2</sub>“小李(李さん)”は互いにけんかの相手であり、N<sub>1</sub>“小王(王さん)”はV“打架(けんかする)”という動作の〈共同参与者〉である。本論文では、(42)を相互文として扱う。

(43) N<sub>1</sub>: 〈動作主〉兼〈動作対象〉

例: a. 小王 洗了洗 手。

王さん 洗う-PRF-洗う 手

(王さんは軽く手を洗った。)

- b. 小明 把 脚 崴了。  
 明さん ba 足 挫く-PRF  
 (明さんは足を挫いた。)

(43a)の N<sub>1</sub> “小王 (王さん)” は他動詞 Vt “洗 (洗う)” という動作の〈動作主〉であると同時に、“洗 (洗う)” という動作の影響を受ける〈動作対象〉である。(43b)の N<sub>1</sub> “小明 (明さん)” は他動詞 Vt “崴 (挫く)” という動作の〈動作主〉であると同時に、“崴 (挫く)” という動作の影響を受ける〈動作対象〉である。本論文では、(43)を再帰文として扱う。

本論文は、中国語のヴォイス構文を(44)のように分類する。

(44) 中国語のヴォイス構文の分類:

N<sub>1</sub>: 〈動作主〉 → [能動文]

事態において、N<sub>1</sub> の担う意味役割が〈動作主〉である場合、その文は能動文となる。

N<sub>1</sub>: 〈動作対象〉 / 〈受影主〉 → [受身文]

事態において、N<sub>1</sub> の担う意味役割が〈動作対象〉、あるいは〈受影主〉である場合、その文は受身文となる。

N<sub>1</sub>: 〈使役主〉 / 〈使役主〉兼〈動作対象〉 → [使役文]

事態において、N<sub>1</sub> の担う意味役割が〈使役主〉、あるいは〈使役主〉と〈動作対象〉を兼ねる場合、その文は使役文となる。

N<sub>1</sub>: 〈共同参与者〉 → [相互文]

事態において、N<sub>1</sub> の担う意味役割が〈共同参与者〉である場合、その文は相互文となる。

N<sub>1</sub>: 〈動作主〉兼〈動作対象〉 → [再帰文]

事態において、N<sub>1</sub> の担う意味役割が〈動作主〉と〈動作対象〉を兼ねる場合、その文は再帰文となる。

### 2.5.2 中国語のヴォイス構文の体系表

本章 2.2 節、2.3 節で論じた構造に関する内容と、本章 2.4 節で示した基

準に基づいて、中国語のヴォイス構文<sup>29</sup>を表 2-2 のように体系化する。

表 2-2 中国語のヴォイス構文の体系表

	無標ヴォイス構文	有標ヴォイス構文
能動文	⊙ <sub>N<sub>1</sub></sub> Vt N <sub>2</sub>	⊙ <sub>N<sub>1</sub></sub> vm N <sub>2</sub> Vt
	N <sub>1</sub> Vi N <sub>2</sub>	N <sub>1</sub> vm N <sub>2</sub> Vi
	⊙ <sub>N<sub>1</sub></sub> VtVi ⊙ <sub>N<sub>2</sub></sub>	⊙ <sub>N<sub>1</sub></sub> vm ⊙ <sub>N<sub>2</sub></sub> VtVi
	▽ <sub>N<sub>1</sub></sub> ViVi ⊙ <sub>N<sub>2</sub></sub>	▽ <sub>N<sub>1</sub></sub> vm ⊙ <sub>N<sub>2</sub></sub> ViVi
受身文	N <sub>1</sub> Vt N <sub>2</sub>	N <sub>1</sub> vm ⊙ <sub>N<sub>2</sub></sub> Vt
	N <sub>1</sub> Vi ⊙ <sub>N<sub>2</sub></sub>	N <sub>1</sub> vm N <sub>2</sub> Vi
	N <sub>1</sub> VtVi N <sub>2</sub>	▽ <sub>N<sub>1</sub></sub> vm ⊙ <sub>N<sub>2</sub></sub> VtVi
	N <sub>1</sub> ViVi N <sub>2</sub>	▽ <sub>N<sub>1</sub></sub> vm ⊙ <sub>N<sub>2</sub></sub> ViVi
使役文	N <sub>1</sub> Vt N <sub>2</sub>	N <sub>1</sub> vm ⊙ <sub>N<sub>2</sub></sub> Vt
	N <sub>1</sub> Vi N <sub>2</sub>	N <sub>1</sub> vm ⊙ <sub>N<sub>2</sub></sub> Vi
	N <sub>1</sub> VtVi ⊙ <sub>N<sub>2</sub></sub>	N <sub>1</sub> vm ⊙ <sub>N<sub>2</sub></sub> VtVi
	N <sub>1</sub> ViVi N <sub>2</sub>	N <sub>1</sub> vm N <sub>2</sub> ViVi

<sup>29</sup> 中国語では、相互文は、“结婚（结婚する）”、“打架（けんかする）”、“约会（デートする）”のような「相互に行く」という意味を有する動詞を伴う場合に限定されている。また、再帰文も、“小王（王さん）”と“小王的手（王さんの手）”、“小明（明さん）”と“小明的脚（明さんの足）”のような N<sub>1</sub> と N<sub>2</sub> が「全体と部分」の関係を表す場合に限定されている。つまり、相互文と再帰文については、生産性が低いため、本論文では詳しく論じない。

表 2-2 では○印は、当該の名詞句の表す参加者が何らかの他動詞の動作・行為を行う〈Vt 主体〉であることを示す。▽印は、当該の名詞句の表す参加者が何らかの自動詞の動作・行為の〈Vi 主体〉であることを示す。[VtVi]、[ViVi] 構造において、述語動詞の表す動作・行為の動作主を実線の○印と▽印で表し、補語としての動詞の動作主を点線の▽印で表す。網掛け表示は、その構文が実際には存在しないことを示す。

表 2-2 が示すように、本論文では、中国語のヴォイス構文を大きく三つに分けて能動文、受身文、使役文に分類する。また、構造に基づいて、中国語のヴォイス構文における核心の構文要素の語順、ヴォイス標識の有無、名詞句と述語動詞句の意味的關係、述語動詞句の類型を、 $N_1$ 、 $N_2$ 、 $v_m$ 、○印、▽印、Vt、Vi などに表示し、各ヴォイス構文の構造上の対応・關係の關係が直観的に理解できるように表現する。

### 2.5.3 体系に基づく能動文、受身文、使役文の定義

ヴォイスは述語動詞を中核とする言語現象である。そのため、本論文では、主に述語動詞の自他性、述語動詞の位置、すなわち、実線の○印と実線の▽印の位置に基づいて、各ヴォイス構文の構造を分析する。

表 2-2 が示すように、能動文の諸構造は、受身文、使役文の諸構造と重なることがない。能動文  $N_1$  は述語動詞である他動詞の動作・行為を行う〈Vt 主体〉、あるいは述語動詞である自動詞の〈Vi 主体〉である。言い換えれば、実線の○印と実線の▽印が  $N_1$  に付く場合、すなわち、 $\textcircled{N_1}$  あるいは  $\nabla N_1$  と表示されている場合は、当該の構文は必ず能動文である。これに対して、受身文、使役文の  $N_1$  は絶対に述語動詞の表す動作・行為の〈動作主〉ではないため、実線の○印と実線の▽印が  $N_1$  に付くことはない。つまり、 $N_1$  が述語動詞句の〈動作主〉ということは能動文の本質であると言える。従って、本論文では、中国語におけるヴォイス構文の体系という総合的視座から、能動文を(45)のように定義する。



(45) 本論文における能動文:

中国語の能動文とは、2つ以上の参加者が関わっている動作・行為を中心とする事態を表す構文において、主語の位置にある名詞句の担う意味役割が中心動作の〈動作主〉となる文である。

表 2-2 が示すように、 $[N_1 \text{ vm } \textcircled{N_2} \text{ Vt}]$ 、 $[N_1 \text{ vm } \textcircled{N_2} \text{ VtVi}]$ という構造は受身文と使役文に共通である。そのため、文脈が不明な場合や文中に明示されていない場合、その文が受身文であるのか、それとも使役文であるのかについては、曖昧性が生じることがある。しかし、 $[N_1 \text{ vm } \textcircled{N_2} \text{ VtVi}]$ 構造を詳しく見ると、受身文と使役文における  $V_i$  の〈動作主〉の位置が違う。受身文では、 $\nabla N_1$  となり、使役文では  $\nabla N_2$  となる。また、受身文と使役文の構造の違いを観察することによって、受身文と使役文の本質をまとめることができると考えられる。

受身文において、 $[N_1 \text{ Vi } \nabla N_2]$ 、 $[N_1 \text{ vm } \nabla N_2 \text{ ViVi}]$ という構造は特有である。 $[N_1 \text{ Vi } \nabla N_2]$ の場合、“小明死了父亲（明さんは父に死なれた。）”のような例文が示すように、 $N_1$  “小明（明さん）は述語動詞  $V_i$  “死（死ぬ）”から影響を受ける立場である。この場合、 $N_1$  と  $N_2$  は必ず “小明（明さん）” と “小明的父亲（明さんの父）” のように親密な人間関係である。また、 $[N_1 \text{ vm } \nabla N_2 \text{ ViVi}]$ 、の場合、“妈妈让孩子哭醒了（お母さんは子供に泣かれて目が覚めた。）”のような例文が示すように、 $N_1$  “妈妈（お母さん）は述語動詞  $V_i$  “哭（泣く）”から影響を受ける立場である。 $VP$  が二音節である  $VtVi$ 、 $ViVi$  の場合、受身文の  $N_1$  は必ず述語動詞以外の動詞の〈動作主〉となる。つまり、受身文の  $N_1$  が直接的な影響を受けるか、間接的な影響を受けるかに関わらず、 $N_1$  は  $VP$  の表す動作・行為/影響・変化に対して〈動作対象〉や自動詞の〈動作主〉として、構造上直接  $VP$  と関連しているものである。従って、本論文では、中国語におけるヴォイス構文の体系という総合的視座から、受身文を(46)のように定義する。

(46) 本論文における受身文:

中国語の受身文とは、2つ以上の参加者が関わっている動作・行為を中心とする事態を表す構文において、主語の位置にある名詞句の担う意味役割が中心動作の〈動作対象〉あるいは中心動作から間接影響を受ける〈受影主〉となる文である。

使役文においては、 $N_1$ は絶対にVPの〈動作主〉にならない、 $N_2$ がVPの〈動作主〉である。VPが二音節であるVtViの場合でも、受身文と異なっており、使役文の $N_2$ は同時にVtとViの〈動作主〉となる。つまり、 $N_1$ は $N_2$ へ何らかの働きかけをするが、その働きかけを文中で具体的な動詞を用いて表現しないということが使役文の本質であると言える。従って、本論文では、中国語におけるヴォイス構文の体系という総合的視座から、使役文を(47)のように定義する。

(47) 本論文における使役文:

中国語の使役文とは、2つ以上の参加者が関わっている動作・行為を中心とする事態を表す構文において、主語の位置にある名詞句の担う意味役割が〈使役主〉あるいは〈使役主〉兼〈動作対象〉となる文である。

上述の定義に基づけば、中国語のあるヴォイス構文が能動文であるのか、受身文であるのか、使役文であるのかは明確に判定できる。

#### 2.5.4 能動文、受身文、使役文の下位分類

従来の研究では、“主动宾句 (SVO 構文)”、“把”構文、“被”構文、“叫”を用いる受身文、“让”を用いる受身文、“意义上的被动句 (意味上の受身文)”、直接受身文、間接受身文、被害受身文、中立受身文、受益受身文、指示使役文、許容使役文、誘発使役文、執行使役文、“让”を用いる使役文、“叫”を用いる使役文、“使”を用いる使役文などが示すように、能動文、受身文、使役文はさまざまな基準によって分類され呼ばれている。その中の、被害受身文、中立受身文、受益受身文、指示使役文、許容使役文、誘発使役文、執行使役文は意味に基づく分類であるが、こうした下位分類は

統一的な意味基準での分類結果ではない。つまり、意味の側面から統一的な基準で能動文、受身文、使役文を再分類して研究することは難しいと思われる。直接受身文、間接受身文は主に述語動詞の自他性という統語特性に着目した分類であるが、こうした形式的観点から能動文や使役文を分類する研究はなかったと言える。形式の側面から見ると、“主动宾句”は無標能動構文、“把”構文は“把”能動構文、“被”構文は“被”受身構文、“叫”を用いる受身文は“叫”受身構文、“让”を用いる受身文は“让”受身構文、“意义上的被动句（意味上の受身文）”は無標受身構文、“让”を用いる使役文は“让”使役構文、“叫”を用いる使役文は“叫”使役構文、“使”を用いる使役文は“使”使役構文を指す。これは統一的な基準、すなわちヴォイス標識に基づく分類である。そのため、形式の側面から、ヴォイス標識を基準として、能動文、受身文、使役文を図 2-1、図 2-2、図 2-3 のように各具体的なヴォイス構文に分類することができる。

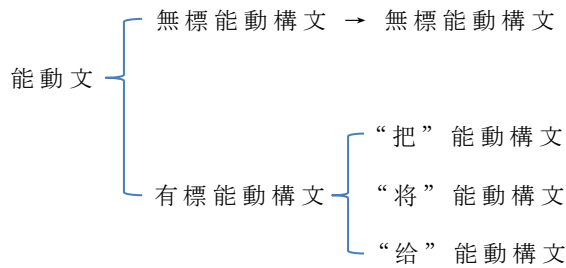


図 2-1 能動文の下位分類

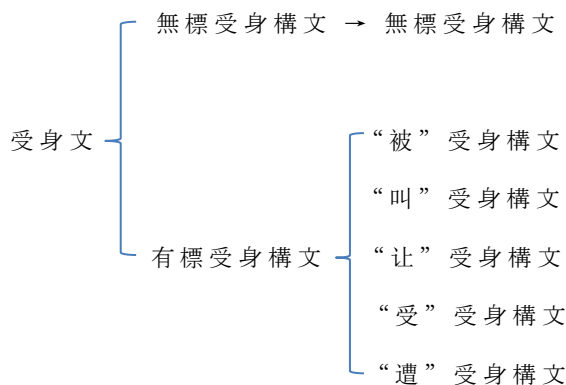


図 2-2 受身文の下位分類

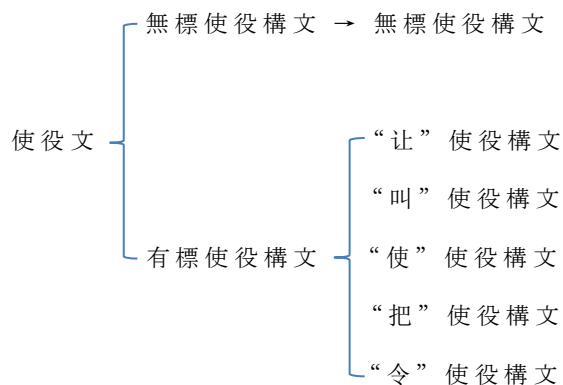


図 2-3 使役文の下位分類

図 2-1、図 2-2、図 2-3 が示すように、中国語では、能動文を無標能動構文、“把”能動構文、“将”能動構文、“给”能動構文に分類することができ、受身文を無標受身構文、“被”受身構文、“叫”受身構文、“让”受身構文、“受”受身構文、“遭”受身構文に分類することができ、使役文を無標使役構文、“叫”使役構文、“让”使役構文、“使”使役構文、“把”使役構文、“令”使役構文に分類することができる。

## 2.6 中国語のヴォイス構文の体系上の特徴

本節では、中国語のヴォイス構文の体系上の特徴を、日本語の対応する構文の特徴と比較対照することで、その統語的特徴と意味的特徴を明らかにする。

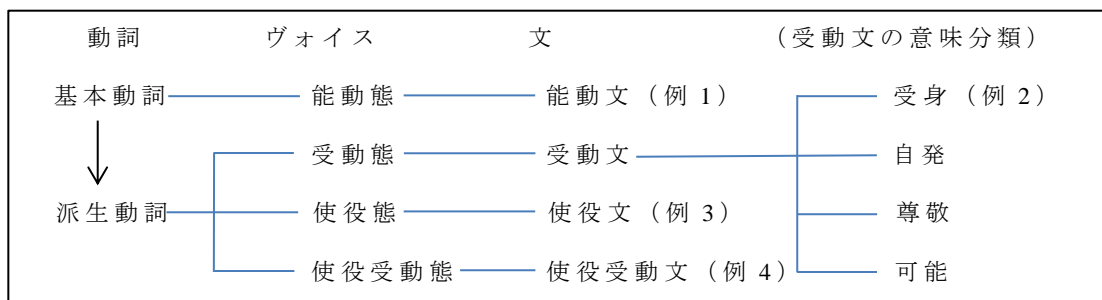
### 2.6.1 統語的特徴

日本語では、主に「語順の入れ替え」と「動詞の語形変化」という文法的手段で各ヴォイス構文の形式上の区別を表現する。ここで、「語順の入れ替え」はヴォイス構文における各構文要素の前後関係の変化を指す。「動詞の語形変化」は、「食べる、食べられる、食べさせる」のように、動詞語彙素が使用される文によってさまざまな語形に変化することを指す。

高橋弥守彦（2012）は日本語のヴォイスは、1つの出来事を異なる角度から述べる動詞の体系的な表現形式であると指摘した。つまり、能動態、受動態、使役態、使役受動態などのヴォイスにより、能動文、受身文、使役文、

使役受動文など異なる文を作ることができるが、基本的な文意を等しくすることができる。その関係を体系化するとともに、以下のように図表化している。

表 2-3 日本語のヴォイスと文との体系



(例 1: 太郎が次郎を褒めた。)

(例 2: 次郎は太郎に褒められた。)

(例 3: 母親が太郎に次郎を褒めさせた。)

(例 4: 太郎は母親に次郎を褒めさせられた。)

(高橋弥守彦 2012:108)

李藝 (2017) は日本語のヴォイスの諸形式を図 2-4 のようにまとめる。

無標	S O V-Ø	能動態
有標	S O V-させる	使役態
	O S V-られる	受動態/自発態/可能態

図 2-4 日本語のヴォイス形式

(李藝 2017:11)

表 2-3 と図 2-4 によれば、日本語の能動文、受動文、使役文、使役受動文と、諸形式の対応関係は以下のようにまとめられる。

- 能動文 ————— V-∅ (無標)
- 受動文 ————— V-られる (有標)
- 使役文 ————— V-させる (有標)
- 使役受動文 ————— V-させられる (有標)

図 2-5 日本語のヴォイス構文の体系と諸形式

図 2-5 が示すように、日本語の能動文は「V-∅ (動詞の基本形)」を用いる構文と対応し、受身文は「V-られる」を用いる構文と対応し、使役文は「V-させる」を用いる構文と対応し、使役受動文は「V-させられる」を用いる構文と対応する。つまり、日本語の能動文、受動文、使役文、使役受動文は、それぞれ 1 つの形式で表現される。

中国語は、「動詞の語形変化」がないので、主に「語順の入れ替え」と「∅ (ヴォイス標識を用いない) /ヴォイス標識」という統語的操作で各ヴォイス構文の形式上の区別を表現する。「∅/ヴォイス標識」という統語的操作は、ヴォイス標識を用いない、あるいは異なるヴォイス標識を用いるということを指す。2.5.4.節の図 2-1、図 2-2、図 2-3 が示したように、中国語のヴォイス標識は多様である。従って、中国語の能動文、受動文、使役文と、それぞれの表現形式の対応関係は以下のようにまとめられる。

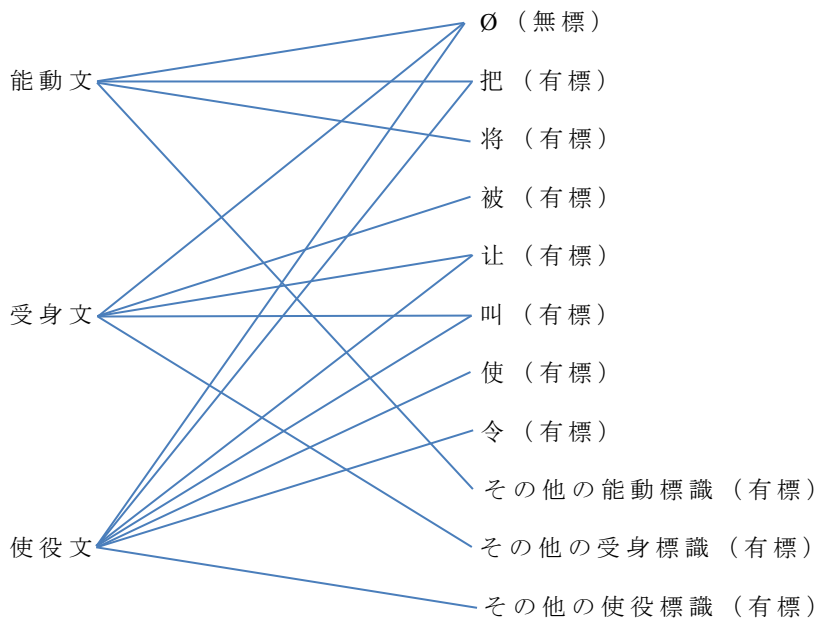


図 2-6 中国語のヴォイス構文の体系と諸形式

図 2-6 が示すように、中国語の能動文は、ヴォイス標識を用いない構文、“把”を用いる構文、“将”を用いる構文などの形式で表現される。中国語の受身文は、ヴォイス標識を用いない構文、“被”を用いる構文、“让”を用いる構文、“叫”を用いる構文などの形式で表現される。中国語の使役文は、ヴォイス標識を用いない構文、“把”を用いる構文、“让”を用いる構文、“叫”を用いる構文、“使”を用いる構文、“令”を用いる構文などの形式で表現される。つまり、中国語の能動文、受身文、使役文は、それぞれ 4 つ以上の形式で表現され、“把”を用いる構文、“叫”を用いる構文などの共用の形式もある。

以上の分析に基づいて、中国語のヴォイス構文の体系は複雑で、その形式は多様であるという統語的特徴があると言える。

### 2.6.2 意味的特徴

前節の(56)図 2-6「中国語のヴォイス構文の体系と諸形式」に示したように、中国語の能動文、受身文、使役文にはそれぞれ 4 つ以上の形式がある。Bolinger (1977) は、“[...] the natural condition of a language is to preserve one form for one meaning, and one meaning for one form.”と述べ、形式が違えば意味にも違いがあり、意味が違えば形式にも違いがあり、意味と形式は 1 対 1 の対応をなすと主張している。中国語も、長い時間を経て、洗練され、不要な語や構造は消えて必要なものが残ったと思われる。その結果、現代中国語において使用されている形式上異なる各ヴォイス構文は必ず「能動」、「受身」、「使役」以外の意味的・機能的相違を含むと考えられる。

中国語では、「能動」、「受身」、「使役」などの意味によって文を区別したうえで、話し手の主観性によって“把”能動構文、“将”能動構文、無標能動構文、“被”受身構文、“让”受身構文、“叫”受身構文、無標受身構文、“让”使役構文、“叫”使役構文、“使”使役構文、“把”使役構文、無標使役構文などの具体的なヴォイス構文が選択される。

このように、中国語のヴォイス構文の体系は複雑で、その中のそれぞれの具体的な構文は、「能動」、「受身」、「使役」以外にも多くの意味を表し分けていると考えられる。

### 2.6.3 各ヴォイス構文の構造上の対応・関連

2.5.2.節の表 2-2「中国語のヴォイス構文の体系表」が示すように、中国語の能動文と受身文の構造は部分的に対応する。対応する部分は、 $[(N_1) \text{ vm } N_2 \text{ Vt}]$  (能動文) と  $[N_1 \text{ vm } (N_2) \text{ Vt}]$  (受身文)、 $[(N_1) \text{ vm } \nabla N_2 \text{ VtVi}]$  (能動文) と  $[\nabla N_1 \text{ vm } (N_2) \text{ VtVi}]$  (受身文)、 $[\nabla N_1 \text{ vm } \nabla N_2 \text{ ViVi}]$  (能動文) と  $[\nabla N_1 \text{ vm } \nabla N_2 \text{ ViVi}]$  (受身文) という構造である。興味深いのは、これらの構造は全てが有標ヴォイス構文であるということである。無標ヴォイス構文の4つ構造において、能動文と受身文は互いに補完している。このように、中国語の能動文と受身文の関係は構造上〈不完全対応〉の関係であることが分かる。従って、中国語では、受身文は能動文から転換されるものではないと考えられる。

述語動詞の表す動作・行為の〈動作主〉の位置のみを考える場合、中国語の受身文と使役文は共に  $[N_1 \text{ vm } (N_2) \text{ Vt}]$  と  $[N_1 \text{ vm } (N_2) \text{ VtVi}]$  という〈共通構造〉となっている。そのため、これらの構造を用いる文は受身文であるのか、あるいは使役文であるのかといった曖昧性が生じる。また、〈動作主〉の位置を考えない場合、 $[N_1 \text{ vm } N_2 \text{ Vt}]$ 、 $[N_1 \text{ vm } N_2 \text{ VtVi}]$  は能動文、受身文、使役文に用いられることが観察される。

つまり、中国語のヴォイス構文について、能動文と受身文は〈不完全対応〉の関係であり、受身文と使役文は〈共通構造〉の関係である。

## 2.7 結び

本章では、中国語のヴォイス構文の体系を中心に論じた。第一に、ヴォイス構文の有標・無標、中国語のヴォイス構文の構造、中国語のヴォイス構文を体系化する基準を検討した。第二に、統一的な基準で中国語のヴォイス構文を体系化し、体系に基づいて中国語の能動文、受身文、使役文を定義し、再分類して、中国語のヴォイス構文の体系を明らかにした。第三に、中国語



ヴォイス構文の体系上の特徴を説明した。その主な研究結果を以下の(48)-(50)のようにまとめる。

(48) 本論文における中国語の能動文、受身文、使役文の定義:

(i) 中国語の能動文とは、2 つ以上の参加者が関わっている動作・行為を中心とする事態を表す構文において、主語の位置にある名詞句の担う意味役割が中心動作の〈動作主〉となる文である。(2.5.3 節参照)

(ii) 中国語の受身文とは、2 つ以上の参加者が関わっている動作・行為を中心とする事態を表す構文において、主語の位置にある名詞句の担う意味役割が中心動作の〈動作対象〉あるいは中心動作から間接影響を受ける〈受影主〉となる文である。(2.5.3 節参照)

(iii) 中国語の使役文とは、2 つ以上の参加者が関わっている動作・行為を中心とする事態を表す構文において、主語の位置にある名詞句の担う意味役割が〈使役主〉あるいは〈使役主〉兼〈動作対象〉となる文である。(2.5.3 節参照)

(49) 能動文、受身文、使役文の下位分類:

(i) 中国語の能動文は、無標能動構文、“把”能動構文、“将”能動構文、“给”能動構文に分類される。(2.5.4 節参照)

(ii) 中国語の受身文は、無標受身構文、“被”受身構文、“叫”受身構文、“让”受身構文などに分類される。(2.5.4 節参照)

(iii) 中国語の使役文は、無標使役構文、“叫”使役構文、“让”使役構文、“使”使役構文、“把”使役構文、“令”使役構文に分類される。(2.5.4 節参照)

(50) 中国語のヴォイス構文の体系上の特徴:

(i) 中国語のヴォイス構文の体系は複雑で、その形式は多様であるという統語的特徴がある。(2.6.1 節参照)

(ii) 中国語のヴォイス構文の体系は複雑で、その中のそれぞれの具体的な構文は、「能動」、「受身」、「使役」以外にも多くの意味を表し分けているという意味的特徴がある。(2.6.2 節参照)

(iii) 中国語では、能動文と受身文は〈不完全対応〉という関係であり、受身文と使役文は〈共通構造〉があるという関係である。(2.6.3 節参照)

(48)-(50)に基づいて、中国語の能動文、受身文、使役文はヴォイス構文の下位分類であり、その基本的な意味構造は異なる。そのため、中国語のヴォイス構文を研究する際、“把”構文や“被”構文という分類を用いず、まずその構文は能動文であるのか、受身文であるのか、使役文であるのかを判断すべきである。能動文、受身文、使役文は規則的な対応・関連の関係がないため、具体的なヴォイス構文を研究する際、能動文、受身文、使役文を互いに比較する必要がないと考えられる。そのため、本論文では、具体的なヴォイス構文を研究する際、同じ能動文や受身文、使役文の下位分類としての各構文を比較して、それぞれの特徴を明らかにする。例えば、無標能動構文と“把”能動構文、“被”受身構文と“让”受身構文、“让”使役構文と“使”使役構文をペアにして比較する。

## 第3章 中国語の能動文

### 3.1 はじめに

従来の中国語の能動文は“把”構文を中心に分析され、多くの研究成果が発表されてきた（吕叔湘 1948；王还 1985；金立鑫 1997、2002；安井二美子 1999；张伯江 2000、2001、2013；岳中奇 2001；刘培玉 2002；孟艳丽 2002；沈家煊 2002；施春宏 2010）。本論文におけるヴォイスの体系の観点に立てば、“把”構文は能動態を表す“把”構文と使役態を表す“把”構文に分けられる。そのため、能動文としての“把”構文を“把”能動構文と呼ぶことにする。“把”能動構文は有標能動構文の1種である。本論文では“把”、“将”などのヴォイス標識を用いない能動文を無標能動構文と呼ぶ。これまでの“把”構文の研究において、無標能動構文と比較対照した研究はあるものの、その場合でも「無標能動構文」とは言わず、単に、“主动宾句（SVO構文）”という用語が用いられている（劉月華・潘文娉・故鞞 1991；安井二美子 1999<sup>30</sup>；张伯江 2001；刘培玉 2002）。また、「能動」という概念や無標能動構文を中心に分析する研究はほとんどない。SVOを基本語順とする中国語には動詞の語形変化がなく、それが基本形であると信じられてきたため、これまでの先行研究では「能動」という概念に注目することはなく、従って「能動文」そのものを取り上げることはなかった。

伝統的な文法研究においては、“把”構文と動詞、目的語の“配价（結合価）”、“把”構文の述語分析、“把”構文の「処置義」、 “把”構文と“被”構文の対応関係に注目して“把”構文を分析する研究が多い（范晓 2001；金立鑫 2002；刘培玉 2002）。近年、张伯江（2000, 2001）、沈家煊（2002）、陆俭明（2016）などの研究者は統語論、情報構造の観点から“把”構文を分析している。このように、“把”構文についての研究は先人たちによって多角的に進められてきた。しかしながら、“把机会错过（チャンスを逃す）”（沈

---

<sup>30</sup> 安井二美子（1999）は“我看电视（私はテレビ（番組）を見る）”のような「主語＋動詞＋目的語」という構文を日本語で「SVO構文」と呼ぶ。

家煊 2002)、“把房子盖了(家を建てた)”(张伯江 2000)のように、先行研究においては説明できない“特殊例句(特殊的な例文)”が多く存在するため、“把”構文についての意味・機能をさらに解明する必要がある。また、“把”能動構文と“把”使役構文は異なるヴォイスを表すため、それぞれの基本的な意味・機能は異なると考えられる。しかしながら、ヴォイスの観点から明確に能動態を表す“把”能動構文と使役態を表す“把”使役構文を区別しつつ“把”能動構文を分析する研究はほとんどない。つまり、能動文に関する研究は未だに不十分であると考えられる。

本章では、まず、中国語の能動文における各構文の使用状況を概観する。また、中国語の能動文の基本的特性を分析する。最後に、無標能動構文と比較しながら、“把”能動構文の意味的・機能的特徴を明らかにする。

### 3.2 中国語の能動文における各構文の使用状況

現代中国語には、無標能動構文、“把”能動構文、“将”能動構文、“给”能動構文という能動文が存在する。以下の例を通して、これらの構文の使用状況を観察する。

- (1)a. 小明 打碎了 花瓶。  
明さん 打ち砕く -PRF 花瓶
- b. 小明 把 花瓶 打碎了。  
明さん ba 花瓶 打ち砕く -PRF
- c. 小明 将 花瓶 打碎了。  
明さん jiang 花瓶 打ち砕く -PRF
- d. 小明 给 花瓶 打碎了。  
明さん gei 花瓶 打ち砕く -PRF  
(明さんは花瓶を打ち砕いた。)

(1)が示すように、出来事「明さんは花瓶を打ち砕いた」を中国語の能動文で表す際、無標能動構文(1a)、“把”能動構文(1b)、“将”能動構文(1c)、“给”能動構文(1d)は全て適格である。

- (2)a. 我 看见了 蓝天。  
私 見る-PRF 青空
- b.\*我 把 蓝天 看见了。  
私 ba 青空 見る-PRF
- c.\*我 将 蓝天 看见了。  
私 jiang 青空 見る-PRF
- d.\*我 给 蓝天 看见了。  
私 gei 青空 見る-PRF  
(私は青空を見た。)

(2)が示すように、出来事「私は青空を見た」を中国語の能動文で表す際、無標能動構文(2a)は適格であるが、“把”能動構文(2b)、“将”能動構文(2c)、“给”能動構文(2d)は不適格である。

- (3)a.\*她 终于 告进了 谋害丈夫的凶手 监狱。  
彼女 ついに 訴える-込む-PRF 夫殺しの犯人 牢屋
- b. 她 终于 把 谋害丈夫的凶手 告进了 监狱。  
彼女 ついに ba 夫殺しの犯人 訴える-込む-PRF 牢屋
- c.\*她 终于 将 谋害丈夫的凶手 告进了 监狱。  
彼女 ついに jiang 夫殺しの犯人 訴える-込む-PRF 牢屋
- d.\*她 终于 给 谋害丈夫的凶手 告进了 监狱。  
彼女 ついに gei 夫殺しの犯人 訴える-込む-PRF 牢屋  
(彼女はついに夫殺しの犯人を牢屋にたたき込んだ。)

(3)が示すように、出来事「彼女はついに夫殺しの犯人を牢屋にたたき込んだ」を中国語の能動文で表す際、無標能動構文(3a)、“将”能動構文(3c)、“给”能動構文(3d)は不適格であるが、“把”能動構文(3b)は適格である。

(1)-(3)をまとめて観察すると、無標能動構文、“把”能動構文、“将”能動構文、“给”能動構文の中に、(1)-(3)の例文においていずれも適格となる構

文は存在しない。しかし、無標能動構文のみ適格である例文(2)や、“把”能動構文のみ適格である例文(3)は存在する。つまり、能動文における各構文は、どのような場合においても適格となる構文は存在しない。無標能動構文のみ適格である場合があり、また、“把”能動構文のみ適格である場合がある。

### 3.3 中国語の能動文の基本的特性

内田恵・前田満(2007)は、ほぼ同一内容を2種類以上の表現で表す場合、「情報構造」が関与していると指摘する。これは例えば、能動文と受動文、平叙文と強調構文などのような構文が、並立する理由の動機付けを追及しているという点を指す。この観点に従い、本節では、能動文の基本的特性を明らかにするために、まず情報構造を分析する。また、同じくヴォイス構文の下位分類である受身文との比較対照の観点から、中国語の能動文は客観的に出来事を描写することができるという特性を分析する。

#### 3.3.1 能動文の情報構造

山泉実(2015)によれば、話し手の想定という観点を入れてコミュニケーションで使われる文を分析すると、文の形態・統語構造は文が伝える命題内容(意味構造)をそのまま形にしたものではなく、話し手の想定に影響されていることが分かる。この形態・統語構造に影響を与えるものを意味構造にかぶさるような構造として捉えたものが情報構造である。これまでの研究において、情報構造を示す語として「重要な情報」、「焦点」、「旧情報」、「新情報」、「主題」、「話題」、「視点」など多種多様な専門用語が用いられてきたが、本論文は、話し手の立場や伝達意図などの主観性の説明を容易にするために、「焦点」、「視点」という用語を用いる。

本節では、「焦点」、「視点」に関する先行研究を検討し、本論文における「焦点」、「視点」の定義を明確にして、その判断基準を明らかにする。

内田恵・前田満(2007:32-33)は「新情報を担う要素が、長めの句になると、特に重要で相手にぜひ理解してほしい部分が際立ってくる。これを「焦点」と呼ぶ」と指摘する。本論文は、この定義に同意する。焦点の判断について、先行研究の中では以下のように指摘している。

(4)情報の流れの原則： 強調ストレスや形態的にマークされた焦点要素を含まない文中の要素は、通例、より重要でない情報からより重要な情報へと配列される。

(高見健一 1998:131)

(5)焦点は新情報の中心にあると言ってもよく、新情報の最も好む文末あるいは文の後半部分に配置されている。

(内田恵・前田満 2007:33)

(4)と(5)によれば、焦点の判断は構文要素の位置と関わり、一般的に、文末に位置付けられるとされている。本論文は、焦点の定義と判断基準を以下のように提案する。

(6)本論文における焦点：

焦点とは、話し手がある出来事を述べる際、最も強調したい、聞き手に注意してほしい情報、すなわち文中で話し手が最も重視する内容である。一般に、焦点は文末の構文要素が表す内容である。

言語学において、「視点」という用語が多くの研究者に用いられているが、その定義は統一されていない。古賀悠太郎(2013:169)は「基準点という意味での視点や主語項という意味での視点、さらには共感度という意味での視点など、実に様々な視点が存在する」と指摘する。内田恵・前田満(2007:36)は「情報構造や情報の重要度の研究と関連性を保ちながら、情報伝達をする際に、自分の視点をどこに据えるかという問題に取り組んだ研究がある。久野や高見が提唱する「共感度(empathy)」に関する研究が代表的である」と指摘する。本論文で扱う「視点」は、話し手の立場や伝達意図などの主観性を説明するための、「共感度視点」に相当する。しかしながら、古賀悠太郎(2014:31)は「「共感度視点」は、ある事象に参加する存在のうち、話し手が誰の立場から事象を眺め、言語化するかという意味での視点である」と指摘しているが、視点の定義を明確にしていると言えない。久野暉・高見健

一（2005）、高見健一（2011）は主に「派生主語の視点規則」、「視点の階層性」、「視点の一貫性」、「話し手の視点規則」などの視点に関する原則について提案したが、「視点」という用語の定義を明確にしなかった。高見健一（2011）は視点の判定基準を(7)のように指摘する。

(7) (=第1章の(4))

話し手の視点規則:

話し手（や書き手）は一般に、自分に近い、親しみのある人や物寄りに自分の視点を置き、それを文の主語（または主題）にして当該事象を述べる。

（高見健一 2011:15-16）

本論文は、(7)の話し手の視点規則に同意する。本論文は、(7)に基づいて、視点の定義とその判断基準を(8)のように明確に提案する。

(8)本論文における視点:

視点とは、話し手が出来事を見たり考えたりする立場、観点を指す。一般に、視点は話し手と共感度が高い事物に置かれる。例えば、話し手は最も注目し、関心を持つ事物、あるいは立場が同じ事物に視点を置く。一般に、視点は文頭の構文要素が表す事物に置かれる。

本論文の2.5.4節では、能動文の構造を明らかにした。能動文は無標能動構文と有標能動構文に分けられる。能動標識 am (active voice marker) の有無によって、VP (述語動詞句) と N<sub>2</sub> の位置関係も変わる。能動文の構造、第2章の(45)の能動文の定義及び上述した視点、焦点の判断基準に基づけば、中国語能動構文の情報構造は表3-1のようにまとめられる。



表 3-1 能動文の情報構造

	視点			焦点
無標能動構文	N <sub>1</sub>	VP		N <sub>2</sub>
	〈動作主〉	動作・行為 / 影響・変化		〈動作対象〉 / 〈受影主〉
有標能動構文	N <sub>1</sub>	am	N <sub>2</sub>	VP
	〈動作主〉	能動標識	〈動作対象〉 / 〈受影主〉	動作・行為 / 影響・変化

表 3-1 が示すように、一般に視点は、無標能動構文においても有標能動構文においても N<sub>1</sub> 〈動作主〉に置かれる。無標能動構文の焦点は N<sub>2</sub> 〈動作対象〉 / 〈受影主〉であるが、有標能動構文の焦点は VP の表す動作・行為 / 影響・変化である。

### 3.3.2 出来事の客観的描写

話し手はヴォイス構文を用いて出来事を聞き手に伝達する際、中立・客観的の意味を伝達するものと、被害・受益の意味を伝達するものがある。例えば、高見健一（2011）は「オウム真理教徒が信州大学に入学した」という能動文は、アナウンサーがニュースで事実を客観的に報告しているような文であるが、「信州大学はオウム真理教徒に入学された」という受身文では、そのような事実の報告に加え、話し手や当事者が被害や迷惑を被っていることを如実に読み取れると指摘する。高見健一（2011）によれば、能動文である「オウム真理教徒が信州大学に入学した」は「客観的描写」、受身文である「信州大学はオウム真理教徒に入学された」は「被害の表明」である。中国語も、受身文はしばしば何らかの被害や受益などの影響結果を表す。被害や受益などの影響結果を表さない場合、中国語の受身文は一般には容認されない<sup>31</sup>が、能動文は問題なく容認される。

<sup>31</sup> 中国語の受身文は、一般に、V の表す動作・行為によって N<sub>1</sub> への影響が捉えられない場合には容認されない。しかし、V の表す動作・行為によって N<sub>1</sub> が特徴付けられる

(9) a. 哥哥 吃了 面包。然后我们一起出门了。

兄 食べる-PRF パン

(兄はパンを食べた。それから、私たちは一緒に出かけた。)

b.? 面包 被 哥哥 吃了。 然后我们一起出门了。

パン bei 兄 食べる-PRF

(パンは兄に食べられてしまった。それから、私たちは一緒に出かけた。)

(10) a. 贝尔 发明了 电话。

ベル 発明する-PRF 電話

(ベルは電話を発明した。)

b.? 电话 被 贝尔 发明了。

電話 bei ベル 発明する-PRF

(電話はベルに発明された。)

(9)-(10)が示すように、話し手が何らかの被害や受益の意味を表していない場合、すなわち、事実を客観的に伝える場合には、能動文(9a)-(10b)での描写は適格であるが、受身文(9b)-(10b)での描写は不自然となる。従って、中国語の能動文は客観的に出来事を描写することができるという特性がある。

### 3.4 “把”能動構文の意味的・機能的分析

本節では、“把”能動構文に関する先行研究を踏まえて、無標能動構文との比較対照の観点から、中国語の“把”能動構文の意味・機能を分析する。

#### 3.4.1 先行研究

中国語の“把”能動構文の成立はどのような条件に制約されているかについて、王力(1943)、張伯江(2001)は「“把”構文においては、必ず受事

---

場合、また、Vの表す動作・行為によってN<sub>1</sub>にN<sub>2</sub>が関与することになる場合、文は容認される。

(N<sub>2</sub>) に影響を与える」、「影響結果がないと、“把”構文は成立しない」と指摘する。

(11) \*我 把 蓝天 看见了。 (张伯江 2001:520)

私 ba 青空 見る-PRF

(私は青空を見た。)

(11)が示すように、“看见(見る)”という行為は“蓝天(青空)”に対して何らかの影響を与えることはできないため、“把”構文は成立しないと张伯江(2001)は主張する。しかしながら、この主張は(12)のような例外の文の成立理由を説明できない点が問題となる。

(12) 他 把 机会 错过了。

彼 ba チャンス 逃す-PRF

(彼はチャンスを逃した。)

(12)における受事 N<sub>2</sub> “机会(チャンス)” への影響はどのように扱うのか、なぜ(12)のような N<sub>2</sub> に対する影響が捉えられない文が成立しうるのかということについては、これまでの研究において説明されてこなかった。

従来の「影響・影響結果」という“把”能動構文の成立要件に関する説明は出来事の参与者 N<sub>2</sub> のみに言及している。本論文では出来事の参与者 N<sub>1</sub> にも注目し、N<sub>1</sub> の視点から N<sub>2</sub> への影響を考え、文の各構文要素の意味関係を検討し、「例外」とされてきた文も射程に入れながら、“把”能動構文の成立要件を明らかにする。

“把”構文の成立要件に関して、张伯江(2000)は“把”構文の N<sub>2</sub> には「自立性」が必要であると指摘する。

(13) a. 他 把 字 擦了。 (张伯江 2000:32)

彼 ba 字 消す-PRF

(彼は字を消した。)

b.\*他 把 字 写了。 (张伯江 2000:32)

彼 ba 字 書く-PRF

(彼は字を書いた。)

(14) a. 我 把 房子 拆了。 (张伯江 2000:32)

私 ba 家 取り壊す-PRF

(私は家を取り壊した。)

b.\*我 把 房子 盖了。 (张伯江 2000:32)

私 ba 家 建てる-PRF

(私は家を建てた。)

(13a)-(14a)の N<sub>2</sub> “字 (字)”、“房子 (家)”のように“擦 (消す)”、“拆 (取り壊す)”という動作が行われる前に存在している事物である場合、文は成立する。一方、(13b)-(14b)の N<sub>2</sub> “字 (字)”、“房子 (家)”のように“写 (書く)”、“盖 (建てる)”という動作を経て生じる事物である場合、文は成立しないと张伯江 (2000) は説明している。さらに、张伯江 (2000) は“特殊情况 (特殊な場合)”には(14b)の“把房子盖了 (家を建てた)”が容認されると主張している。しかしながら、「特殊な場合」とは具体的にどのような場合であるのか、また“把”能動構文“把房子盖了 (家を建てた)”が成立する理由は何なのかについては、张伯江 (2000) は詳しくは論じていない。

中国語の“把”能動構文の意味について、张伯江 (2001) は“把”構文の受事 (N<sub>2</sub>) の「受影響」の程度は無標能動構文より大きく、“把”構文には受事の「完全受影響 (total affectedness)」という意味的特徴があると指摘する。沈家煊 (2002) も“把”構文の目的語 (動作対象) は動作の「完全影響」を受けることを主張する。

(15) a. 他 把 酒 喝了。

彼 ba 酒 飲む-PRF

b. 他 喝了 酒 了。

彼 飲む-PRF 酒 SFP

(张伯江 2001:520)

(彼は酒を飲んだ。)

(15a)は、一定の量の酒、例えば一杯の酒や一瓶の酒が全部飲まれたという意味があり、(15b)は全部の酒を飲んだという意味を表さないと张伯江(2001)は指摘する。これは N<sub>2</sub> が消耗品の場合の例である。N<sub>2</sub> が人間や抽象的な事物の場合の例を観察しよう。

(16) 小张 把 小明 打了。

張さん ba 明さん 殴る-PRF

(張さんは明さんを殴った。)

(17) 小李 把 作业 写了。

李さん ba 宿題 書く-PRF

(李さんは宿題をした。)

(16)は、N<sub>2</sub> “小明 (明さん)” が人間であり、その人間の全部か一部分かを問題にすることなく、“打 (殴る)” という動作の影響を受けている。また、(17)が示すように、N<sub>2</sub> が “作业 (宿題)” のような抽象的な事物の場合、どのように「完全受影響」という概念を扱うのかについては、今までの研究においては詳しく論じられていない。

(18) a. 老张 把 酒 喝了 一半。

張さん ba 酒 飲む-PRF 半分

b. 老张 喝了 一半 酒。

張さん 飲む-PRF 半分 酒

(張さんは酒を半分飲んだ。)

(18)が示すように、N<sub>2</sub>“酒(酒)”への影響結果を「半分飲まれた」と明示されている場合、(18a)も(18b)も同じ意味であるため、全ての“把”構文は「完全受影響」の意味的特徴を有するとは言いがたい。本論文ではさらに例を考察し、“把”構文の「完全受影響」ということの意味及びその適用範囲を詳しく分析する。

中国語の“把”能動構文の意味について、沈家煊(2002)は“把”構文は“主观处置(主観処置)”という意味があり、これは具体的には「不本意の意味」、「意外の意味」とであると指摘する。本論文では、文脈によって“把”構文は「不本意」や「意外」などの、話し手の主観的な態度を示すという主張に賛同する。しかし、沈家煊(2002)は話し手の感情、視角、認識を分析し、“把”構文は「不本意」や「意外」という意味的特徴があると指摘したが、これらの意味が生み出される原因を統一的な観点から説明していなかった。

張伯江(2000)は“把”構文を用いる話し手は出来事に対する「責任者」が存在することを表現しているため、“把”構文は“追究責任(責任付与)”という意味的特徴があると指摘する。しかし、これは“把”構文を“受事主語句(受事主語文)”との比較対照により導かれた結論である。能動文の下位分類である無標能動文と比較する場合、“把”構文はさらに「責任付与」という意味的特徴があるかどうかについて、再度検討する必要があると思われる。

総じていえば、中国語の“把”能動構文の意味・機能に関する研究は十分に行われてきたとは言えない。

### 3.4.2 “把”能動構文に課される意味的・機能的制約

本節では、前節で検討した先行研究とその問題点に基づいて、無標能動構文と比較対照しながら、“把”能動構文の各構文要素や各構文要素の意味的關係を考察し、その文が適格となるための意味的・機能的制約を明らかにする。

### 3.4.2.1 N<sub>2</sub>の「絶対的・相対的状态変化」制約

先行研究では、“把”能動構文における N<sub>2</sub>に関する叙述は「必ず受事(N<sub>2</sub>)に影響を与える」、「(N<sub>2</sub>への)影響結果がないと、“把”構文が成立しない」と指摘している(王力 1943; 张伯江 2001)。

(19) 小明 把 花瓶 打碎了。

明さん ba 花瓶 打ち砕く-PRF

(明さんは花瓶を打ち砕いた。)

张伯江(2001)によれば、(19)は、N<sub>2</sub>“花瓶(花瓶)”がV“打(打つ)”という動作の影響を受けて、“碎了(砕かれた)”という影響結果が生じることになる。しかしながら、「影響結果」という用語は抽象的で曖昧であるため、多くの場合「影響結果」がどのようなものを示しているかは判断しにくい。

(20) 老张 把 酒 喝了。

張さん ba 酒 飲む-PRF

(張さんは酒を飲んだ。)

(20)の例では、“喝(飲む)”の後に結果補語がなく、N<sub>2</sub>“酒(酒)”への「影響結果」が明示されてないため、「影響結果」という用語を用いて説明することは適切ではない。(20)の N<sub>2</sub>“酒(酒)”はV“喝(飲む)”という動作の影響を受けてから、「飲まれていない→飲まれている」という量の変化があったと解釈できる。

改めて(19)を説明すると、(19)の N<sub>2</sub>“花瓶(花瓶)”にはV“打(打つ)”という動作によって「砕かれていない→砕かれている」という形状の変化があると解釈できる。

(19)-(20)の N<sub>2</sub>“花瓶(花瓶)”、“酒(酒)”は具象的なものとして、その量や形状の変化は N<sub>1</sub>“小明(明さん)”、“老张(張さん)”にとっても、ほかの人にとっても捉えられ、客観的に存在する。本論文では、このよ

うな具象的なものの客観的に観察される「状態変化」を「絶対的状態変化」と呼び、以下のように定義する。

(21) 「絶対的状態変化」:

「絶対的状態変化」とは、ある物事が動作主の動作・行為の影響を受けて、それまでの量や形状などの客観的ありさまが変化したことを指す。

(19)-(20)においては、N<sub>2</sub> “花瓶（花瓶）”、“酒（酒）”の「絶対的状態変化」が捉えられるため、“把”能動構文は成立する。

(22) a. \*我 把 蓝天 看见了。 (张伯江 2001:520)

私 ba 青空 見る-PRF

b. 我 看见 蓝天 了。 (张伯江 2001:519)

私 見る 青空 SFP

(私は青空を見た。)

(23) a. \*他 把 富士山 爬了。

彼 ba 富士山 登る-PRF

b. 他 爬了 富士山。

彼 登る-PRF 富士山

(彼は富士山に登った。)

(22)の N<sub>2</sub> 具象的なものとしての“蓝天（青空）”は V “看见（見る）”という動作によって、何らかの「絶対的状態変化」があったと捉えられない。そのため、“把”能動構文(22a)は成立しない。また、(23)の N<sub>2</sub> “富士山（富士山）”も具象的なものであるが、一人の“他（彼）”が V “爬（登る）”という動作によって、「絶対的状態変化」があったということは考えられないため、“把”能動構文(23a)は成立しない。一方、無標能動構文(22b)-(23b)は N<sub>2</sub> の「絶対的状態変化」が捉えられなくても文が成立する。

呂叔湘（1948）、沈家煊（2002）が指摘する「例外」の“把”能動構文とされている文を観察しよう。



(24) 他 把 机会 错过了。

彼 ba チャンス 逃す-PRF

(彼はチャンスを逃した。)

(24)の N<sub>2</sub>“机会(チャンス)”は抽象的な概念で、普通は何らかの「影響性」があるとは考えられない。しかし、(24)の N<sub>1</sub>“他(彼)”との意味関係から考えると、N<sub>2</sub>“机会(チャンス)”は V“错过(逃す)”という動作を経て、N<sub>1</sub>“他(彼)”にとって「存在している→存在しない」という状態の変化が捉えられる。

(25) 他 励志爬遍各国最高山。上个月 他 把 富士山 爬了。

先月 彼 ba 富士山 登る-PRF

(彼は奮い立って各国の最高峰に登っている。先月彼は富士山に登った。)

「富士山に登る」を表す際、“把”能動構文(23a)が成立しないのに対して、“把”能動構文(25)は成立する。(25)では、「富士山に登る」は「各国の最高峰に登る」という目標の一部として、その目標を達成するための行為である。(25)の N<sub>1</sub>“他(彼)”にとって、“富士山(富士山)”は客観的で具象的な「もの」ではなく、達成したい「目標・計画」という抽象的な概念である。V“爬(登る)”という行為を通して、N<sub>1</sub>“他(彼)”にとって、“富士山(富士山)”は「登っていない→登った」、すなわち、「目標」が「未達成→既達成」という状態の変化が捉えられる。そのため、(23)と(25)の“富士山(富士山)”は、(23)の“富士山(富士山)”が具象的で客観的に存在しているものであるのに対して、(25)の“富士山(富士山)”は抽象的な目標として N<sub>1</sub>“他(彼)”にとって主観的に存在するという区別がある。

(24)-(25)の N<sub>2</sub>“机会(チャンス)”、“富士山(富士山)”は抽象的な事として、その「存在している→存在しない」、「未達成→既達成」という状態の変化は(24)-(25)の N<sub>1</sub>“他(彼)”にとっては主観的に捉えられるが、ほかの人にとっては捉えられない。本論文では、このような抽象的な事物の

主観的に観察される「状態変化」を「相対的状态変化」と呼び、以下のよう  
に定義する。

(26) 「相対的状态変化」:

「相対的状态変化」とは、ある物事が動作主の動作・行為の影響を受け  
て、動作主にとっての主観的認識（捉え方）が変化したことを指す。

さらに、N<sub>2</sub>が抽象的な事物である例を観察しよう。

(27) 我 已经 把 骑马的招数 知道了 不少。

私 すでに ba 乗馬のコツ 学ぶ-PRF 少なくない

(私はすでに、乗馬のコツを多く学んだ。)

(28) 她 把 那一套方法 完全 掌握了, 所以回答得十分自然。

彼女 ba その方法 完璧 身につける-PRF

(彼女はその方法を完璧に身につけたため、とても自然に答えることがで  
きる。)

(29) 尽管困难重重, 我们老一辈人 总算 把 任务 完成了。

私たちの上の世代の人たち 何とか ba 任務 こなす-PRF

(たとえ困難が多くても、私たちの上の世代の人たちは何とか任務をこな  
してきた。)

(30) 我们 千万 不能 把 爱 忘了。

私たち 決して ~てはいけない ba 愛 忘れる-PRF

(私たちは決して愛を忘れてしまてはいけません。)

(27)-(28)の N<sub>2</sub> “骑马的招数 (乗馬のコツ)”、“方法 (方法)”を V “知  
道 (学ぶ)”、“掌握 (身につける)”という行為を通して、N<sub>1</sub> “我 (私)”、  
“她 (彼女)”にとって「学んでいなかった→学んだ」、「身につけていな  
い→身につけている」という「相対的状态変化」が捉えられる。そのため、  
“把”能動構文(27)-(28)は成立する。(29)では、N<sub>2</sub> “任务 (任務)”が V  
“完成 (こなす)”という行為を通して、N<sub>1</sub> “我们老一辈人 (私たちの上の

世代の人たち) ”にとって「未完成→既完成」という「相対的状态変化」が捉えられる。そのため、“把”能動構文(29)は成立する。また、(30)では、N<sub>2</sub>“爱(愛)”をV“忘(忘れる)”という行為を通して、N<sub>1</sub>“我们(私たち)”にとって「覚えている→覚えていない」という「相対的状态変化」が捉えられる。そのため、“把”能動構文(30)は成立する。

以上の分析に基づいて、“把”能動構文の成立に必要な制約は次のように規定できる。

(31) N<sub>2</sub>の「絶対的・相対的状态変化」制約:

“把”能動構文は、Vの表す動作・行為を通して、N<sub>2</sub>の「絶対的状态変化」あるいは「相対的状态変化」があったということが捉えられる場合に成立する。一方、N<sub>2</sub>の「絶対的状态変化」も「相対的状态変化」も捉えられない場合、“把”能動構文は成立しない。

#### 3.4.2.2 N<sub>2</sub>の「絶対的・相対的既存性」制約

本節では、先行研究に基づいて、N<sub>2</sub>の存在状態を「絶対的既存性」と「相対的既存性」に分類し、“把”能動構文の成立要件を分析する。

张伯江(2000)はN<sub>2</sub>の「自立性」を“把”能動構文の成立要件と見なしている。

(32) a. 他 把 字 擦了。 (张伯江 2000:32)

彼 ba 字 消す-PRF

b. 他 擦了 字。

彼 消す-PRF 字

(彼は字を消した。)

(33) a. 我 把 房子 拆了。 (张伯江 2000:32)

私 ba 家 解体する-PRF

b. 我 拆了 房子。

私 解体する-PRF 家

(私は家を解体した。)

(34) a.\*他 把 字 写了。 (张伯江 2000:32)

彼 ba 字 書く-PRF

b. 他 写了 字。

彼 書く-PRF 字

(彼は字を書いた。)

(35) a.\*我 把 房子 盖了。 (张伯江 2000:32)

彼 ba 家 建てる-PRF

b. 我 盖了 房子。

彼 建てる-PRF 家

(私は家を建てた。)

张伯江(2000)によれば、(32a)-(33a)のN<sub>2</sub>“字(字)”、“房子(家)”は「自立性」があるため、適格である。(34a)-(35a)のN<sub>2</sub>“字(字)”、“房子(家)”は「自立性」がないため、不適格となる。しかし、张伯江(2000)は「自立性」という用語の定義を明確にしていない。

(32)-(33)が示すように、N<sub>2</sub>“字(字)”、“房子(家)”がV“擦(消す)”、“拆(解体する)”という動作が行われる前に存在している事物である。本論文では、N<sub>2</sub>がVが行われる前に存在している場合、N<sub>2</sub>は「既存性」を有すると見なす。一方、(34)-(35)が示すように、N<sub>2</sub>“字(字)”、“房子(家)”がV“写(書く)”、“盖(建てる)”という「創造・獲得」の意味を有する動作・行為を通して生じる事物である。本論文では、N<sub>2</sub>がVによって生じる場合、N<sub>2</sub>は「既存性」を有しないと見なす。(32)-(33)が示すように、N<sub>2</sub>が「既存性」を有する場合、“把”能動構文(32a)-(33a)は成立する。N<sub>2</sub>が「既存性」を有さない場合、“把”能動構文(34a)-(35a)は成立しない。(32b)-(35b)が示すように、無標能動構文は「N<sub>2</sub>の既存性」に制約されていないため、文が成立する。

(32)-(35)のN<sub>2</sub>“字(字)”、“房子(家)”はN<sub>1</sub>のみならず、ほかの人にとっても存在する。これに対して、N<sub>2</sub>がほかの人にとって存在しておらず、N<sub>1</sub>にとってのみ存在している事物である例も観察される。

- (36) a. 小明 把 要投稿的文章 写了。  
 明さん **ba** 投稿するために書こうと思っていた文章 書く-PRF
- b. 小明 写了 要投稿的文章。  
 明さん 書く-PRF 投稿するために書こうと思っていた文章  
 (明さんは投稿するために書こうと思っていた文章を書いた。)
- (37) a.\*他 把 一篇 文章 写了。  
 彼 **ba** 一篇 文章 書く-PRF
- b. 他 写了 一篇 文章。  
 彼 書く-PRF 一篇 文章  
 (彼は文章を一篇書いた。)

(36)の N<sub>2</sub> “文章 (文章)” は既に書き終えた、客観的に存在している文章ではなく、“小明 (明さん)” が投稿するため書こうとして、V “写 (書く)” という行為に先立って、既に N<sub>1</sub> “小明 (明さん)” の頭の中に存在している文章である。つまり、(36)の N<sub>2</sub> “文章 (文章)” は「既存性」を有するため、“把” 能動構文(36a)は成立する。一方、(37)の N<sub>2</sub> “文章 (文章)” は V “写 (書く)” という行為によって生じる文章として、「既存性」を有さないため、“把” 能動構文(37a)は成立しない。

(32)-(35)、(37)の N<sub>2</sub> “字 (字)”、“房子 (家)”、“文章 (文章)” は N<sub>1</sub> のみならず、ほかの人も知覚でき、客観的に存在している。本論文では、このような「既存性」を「絶対的既存性」と呼び、以下のように定義する。

(38) N<sub>2</sub> の「絶対的既存性」:

N<sub>2</sub> が V の表す動作・行為が行なわれる前に、既に客観的に存在する場合、N<sub>2</sub> は「絶対的既存性」を有すると言う。

(36)の N<sub>2</sub> “文章 (文章)” はほかの人が知覚できず、客観的に存在しているものではなく、N<sub>1</sub> にとってのみ存在する。本論文では、このような「既存性」を「相対的既存性」と呼び、以下のように定義する。

(39) N<sub>2</sub> の「相対的既存性」:

N<sub>2</sub> が V の表す動作・行為が行なわれる前に、既に N<sub>1</sub> にとってのみ存在する場合、N<sub>2</sub> は「相対的既存性」を有すると言う。

張伯江 (2000) が言及している「特殊な場合」の例“把房子盖了 (家を建てた)” に文脈を加えて観察しよう。

(40) a. 攒了多年钱, 老张 终于 把 房子 盖了。

張さん ついに ba 家 建てる-PRF

b. 攒了多年钱, 老张 终于 盖了 房子。

張さん ついに 建てる-PRF 家

(長年お金を稼ぎ、張さんはついに家を建てた。)

(40)の文の意味を考えると、N<sub>2</sub> “房子 (家)” は客観的に存在している形がある家ではなく、N<sub>1</sub> “老张 (張さん)” が建てたいと思っていた“房子 (家)” である。この場合の“房子 (家)” は V “盖 (建てる)” という動作の前に既に“老张 (張さん)” の意識の中に存在している。N<sub>1</sub> “老张 (張さん)” にとって、N<sub>2</sub> “房子 (家)” は「相対的既存性」を有するため、“把” 能動構文(40a)は成立する。

V が“写 (書く)”、“养成 (身につける)”、“盖 (建てる)”、“做 (作る)”などの「創造・獲得」の意味を有する動詞の“把”能動構文も「特殊な場合」の例とみなされている(張伯江 2000)。「相対的既存性」という考え方に基づいて以下の例を解釈してみよう。

(41) 他 把 作业 写了。

彼 ba 宿題 書く-PRF

(彼は宿題をした。)

(42) 他 用 8 个月时间, 把 啤酒厂 建成了。

彼 用いる 8 か月半の期間 ba ビール工場 建設する -PRF

(彼は 8 か月半の期間をかけてビール工場を建設した。)

(43) 妈妈 把 新衣服 做了。

母 ba 新しい服 作る -PRF

(母は新しい服を作った。)

(44) 我 当天 写了 一封信 给 张其昀先生,

私 その日 書く -PRF 1 通 手紙 PREP 張其昀先生

把 自己少年失学的经历 都 写了。

ba 自身の少年時代の中退した経験 全て 書く -PRF

(私はその日に張其昀先生へ手紙を 1 通書き、自身の少年時代の中退した経験を全て書いた。)

(41)の N<sub>2</sub>“作业(宿題)”は完成した、客観的に存在しているものではなく、V“写(書く)”という行為の前に、既に「任務」として N<sub>1</sub>“他(彼)”の意識の中に存在しているものである。(42)の N<sub>2</sub>“啤酒厂(ビール工場)”は客観的に存在している工場ではなく、V“建成(建設する)”という行為の前に、既に「目標」として N<sub>1</sub>“他(彼)”の意識の中に存在している。(43)の N<sub>2</sub>“新衣服(新しい服)”も客観的に存在している服ではなく、V“做(作る)”という行為の前に、既に N<sub>1</sub>“妈妈(お母さん)”の意識の中に存在している作りたい「服」である。(44)の N<sub>2</sub>“经历(経験)”も明らかに V“写(書く)”という行為から生じるものではなく、V“写(書く)”の前に、既に N<sub>1</sub>“我(私)”の意識の中に存在している「記憶」である。このように、(41)-(44)の N<sub>2</sub>は「相対的既存性」であることが捉えられるため、“把”能動構文(41a)-(44a)が成立する。

(41)-(44)のような例も「N<sub>2</sub>の既存性」という条件を満たすため、実際には「特殊な場合」ではない。つまり、全ての“把”能動構文は「N<sub>2</sub>の既存性」に制約されていると言える。

以上の分析に基づいて、“把”能動構文の成立に必要な制約は以下のように規定できる。

(45) N<sub>2</sub>の「絶対的・相対的既存性」制約:

N<sub>2</sub>がVの表す動作・行為の前に存在している場合、すなわち、N<sub>2</sub>が「絶対的既存性」あるいは「相対的既存性」を有する場合には、“把”能動構文が成立する。一方、N<sub>2</sub>が「絶対的既存性」も「相対的既存性」も有さない場合には、“把”能動構文は成立しない。

### 3.4.3 “把”能動構文の意味的・機能的特徴

本節では、3.4.1節で検討した先行研究とその問題点に基づいて、無標能動構文と比較しながら、“把”能動構文の情報構造上の特徴を分析し、その意味的・機能的特徴を明らかにする。

#### 3.4.3.1 “把”能動構文の情報構造上の特徴

ヴォイス構文を用いて情報を伝達する際に、構文の構造が異なれば話し手の視点、焦点も異なっている場合がある。本節では、無標能動構文と比較しながら“把”能動構文の情報構造上の特徴を分析する。

本章の表3-1 能動文の情報構造に従えば、一般に、無標能動構文と有標能動構文の視点はN<sub>1</sub>〈動作主〉に置かれるという結論が得られた。しかし、無標能動構文のN<sub>2</sub>がVの後にあるのに対して、“把”能動構文のN<sub>2</sub>はVの前に位置している。このような格上げ<sup>32</sup>現象が存在するため、“把”能動構文の話し手の視点を改めて検討する必要がある。

次の例をみよう。

(46) a. 我妹妹 被 张三 打了。

私の妹 bei 张三 殴る-PRF

(私の妹は张三に殴られた。)

---

<sup>32</sup> “把”能動構文における“提賓(格上げ)”とは、目的語N<sub>2</sub>が動詞の前に置かれて、目的語と主語を兼ねるようになり、格上げされる文法現象である。



b.?张三 打了 我妹妹。

张三 毆る-PRF 私の妹

c. 张三 把 我妹妹 打了。

张三 ba 私の妹 毆る-PRF

(張三は私の妹を毆った。)

(47) a. 我的花瓶 被 小明 打碎了。

私の花瓶 bei 明さん 打ち砕く-PRF

(私の花瓶は明さんに打ち砕かれた。)

b.?小明 打碎了 我的花瓶。

明さん 打ち砕く-PRF 私の花瓶

c. 小明 把 我的花瓶 打碎了。

明さん ba 私の花瓶 打ち砕く-PRF

(明さんは私の花瓶を打ち砕いた。)

(46)-(47)では、“我妹妹（私の妹）”と話し手「私」は親しい関係、“我的花瓶（私の花瓶）”と話し手「私」は所有関係であり、どちらも共感度が高い。そのため、一般に、話し手は“我妹妹（私の妹）”、“我的花瓶（私の花瓶）”に視点を置く。話し手は聞き手に出来事を伝える時には、文の主語“我妹妹（私の妹）”、“我的花瓶（私の花瓶）”が自分の視点と一致するような、受身文(46a)-(47a)を使えば最適であると思われる。(46)-(47)において、話し手と共感度が高い“我妹妹（私の妹）”、“我的花瓶（私の花瓶）”に視点に置けば、“我妹妹（私の妹）”、“我的花瓶（私の花瓶）”を主語にする必要があるが、無標能動構文(46b)-(47b)では、“我妹妹（私の妹）”、“我的花瓶（私の花瓶）”は目的語にされており、視点と主語が一致していない。そのため、無標能動構文(46b)-(47b)は不自然である。“把”能動構文(46c)-(47c)では、話し手の視点“我妹妹（私の妹）”、“我的花瓶（私の花瓶）”は文の主語に位置していない。しかしながら、“我妹妹（私の妹）”、“我的花瓶（私の花瓶）”を動詞の前に置くことによって、“我妹妹（私の妹）”、“我的花瓶（私の花瓶）”は結果を表す節の主語になり、視点と主語が一致することになるため、文は自然である。これらの(46c)-(47c)が示す

ように、“把”能動構文の視点は N<sub>2</sub> “我妹妹（私の妹）”、“我的花瓶（私の花瓶）”に置かれているのである。

以上の分析から明らかなように、無標能動構文の視点は N<sub>1</sub>〈動作主〉に置かれるが、“把”能動構文の視点は N<sub>2</sub>〈動作対象〉/〈受影主〉に置かれる。

また、本章の表 3-1 能動文の情報構造で示した通り、無標能動構文の焦点は N<sub>2</sub>〈動作対象〉/〈受影主〉であり、有標能動構文の焦点は VP の表す動作・行為/影響・変化である。

(48) a. 小红 把 小明 打了。

紅さん ba 明さん 殴る-PRF

b. 小红 打了 小明。

紅さん 殴る-PRF 明さん

(紅さんは明さんを殴った。)

(49) a. 小王 把 花瓶 打碎了。

王さん ba 花瓶 打ち砕く-PRF

b. 小王 打碎了 花瓶。

王さん 打ち砕く-PRF 花瓶

(王さんは花瓶を打ち砕いた。)

“把”能動構文(48a)-(49a)の焦点は“打了（殴った）”、“打碎了（打ち砕いた）”であり、無標能動構文(48b)-(49b)の焦点は“小明（明さん）”、“花瓶（花瓶）”である。否定辞“没”は対比的焦点 (contrastive focus) を否定する機能があるので、(48)-(49)に“没”を加えて焦点を検証しよう。

(50) a. 小红 没 把 小明 打伤, 只是轻轻拍了他几下。

紅さん NEG ba 明さん 殴る-傷つく

b.? 小红 没 打伤 小明, 只是轻轻拍了他几下。

紅さん NEG 殴る-傷つく 明さん

(紅さんは明さんを殴って傷を負わせてはいない、ただ軽く叩いただけだ。)

(51) a.? 小红 没 把 小明 打伤, 打伤 的 是 小王。

紅さん NEG ba 明さん 殴る-傷つく

b. 小红 没 打伤 小明, 打伤的是小王。

紅さん NEG 殴る-傷つく 明さん

(紅さんは明さんを殴って傷を負わせてはおらず、王さんを殴って傷を負わせたのだ。)

(52) a. 小王 没 把 花瓶 打碎, 只是摔掉一小块。

王さん NEG ba 花瓶 打ち砕く

b.? 小王 没 打碎 花瓶, 只是摔掉一小块。

王さん NEG 打ち砕く 花瓶

(王さんは花瓶を打ち砕いたのではない、ただ少し欠けただけだ。)

(53) a.? 小王 没 把 花瓶 打碎, 倒是割伤了自己的手。

王さん NEG ba 花瓶 打ち砕く

b. 小王 没 打碎 花瓶, 倒是割伤了自己的手。

王さん NEG 打ち砕く 花瓶

(王さんは花瓶を打ち砕いたのではない、かえって自分の手を傷つけてしまった。)

(50)では、“伤(傷ついた)”という結果が否定されているため、対比的焦点は結果となる。この場合、“把”能動構文(50a)は自然であるが、無標能動構文(50b)は不自然である。(51)では、“打(殴る)”相手は“小明(明さん)”であるということが否定されているため、対比的焦点はN<sub>2</sub>(動作対象)/〈受影主〉となる。この場合、“把”能動構文(51a)は不自然であるが、無標能動構文(51b)は自然である。(52)では“打碎(打つ砕く)”という結果が否定されているため、対比的焦点はVPの表す動作・行為/影響・変化という結果となる。この場合、“把”能動構文(52a)は自然であるが、無標能動構文(52b)は不自然である。(53)では“打(打つ)”という動作の対象が“花瓶(花瓶)”であるということが否定されているため、対比的焦点はN<sub>2</sub>(動作対象)/〈受影主〉となる。この場合、“把”能動構文(53a)は不自然であるが、無標能動構文(53b)は自然である。以上の例から、本論文で扱う「焦点」は、否定辞“没”

で“把”能動構文と無標能動構文の対比的焦点を考察した結果と一致している。

以上の分析に基づいて、無標能動構文の焦点は  $N_2$  〈動作対象〉 / 〈受影主〉であるが、“把”能動構文の焦点は  $VP$  の表す動作・行為 / 影響・変化であるということが検証された<sup>33</sup>。

“把”能動構文と無標能動構文は同一の出来事を表現していても、視点や焦点が異なるため、話し手の立場や話し手が最も重視する情報も異なる。“把”能動構文の情報構造上の特徴から、その特有な意味や機能も生じる。

### 3.4.3.2 $N_2$ への「関心」

“把”能動構文の  $N_1$  と  $N_2$  がどちらも有情物である例を観察しよう。

(54) a. 你 去 把 马 遛遛 吧。

あなた 行く ba 馬 ゆっくり歩かせる SFP

b. 你 去 遛遛 马 吧。

あなた 行く ゆっくり歩かせる 馬 SFP

(馬を引いてぶらついてきてください。)

(55) a. 最近草很肥美。你 去 把 马 遛遛 吧。

あなた 行く ba 馬 ゆっくり歩かせる SFP

b. ?最近草很肥美。你 去 遛遛 马 吧。

あなた 行く ゆっくり歩かせる 馬 SFP

(最近、草がよく生えているから、馬を引いてぶらついてきてください。)

---

<sup>33</sup> 孟艳丽 (2002) は“把”構文の焦点は「VP」、刘培玉 (2002) は“把”構文の焦点は動詞及びその付加成分、陆俭明 (2016) は“把”構文の焦点は「処置結果」であると指摘する。このように、“把”構文の焦点は文末の内容であるという点においては、本論文を含めてたいのの研究で一致している。

(56) a.?最近诸事不顺。你 去 把 马 遛遛 吧。

あなた 行く ba 馬 ゆっくり歩かせる SFP

b. 最近诸事不顺。你 去 遛遛 马 吧。

あなた 行く ゆっくり歩かせる 馬 SFP

(最近、事がうまく進まないようですから、馬を引いてぶらついてきてください。)

(54)が示すように、「馬を引いてぶらついてきてください」を表す時、“把”能動構文(54a)も無標能動構文(54b)も用いられる。話し手の立場を表す文脈を加えると、“把”能動構文と無標能動構文の視点が異なっているため、文が不自然になることがある。(55)の話し手はN<sub>2</sub>“马(馬)”の立場から、「草がよく生えている」という理由で「馬を引いてぶらついてきてください」と言っているため、“把”能動構文(55a)のほうが自然である。なぜなら、“把”能動構文の話し手はN<sub>2</sub>“马(馬)”のほうに関心を持っているからである。(56)の話し手は“你(あなた)”のほうに関心を持っているため、N<sub>1</sub>“你(あなた)”の立場から発話して、無標能動構文(56b)のほうが自然である。

以上の分析から明らかなように、“把”能動構文は話し手がN<sub>2</sub>に関心を持っていることをしばしば積極的に含意する。

### 3.4.3.3 N<sub>1</sub>への「責任付与」

話し手にとって好ましくない出来事を表す例を観察しよう。

(57) a. 家里遭了小偷。估计 昨晚 有人 把 大门 打开了。

たぶん 昨晚 だれか ba 表の戸 開ける-PRF

b.?家里遭了小偷。估计 昨晚 有人 打开了 大门。

たぶん 昨晚 だれか 開ける-PRF 表の戸

(家に泥棒が入った。昨晚、だれか表の戸を開けたようだった。)

(58) a. ?我家的狗很乖。肯定 是 你 先 打 它，  
 きっと ~である あなた 先に 叩く それ  
 它 才 把 你 咬了。

それ ~てこそ ba あなた 噛む-PRF

b. 我家的狗很乖。肯定 是 你 先 打 它，  
 きっと ~である あなた 先に 叩く それ  
 它 才 咬了 你。

それ ~てこそ 噛む-PRF あなた

(わが家の犬は大人しいんだ。きっと君が叩いたから、犬が君を噛んだ。)

(57)が示すように、「家に泥棒が入った」という好ましくないことが発生したことの原因を追究し、N<sub>1</sub>“人(人)”に責任があると話し手が認識する場合、“把”能動構文(57a)の視点はN<sub>2</sub>“大門(表の戸)”に置かれるため自然であるが、無標能動構文(57b)の視点はN<sub>1</sub>“人(人)”に置かれるため不自然である。これに対して、(58)が示すように、「犬が君を噛んだ」という好ましくないことの責任者がN<sub>1</sub>“狗(犬)”ではないことを表す場合、“把”能動構文(58a)は不自然であるが、無標能動構文(58b)は自然である。

以上の分析から明らかなように、“把”能動構文は話し手がN<sub>1</sub>に責任付与することをしばしば積極的に含意する。

#### 3.4.3.4 影響結果の「意外性」

“把”能動構文と“却”、“竟然”などの逆接の接続詞との共起関係を考察しよう。

(59) a. 妹妹还没吃饭，哥哥 却 把 最后一片面包 吃了。

兄 ～のに ba 最後の一切れのパン 食べる-PRF

b.?妹妹还没吃饭，哥哥 却 吃了 最后一片面包。

兄 ～のに 食べる-PRF 最後の一切れのパン

(妹はまだご飯を食べていないのに、兄は最後の一切れのパンを食べてしまった。)

(60) a. 萧峰 全力地 一掌打去， 竟然就 把 阿朱 打死了。

萧峰 力いっぱい 一発ぶん殴る なんと ba 阿朱 殴る-殺す-PRF

b.?萧峰 全力地 一掌打去， 竟然就 打死了 阿朱。

萧峰 力いっぱい 一発ぶん殴る なんと 殴る-殺す-PRF 阿朱

(萧峰は力いっぱい一発ぶん殴り、なんと阿朱を殴り殺してしまった。)

“把”能動構文(59a)-(60a)の話し手の焦点はVP“吃了(食べた)”、“死了(死んだ)”という影響結果であるため、「パンが食べられた」、「阿朱が死んだ」という結果が「意外」であると思われる場合、文は容認される。しかし、無標能動構文(59b)-(60b)の話し手の焦点はN<sub>2</sub>“面包(パン)”、“阿朱(阿朱)”であるため、「パンが食べられた」、「阿朱が死んだ」という結果が「意外」と思われる場合、文は不自然になる。

以上の分析から明らかなように、“把”能動構文は話し手が影響結果を意外に感じるということをしばしば積極的に含意する。

### 3.4.3.5 N<sub>2</sub>への「強影響性」

“把”能動構文はN<sub>2</sub>の「完全受影響」という意味があると张伯江(2001)は指摘する。N<sub>2</sub>の「完全受影響」の意味は、“把”能動構文の焦点がVPの表す動作・行為/影響・変化であるという構造上の特徴から生み出されると思われる。本節では、さらに例を考察し、その意味とその適用範囲を詳しく分析する。

まず、結果補語がない文を観察してみよう。

(61) a. 老张 把 酒 都 喝了。

張さん ba 酒 全て 飲む-PRF

b.\*老张 都 喝了 酒。

張さん 全て 飲む-PRF 酒

c. 老张 把 酒 喝了。

張さん ba 酒 飲む-PRF

(張さんは酒を全て飲んだ。)

(62) a. 大家 拼命地 救火, 把 锅里的菜汤 全部 洒了。

みんな 必死に 消火する ba 鍋の中のスープ 全部 こぼす-PRF

b.\*大家 拼命地 救火, 全部 洒了 锅里的菜汤。

みんな 必死に 消火する 全部 こぼす-PRF 鍋の中のスープ

c. 大家 拼命地 救火, 把 锅里的菜汤 洒了。

みんな 必死に 消火する ba 鍋の中のスープ こぼす-PRF

(みんなで必死に消火をしていたら、鍋の中のスープを全部こぼして  
しまった。)

(61)が示すように、“把”能動構文(61a)は程度副詞“都(全て)”と共起できるが、無標能動構文(61b)は程度副詞“都(全て)”と共起できない。“把”能動構文(61c)は“都(全て)”がなくても「全て飲んだ」という意味も伝えている。また、(62)が示すように、“菜汤(スープ)”は「全部こぼれた」という意味を表す場合、“把”能動構文(62a)は程度副詞“全部(全部)”と共起できるが、無標能動構文(62b)は程度副詞“全部(全部)”と共起できない。一方、“把”能動構文(62c)は“全部(全部)”がなくても「全部こぼれた」という意味も伝えている。

N<sub>2</sub>が人間である場合の“把”能動構文と無標能動構文の区別について、次の例を観察しよう。



(63) a. \*小张 把 小明 轻轻 打了 一下。

張さん ba 明さん 軽い 殴る-PRF 一度

b. 小张 轻轻 打了 小明 一下。

張さん 軽い 殴る-PRF 明さん 一度

(張さんは明さんを一度軽くこづいた。)

(64) a. 小张 把 小明 打了。

張さん ba 明さん 殴る-PRF

b. 小张 打了 小明。

張さん 殴る-PRF 明さん

(張さんは明さんを殴った。)

(63)が示すように、“把”能動構文(63a)は程度副詞“轻轻(軽く)”と共起できないが、無標能動構文は程度副詞“轻轻(軽く)”と共起できる。その理由は、“把”能動構文(64a)には、N<sub>2</sub>“小明(明さん)”が「ひどく殴られた」という意味が含まれているが、無標能動構文(64b)にはその意味が含まれていないからである。このように、“把”能動構文は、程度副詞がなくてもN<sub>2</sub>が人間である場合、N<sub>2</sub>に対して強い影響があるという意味を表す。

N<sub>2</sub>が抽象的な事物である“把”能動構文と無標能動構文の区別について、次の例を観察しよう。

(65) a. 我 把 这本小说 读了。

私 ba この小説 読む-PRF

b. 我 读了 这本小说。

私 読む-PRF この小説

(私はこの小説を読んだ。)

(66) a. \*我 把 这本小说 读了, 但是 没 读完。

私 ba この小説 読む-PRF しかし NEG 読み終わる

b. 我 读了 这本小说, 但是 没 读完。

私 読む-PRF この小説 しかし NEG 読み終わる

(私はこの小説を読んだが、読み終わっていない。)

- (67) a. 36524 网 真好, 打个电话就 把 事 办了。  
 36524 ネット すばらしい 電話をかけると **ba** 事 済ませる-PRF
- b.\*36524 网 真好, 打个电话就 办了 事。  
 36524 ネット すばらしい 電話をかけると 済ませる-PRF 事  
 (36524 ネットはすばらしく、電話をかけると、すぐに事を済ませることができた。)

(65)が示すように、「この小説を読んだ」を表す際、“把”能動構文(65a)も無標能動構文(65b)も用いられる。しかしながら、“把”能動構文(66a)は「この小説を読み終えた」という意味を含んでいるが、無標能動構文(66b)はその意味を含まない。そのため、文脈を加えて、「読み終わっていない」を表す場合、“把”能動構文(66a)は不適格、無標能動構文(66b)は適格となる。(67)では、「事をする」だけではなく、「事を済ませた」ということを表す場合、“把”能動構文(67a)は適格であるが、無標能動構文(67b)は不適格である。次に、結果補語で影響結果が明示されている文を観察しよう。

- (68) a. 老张 把 酒 喝光了。  
 張さん **ba** 酒 飲む-少しも残っていない-PRF
- b. 老张 喝光了 酒。  
 張さん 飲む-少しも残っていない-PRF 酒  
 (張さんは酒を飲み干した。)
- (69) a. 小张 把 小明 打伤了。  
 張さん **ba** 明さん 殴る-傷つく-PRF
- b. 小张 打伤了 小明。  
 張さん 殴る-傷つく-PRF 明さん  
 (張さんは明さんを殴り、けがをさせた。)

(70) a. 我 把 这本小说 读完了。

私 ba この小説 読み-終わる-PRF

b. 我 读完了 这本小说。

私 読み-終わる-PRF この小説

(私はこの小説を読み終えた。)

(68)-(70)では、“光(残っていない)”、“伤(傷つく)”、“完(終わる)”などの結果補語で  $N_2$  への影響結果が明示されている。この場合、“把”能動構文(68a)-(70a)も無標能動構文(66b)-(68b)も同様に同じ結果を表す。そのため、 $N_2$  への影響結果が明示される場合、“把”能動構文は「完全受影響」という意味的特徴があるとは言えない。

以上の分析から明らかなように、 $N_2$  への影響結果が明示されていない場合、“把”能動構文は話し手が  $N_2$  へ与える影響が「強影響」だということをしばしば積極的に含意する。具体的には、 $N_2$  が物の場合、その物の全部や全体に影響を与えるという意味を表し、 $N_2$  が有情物の場合、その有情物に強い影響を与えるという意味を表し、 $N_2$  が抽象的な事物の場合、その事物に完全に影響を与えるという意味を表す。

#### 3.4.3.6 「命令・警告」文への出現

“把”能動構文の焦点は VP の表す動作・行為/影響・変化という影響結果にあるため、「命令」、「警告」を表す際、「結果」のほうを重視している話し手にとっては、無標能動構文より“把”能動構文のほうが自然である。

(71) a. 你 快 把 书包 准备好! 不然后要迟到了。

あなた 早く ba カバン 準備する-終わる

b.?你 快 准备好 书包! 不然后要迟到了。

あなた 早く 準備する-終わる カバン

(君早くカバンを準備しなさい! そうしないと遅れるよ。)

(72) a. 用心点, 別 把 游客 电着了!

するな ba 観光客 感電させる

b.?用心点, 別 电着 游客了!

するな 感電させる 観光客

(電気を使うときは気をつけなさい。観光客を感電させてはいけません!)

(71)で、話し手が聞き手に最も伝えたい情報は“书包(カバン)”ではなく、“准备好(準備が終わる)”ことである。“把”能動構文(71a)の焦点はVP“准备好(準備が終わる)”ことであるが、無標能動構文(71b)の焦点はN<sub>2</sub>“书包(カバン)”である。そのため、“把”能動構文(71a)は自然であるが、無標能動構文(71b)は不自然である。(72)で、話し手が聞き手に最も伝えたい情報は“游客(観光客)”ではなく、“別电着(感電させるな)”ことである。“把”能動構文(72a)の焦点はVP“別电着(感電させるな)”ことであるが、無標能動構文(72b)の焦点はN<sub>2</sub>“游客(観光客)”である。そのため、“把”能動構文(72a)は自然であるが、無標能動構文(72b)は不自然である。

以上の分析から明らかなように、「命令・警告」を表す場合には、“把”能動構文が用いられる。“把”能動構文は「命令・警告」文に出現できるといふ機能的特徴を持っている。

### 3.4.3.7 影響結果を表す N<sub>3</sub> との共起

N<sub>3</sub> を用いて同一の出来事を表す際、“把”能動構文が適格、無標能動構文は不適格という例がしばしば見られる。

(73) a. 小明 把 书 放上 书架。

明さん ba 本 置く-上 本棚

b.\*小明 放上 书 书架。

明さん 置く-上 本 本棚

(明さんは本を本棚に置いた。)

(74) a. 她 终于 把 谋害丈夫的凶手 告进了 监狱。

彼女 ついに ba 夫殺しの犯人 訴える-込む-PRF 牢屋

b.\*她 终于 告进了 谋害丈夫的凶手 监狱。

彼女 ついに 訴える-込む-PRF 夫殺しの犯人 牢屋

(彼女はついに夫殺しの犯人を牢屋にたたき込んだ。)

(75) a. 把 一个小问题 搞 成了 大问题。

ba 1つの小さな問題 する ~になる PRF 大きい問題

b.\*搞 成了 一个小问题 大问题。

する ~になる PRF 1つの小さな問題 大きい問題

(1つの小さな問題を大きい問題にした。)

(76) a. 小明 把 这本书 翻译 为 日语。

明さん ba この本 翻訳する ~になる 日本語

b.\*小明 翻译 为 这本书 日语。

明さん 翻訳する ~になる この本 日本語

(明さんはこの本を日本語に翻訳した。)

(73)では、N<sub>2</sub>“书(本)”の空間的な移動を表すために、N<sub>3</sub>“书架(本棚)”を用いている。(74)も、N<sub>2</sub>“谋害丈夫的凶手(夫殺しの犯人)”の空間的な移動を表すために、N<sub>3</sub>“监狱(牢屋)”を用いている。(75)-(76)の“成(~になる)”、“为(~になる)”は“趋向动词(趨向動詞)”である。(75)では、N<sub>2</sub>“小问题(小さな問題)”の性質の変化を表すために、N<sub>3</sub>“大问题(大きい問題)”を用いている。(76)では、N<sub>2</sub>“这本书(この本)”の言語の変化を表すために、N<sub>3</sub>“日语(日本語)”を用いている。(73)-(76)の共通点はN<sub>3</sub>を用いて影響結果を表現しているということである。この場合、無標能動構文は不適格であるが、“把”能動構文は適格である。“把”能動構文がN<sub>3</sub>を伴って複雑な影響結果を表す際にも用いられ得るのは、“把”能動構文の焦点がVPの表す動作・行為/影響・変化という影響結果にあるためである。

結論として、 $N_3$ を用いて影響結果を表す場合には、“把”能動構文が用いられる。“把”能動構文は影響結果を表す $N_3$ と共起できるという機能的特徴を持っている。

### 3.5 結び

本章では、中国語の能動文における各構文の使用状況、基本的特性を分析し、具体的な構文である“把”能動構文の意味・機能を明らかにした。その結果は(77)-(80)のようにまとめられる。

(77) 中国語の能動文における各構文の使用状況:

中国語には、無標能動構文、“把”能動構文、“将”能動構文、“给”能動構文という能動文が存在する。これらの具体的な能動文の中に、どのような場合においても適格となる構文は存在しない。無標能動構文のみ適格である場合があり、また、“把”能動構文のみ適格である場合がある。(3.2 節参照)

(78) 中国語の能動文の基本的特性:

(i) 中国語の能動文の視点は、一般に、 $N_1$ 〈動作主〉に置かれる。無標能動構文の焦点は $N_2$ 〈動作対象〉/〈受影主〉であるが、有標能動構文の焦点はVPの表す動作・行為/影響・変化である。(3.3.1 節参照)

(ii) 中国語の能動文は客観的に出来事を描写することができる。

(3.3.2 節参照)

(79) “把”能動構文に課される意味的・機能的制約:

(i) “把”能動構文は、Vの表す動作・行為を通して、 $N_2$ の「絶対的状態変化」あるいは「相対的状態変化」があったということが捉えられる場合に成立する。一方、 $N_2$ の「絶対的状態変化」も「相対的状態変化」も捉えられない場合、“把”能動構文は成立しない。(3.4.2.1 節参照)

(ii)  $N_2$ がVの表す動作・行為の前に存在している場合、すなわち、 $N_2$ が「絶対的既存性」あるいは「相対的既存性」を有する場合には、“把”能動構文が成立する。一方、 $N_2$ が「絶対的既存性」も「相対的既存性」も有さない場合には、“把”能動構文は成立しない。(3.4.2.2 節参照)

(80) “把”能動構文の意味的・機能的特徴:

(i) “把”能動構文は、話し手が  $N_2$  に関心を持っていること、 $N_1$  に責任付与すること、影響結果を意外に感じることに、 $N_2$  への影響が「強影響」ということをしばしば積極的に含意する。 (3.4.3 節参照)

(ii) “把”能動構文は、「命令・警告」文に出現できる、影響結果を表す  $N_3$  と共起できるという機能的特徴を持っている。 (3.4.3 節参照)

## 第4章 中国語の受身文

### 4.1 はじめに

中国語の受身文について、従来の研究では、“被”構文を中心に行われてきた（王力 1943；劉月華・潘文娛・故鞏 1991；赵清永 1993；沈力 1996；张伯江 2001；杨国文 2002；王振来 2006、2009；屈哨兵 2008；三宅登之 2009；廖郁雯 2012；高橋弥守彦 2012）。“被”構文の伝統的な意味解釈は「被害」である。しかし、王力（1943）、劉月華・潘文娛・故鞏（1991）、楊国文（2002）などの研究者は、“被”構文も「受益」の意味を表すことができることを証明し、“让”を用いる受身文、“叫”を用いる受身文などにも注目して、中国語の受身文についての研究を行った。近年、中国語にもヴォイスという文法現象が広く認められることになり、中国語の能動文、使役文と比較しながら、受身文を分析する研究も見られ（张伯江 2001；赵清永 1993；沈力 1996；江藍生 2000；謝新平 2001；刘海波 2015）、受身文の成立要件や各具体的な受身文、“被”受身構文、“让”受身構文、“叫”受身構文、無標受身構文の意味的・機能的特徴についての研究成果が出ている（王振来 2006、2009；屈哨兵 2008；张万禾 2007）。しかしながら、“被”受身構文、“让”受身構文、“叫”受身構文、無標受身構文などの各構文の成立要件や意味的特徴は今までの研究の中で論じられてはきたものの、例文を注意深く観察していくと、これまでの論述は必ずしも全ての事例を説明できてはいない。つまり、“被”受身構文、“让”受身構文、“叫”受身構文、無標受身構文の意味的・機能的特徴に関して十分には明らかにされていない。

本章では、まず、中国語の受身文における各構文の使用状況を概観する。また、中国語の受身文の基本的特性を分析する。最後に、“被”受身構文と比較しながら、“让”受身構文の意味的・機能的特徴を明らかにする。

### 4.2 中国語の受身文における各構文の使用状況

現代中国語には、“被”受身構文、“让”受身構文、“叫”受身構文、無標受身構文などの受身文が存在する。



- (1) a. 花瓶 被 小明 打碎了。  
花瓶 bei 明さん 打ち砕く-PRF
- b. 花瓶 让 小明 打碎了。  
花瓶 rang 明さん 打ち砕く-PRF
- c. 花瓶 叫 小明 打碎了。  
花瓶 jiao 明さん 打ち砕く-PRF  
(花瓶は明さんに打ち砕かれた。)

- (2) 老张 跑了 老婆。  
張さん 逃げる-PRF 妻  
(張さんは妻に逃げられた。)

(1a)は“被”受身構文、(1b)は“让”受身構文、(1c)は“叫”受身構文、(2)は無標受身構文である。

- (3) a. 李明 {被 / \*让 / \*叫} 老师 表扬了。  
李明 bei rang jiao 先生 褒める-PRF
- b.\*李明 表扬了 老师。  
李明 褒める-PRF 先生  
(李明は先生に褒められた。)

(3)が示すように、出来事「李明は先生に褒められた」を中国語の受身文で表す際、(3a)の“被”受身構文は適格であるが、(3a)の“让”受身構文、“叫”受身構文、(3b)の無標受身構文は不適格である。

- (4) a. 他 很粗心 {?被 / 让 / 叫} 小偷 偷了。  
彼 不注意 bei rang jiao 泥棒 盗む-PRF
- b.\*他 很粗心 偷了 小偷。  
彼 不注意 盗む-PRF 泥棒  
(彼は不注意で泥棒に盗まれた。)

(4)が示すように、出来事「彼は不注意で泥棒に盗まれた」を中国語の受身文で表す際、(4a)の“被”受身構文は不自然であるが、(4a)の“让”受身構文、“叫”受身構文は適格である。(4b)の無標受身構文は不適格である。

- (5) a. 孔子 三岁时 { \*被 / \*让 / \*叫 } 父亲 死了。  
孔子 3歳の時 bei rang jiao 父 死ぬ-PRF
- b. 孔子 三岁时 死了 父亲。  
孔子 3歳の時 死ぬ-PRF 父  
(孔子は3歳の時父に死なれた。)

(5)が示すように、出来事「孔子は3歳の時父に死なれた」を中国語の受身文で表す際、(5a)の“被”受身構文、“让”受身構文、“叫”受身構文は不適格であるが、(5b)の無標受身構文は適格である。

(1)-(5)をまとめて観察すると、“被”受身構文、“让”受身構文、“叫”受身構文、無標受身構文の中に、どのような場合においても適格となる構文は存在しない。“被”受身構文のみ適格である場合があり、また、無標受身構文のみ適格である場合がある。

### 4.3 中国語の受身文の基本的特性

本節では、まず中国語の受身文の情報構造を明らかにする。また、同じくヴォイス構文の下位分類である能動文との比較対照の観点から、中国語の受身文の「影響性」制約、「特徴付け」制約、「関与性」制約という基本的特性を分析する。

#### 4.3.1 受身文の情報構造

本論文の2.5.4節では、受身文の構造を明らかにした。受身文は無標受身構文と有標受身構文に分けられる。受身標識 pm (passive voice marker) の有無によって、VP (述語動詞句) と N<sub>2</sub> の位置関係も変わる。受身文の構

造、第2章の(46)の受身文の定義及び3.3.1節で論述した視点、焦点の判断基準に基づけば、中国語の受身文の情報構造は表4-1のようにまとめられる。

表 4-1 受身文の情報構造

	視点			焦点
無標受身構文	N <sub>1</sub>	VP		N <sub>2</sub>
	〈動作対象〉 / 〈受影主〉	動作・行為 / 影響・変化		〈動作主〉
有標受身構文	N <sub>1</sub>	am	N <sub>2</sub>	VP
	〈動作対象〉 / 〈受影主〉	受身標識	〈動作主〉	動作・行為 / 影響・変化

表4-1が示すように、一般に視点は、無標受身構文においても有標受身構文においてもN<sub>1</sub>〈動作対象〉 / 〈受影主〉に置かれる。無標受身構文の焦点はN<sub>2</sub>〈動作主〉であるが、有標受身構文の焦点はVPの表す動作・行為 / 影響・変化である。

#### 4.3.2 「影響性」制約

木村英樹（2012）は中国語の受身文の成立について、従来「被動文（“被动句”）」の名で呼ばれてきた“X被YV”の特筆すべき特徴は、主語に立つ対象Xが単に動作・行為を受けることを述べるだけでは成立し難く、Xが動作・行為の結果として被る何らかの具体的な〈影響〉を明示する表現、もしくはそれを強く含意する表現を述語成分に要求するという点にあると指摘し、中国語の“被”受身構文を「受影文」と呼んでいる。张伯江（2001）は、受事への影響がない出来事を表す場合、受身文を用いることができないと指摘する。

(6) a.\*这本小说 被 小明 读过。

この小説 bei 明さん 読む-PRF

(この小説は明さんに読まれた。)

b. 小明 读过 这本小说。

明さん 読む-PRF この小説

(明さんはこの小説を読んだことがある。)

受身文(6a)では、〈動作対象〉である  $N_1$  “这本小说(この小説)”は  $V$  “读(読む)”という動作から何らかの影響を受けることが捉えられない。そのため、受身文(6a)は不適格である。これに対して、能動文(6b)では、〈動作対象〉である  $N_1$  “这本小说(この小説)”は  $V$  “读(読む)”という動作から何らかの影響を受けることが捉えられなくても適格である。

本論文は張伯江(2001)、木村英樹(2012)に基づいて、中国語の受身文に関して次の(7)の制約をまとめる。

(7) 「影響性」制約:

中国語の受身文は、一般に、 $V$  の表す動作・行為によって  $N_1$  への影響が捉えられない場合には不適格となる。

(7)の制約は多くの中国語の受身文の適格性を説明することができるが、しかし次の(8)、(9)、(11)のような受身文は、この制約において問題が生じる。

#### 4.3.3 「特徴付け」制約

中国語の受身文の成立は、一般に、「影響性」制約が課される。しかしながら、(8)、(9)のように  $N_1$  への「影響」が捉えられなくても受身文が成立する例文が存在する。

(8) 这本小说 被 美国总统奥巴马 读过。

この小説 bei アメリカの大統領オバマ 読む-PRF

(この小説はアメリカの大統領オバマに読まれた。)

(9) 这本小说 被 几百万人 读过。

この小説 bei 何百万人 読む-PRF

(この小説は何百万人もの人たちに読まれた。)

(8)-(9)が示すように、N<sub>1</sub>“这本小说(この小説)”は“读(読む)”という動作から何らかの影響を受けることが捉えられないが、受身文が成立する。(8)では、“读(読む)”の動作主 N<sub>2</sub>“奥巴马(オバマ)”は有名人である。そのため、「有名人であるオバマに読まれた」ということは小説の特徴と考えられる。(9)では、N<sub>2</sub>“几百万(何百万人)”に「読まれた」ということは、N<sub>1</sub>“这本小说(この小説)”の特徴付けをしていると考えられる。(8)-(9)が示すように、N<sub>1</sub>がVの表す動作・行為によって何らかの特徴が付けられる場合、「影響性」が捉えられなくても受身文が成立し、これらの受身文の適格性は、(7)の制約からでは十分に捉えられない。

本論文は、中国語の受身文の成立に関して次の制約を提案する。

(10) 「特徴付け」制約:

中国語の受身文は、Vの表す動作・行為によってN<sub>1</sub>が特徴付けられる場合には適格となる。

#### 4.3.4 「関与性」制約

中国語の受身文の成立は、一般に、「影響性」制約が課される。しかしながら、(11)のようにN<sub>1</sub>への「影響性」が捉えられなくても受身文が成立する例文が存在する。

(11) 小红 被 小明 爱着。

紅さん bei 明さん 愛する-PROG

(紅さんは明さんに愛されている。)

(11)では、明さんが紅さんを愛しているとしても、紅さんがそれをしらなければ影響を受けているとは考えられない。しかし、この場合でも、明さんは「愛する」という行為を通して紅さんに関与していると考えられる。ここで

言う「関与 (involve)」<sup>34</sup>は「愛する」、「憎む」、「関心する」、「無視する」などの感情を表す動詞の動作主の「心理状態」によって生じる人間と人間との何らかの感情的関係・関連を指す。(11)が示すように、この「関与性」が捉えられる場合、受身文は適格である。そのため、この受身文の適格性は、(7)の制約では十分に捉えられない。

本論文は、中国語の受身文の成立に関して次の制約を提案する。

(12) 「関与性」制約:

中国語の受身文は、Vの表す動作・行為によってN<sub>1</sub>にN<sub>2</sub>が関与することになる場合には適格となる。

以上の考察から、「影響性」制約の補足として、「特徴付け」制約、「関与性」制約は、より広範囲の中国語の受身文の適格性を説明できることが分かる。

#### 4.4 “让”受身構文の意味的・機能的分析

本節では、“让”受身構文に関する先行研究を踏まえて、“被”受身構文との比較対照の観点から、中国語の“让”受身構文の意味・機能を分析する。

##### 4.4.1 先行研究

受身文は中国語における重要な言語表現として数多くの先行研究が行われてきた(呂叔湘 1980; 王力 1943; 劉月華・潘文娛・故韡 1991; 趙清永 1993; 王灿龙 1998; 楊国文 2002; 屈哨兵 2008; 王振来 2009; 三宅登之 2009)。

---

<sup>34</sup> 久野暉(1983:202)は、心理動詞(love, admire, dislike等)が用いられたMary is loved by John.のような受身文では、ジョンがメアリーを愛することによって、メアリーは自分が意識していようがまいが、ジョンの愛の受け手であり、愛するという心理状態の直接的対象(direct target)として、その状態にインヴォルヴしていると言う(高見健一 1997:50)。本論文における「関与」は久野暉(1983)が提案する「インヴォルヴ」すなわち「関与(involve)」と同じ概念である。

中国語には、“被”受身構文、“让”受身構文、“叫”受身構文、無標受身構文などの受身文が存在する。高橋弥守彦（2012）は、受身標識である“被/让/叫/给”のうち、“被”が最もよく使われると指摘する。“被”受身構文との比較対照の観点から、“让”受身構文に関する研究も見られる（吕叔湘 1980；王力 1943；楊国文 2002；屈哨兵 2008；三宅登之 2009）。

“让”受身構文の成立要件について、吕叔湘（1980）は受身を表す“被”はしばしば動詞の直前に置かれて用いられるが、“让”はこのような用法が無く、施事<sup>35</sup>の前に置かれると指摘する。王力（1943）は施事が明示されていない場合、“被”が用いられ、“让”は用いられないと指摘する。劉月華・潘文娛・故韓（1991）は“让”を含む受動文において、介詞“让”はその目的語を欠くことはできないと指摘する。三宅登之（2009）は、“被”は、その後本来伴う動作主を省略し、直接述語動詞と結ぶことができるが、一般に“叫”、“让”ではその後の動作主を省略できないと指摘している。しかし、次の例文のように、以上の条件を満たしながら、不適格となる“让”受身構文も存在する。

(13) 这段历史 { \*让/ 被 } 人们 遗忘了。

この歴史 rang bei 人々 忘れ去る-PRF

（この歴史は人々に忘れ去られた。）

(13)では施事、動作主である N<sub>2</sub> “人们（人々）”が明示されても、“让”受身構文は不適格である。従って、“让”受身構文の成立要件は今までの研究の中で多少は論じられているものの、深く例文を観察して行くと、今までの研究の成果では説明が付かない事例が見受けられる。従って、完全には研究されていないと言える。

中国語の“让”受身構文の意味的・機能的特徴について、吕叔湘（1980）、王力（1943）、劉月華・潘文娛・故韓（1991）、楊国文（2002）は“被”

---

<sup>35</sup> 中国語学では、動作・行為の作用・影響を与える主体（人/物/事）が主語以外の位置に置かれるときに、それを施事と呼ぶ。

は主に書面語として用いられ、“让”は主に口語として用いられると主張する。张斌（2001）は、“叫”、“让”、“给”は主に口語の中に用いられ、“被”は口語と書面語の両方で用いられている事を指摘している。しかし、杜暉（2012）の言語資料の考察によると、“让”受身構文が書面語に用いられる例も数多く見られる。従って、“让”受身構文が本来口語として用いられるという機能的特徴を有するとは言えない。また、“让”受身構文と“被”受身構文が両方とも用いられる場合、“让”受身構文はどのような意味的特徴があるのかについて、先行研究は説明していない。従って、“让”受身構文の意味的・機能的特徴は未だ十分に研究されていないと言える。

#### 4.4.2 “让”受身構文に課される意味的・機能的制約

本節では、前節で検討した先行研究とその問題点に基づいて、“被”受身構文と比較対照しながら、“让”受身構文の各構文要素や各構文要素の意味的關係を考察し、その文が適格となるための意味的・機能的制約を明らかにする。

##### 4.4.2.1 非意図的動作主の禁止

本節では、N<sub>2</sub>が非意図的な行為者である例を考察する。

(14) 这段历史 { \*让 / 被 } 人们 遗忘了。

この歴史 rang bei 人々 忘れ去る-PRF

(この歴史は人々に忘れ去られた。)

(15) 他 逐渐 { \*让 / 被 } 大家 忘记了。

彼 次第に rang bei 皆 忘れる-PRF

(彼は次第に皆に忘れられていった。)

(16) 她 常常 { \*让 / 被 } 同学 忽略。

彼女 常日頃 rang bei クラスメート 無視される

(彼女は常日頃クラスメートに無視される。)



(14)-(16)が示すように、VPが“遗忘（忘れ去る）”、“忘记（忘れる）”、“忽略（無視される）”である場合、すなわち、N<sub>2</sub>が非意図的な動作主である場合、“被”受身構文は適格であるが、“让”受身構文は不適格である。従って、“让”受身構文の成立に必要な制約は次のように規定できる。

(17) “让”受身構文は、N<sub>2</sub>が非意図的な動作主である場合には不適格となる。

#### 4.4.2.2 N<sub>1</sub>への認識表現に対する制限

中国語において、格助詞“作（～とする）”、“为（～とする）”、“成（～とする）”をしばしば“称（呼ぶ）”、“定义（認定される）”、“读（読む）”などの動詞の後ろに置いて、「～と呼ぶ」、「～と認定する」、「～と見なす」を表す。次の例を観察してみよう。

(18) 一时 京城 { \*让 / 被 } 外地人 称 作 贼城。

一時 京城 rang bei 他所の人 呼ぶ ～とする 賊の街

(一時京城は他所の人に賊の街と呼ばれていた。)

(19) 这种药物 { \*让 / 被 } 政府 定义 为 违法药品。

この薬 rang bei 政府 認定する ～とする 違法薬品

(この薬は、政府に違法薬品と認定されている。)

(20) 王朋 { \*让 / 被 } 老师 读 成了 “王月月”。

王朋 rang bei 先生 読む ～とする -PRF 王月月

(王朋は先生に「王月月」と読まれてしまった。)

(18)-(20)が示すように、VP“称作贼城（賊の街と呼ぶ）”、“定义为违法药品（違法薬品と認定する）”、“读成了王月月（王月月と呼ぶ）”は、N<sub>2</sub>“外地人（他所の人）”、“政府（政府）”、“老师（先生）”がN<sub>1</sub>“京城（京城）”、“这种药物（この薬）”、“王朋（王朋）”に対する認識を表す場合、“被”受身構文は適格であるが、“让”受身構文は不適格である。

本論文は、“让”受身構文の適格性を説明するために、次の制約を提案する。

(21) “让”受身構文は、N<sub>2</sub>のN<sub>1</sub>に対する認識を表現する場合には不適格となる。

#### 4.4.2.3 N<sub>2</sub>の義務的明示

本章の表 4-1 受身文の情報構造に基づけば、有標受身構文の焦点は VP である。有標受身構文の話し手が N<sub>1</sub> が影響を受けた後の状態に注目するため、N<sub>2</sub> が省略される例がよく観察される。

- (22) a. 小王 {让/ 被} 小张 打了。  
王さん rang bei 張さん 殴る-PRF  
(王さんは張さんに殴られた。)
- b. 小王 {\*让/ 被} 打了。  
王さん rang bei 殴る-PRF  
(王さんは殴られた。)
- (23) a. 水杯 {让/ 被} 他 打碎了。  
コップ rang bei 彼 壊す-PRF  
(コップは彼に壊された。)
- b. 水杯 {\*让/ 被} 打碎了。  
コップ rang bei 壊す-PRF  
(コップは壊された。)

(22)-(23)が示すように、N<sub>2</sub> “小张 (張さん)”、“他 (彼)” が明示される場合も明示されない場合も“被”受身構文は適格である。しかし、N<sub>2</sub> が明示されない場合、“让”受身構文は不適格である。

本論文は、“让”受身構文の適格性を説明するために、次の制約を提案する。

(24) “让”受身構文は、N<sub>2</sub>が文中に明示されていない場合<sup>36</sup>には不適格となる。

#### 4.4.2.4 N<sub>1</sub>への受益表現に対する制限

三宅登之（2009）は“叫”、“让”、“给”を用いた受身文は、迷惑や被害にのみ用いられるが、一方“被”構文は、書面語において西欧語の影響を受けているため、迷惑や被害の意を表すといった制約から逸脱し、良いことや好ましいことにおいても用いられると指摘している。確かに、現代中国語においては、N<sub>1</sub>にとって「好ましい」、「愉快的」、「望ましい」ことを表す時、受身文を用いて表現することができる。

(25) 李明 { \*让/ 被 } 老师 表扬了。

李明 rang bei 先生 褒める-PRF

（李明は先生に褒められた。）

(26) 他 { \*让/ 被 } 两所大学 同时 录取了。

彼 rang bei 2つの大学 同時 合格する-PRF

（彼は同時に2つの大学に合格した。）

(27) 2003年 贝克汉姆 { \*让/ 被 } 授予 昆明市“荣誉市民”称号。

2003年 ベッカム rang bei 授ける 昆明市の荣誉市民の称号

（2003年にベッカムは昆明市の「荣誉市民」の称号を授けられた。）

(25)-(27)が示すように、VP“表扬（褒める）”、“两所大学同时录取（同時に2つの大学に合格する）”、“授予昆明市“荣誉市民”称号（昆明市の「荣誉市民」の称号を授ける）”はN<sub>1</sub>“李明（李明）”、“他（彼）”、“贝克汉姆（ベッカム）”にとって「有益」であるということを表す際は、“被”受身構文は適格であるが、“让”受身構文は不適格である。

---

<sup>36</sup> この制約は、呂叔湘（1980）、王力（1985）、劉月華・潘文娛・故韡（1991）、三宅登之（2009）の“让”受身構文に関する主張と一致している。

本論文は、“让”受身構文の適格性を説明するために、次の制約を提案する。

(28) “让”受身構文は、N<sub>1</sub>に対してVPの表す動作・行為/影響・変化が「有益」である場合には不適格となる。

#### 4.4.2.5 出来事実現の可能性表現に対する制限

中国語において、“可能（かもしれない）”、“要（しそうだ）”、“一定（必ず）”などの“情态助词（法助動詞）”を用いて、話し手の出来事の実現の可能性に対する態度を表す。

(29) 他的邀请      可能      { \*让 / 被 }      李红      拒绝。

彼の誘い      かもしれない      rang bei      李紅      断る

(彼の誘いは李紅に断られるかもしれない。)

(30) 这艘船      随时      要      { \*让 / 被 }      海浪      吞噬。

この船      常に      しそうだ      rang bei      波      呑み込む

(この船は常に波に呑み込まれる危険性をおびている。)

(31) 这个问题      一定      { \*让 / 被 }      领导      重视。

この問題      必ず      rang bei      上司      重視する

(この問題は必ず上司に重視される。)

(32) 一切法规      将      { \*让 / 被 }      新国王      废除。

一切の法規      だろう      rang bei      新国王      廃除する

(一切の法規は新国王によって廃除されるであろう。)

(29)-(32)は、“可能（かもしれない）”、“要（しそうだ）”、“一定（必ず）”、“将（だろう）”という「可能性」の意味を表す“情态助词(法助動詞)”によって、文が表す出来事“李红拒绝他的邀请（李紅は彼の誘いを断る）”、“海浪吞噬这艘船（波はこの船を呑み込む）”、“领导重视这个问题（上司はこの問題を重視する）”、“新国王废除一切法规（新国王は一切

の法規を廃除する)”の実現の可能性に対する話し手の態度を表現している。この場合、“被”受身構文は適格であるが、“让”受身構文は不適格である。

本論文は、“让”受身構文の適格性を説明するために、次の制約を提案する。

(33) “让”受身構文は、話し手が出来事の実現の「可能性」に対する態度を表現する場合には不適格となる。

#### 4.4.3 “让”受身構文の意味的・機能的特徴

本節では、受身標識“让”の文法化過程・程度を考察し、“被”受身構文と比較対照しながら、“让”受身構文の意味的・機能的特徴を明らかにする。

##### 4.4.3.1 受身標識“让”の文法化

中国語はほかの言語と同じように、大多数の話し手に意識されることなく変化している。“让”と“被”という語彙が現れて以来、それらは歴史の変遷を経て、機能的な役割も変化している。本節では、“让”受身構文の意味的・機能的特徴を分析するための手掛かりを探すため、現代中国語における“让”と“被”の受身標識への文法化過程を紹介し、辞典に載っている“让”と“被”の全ての文法的機能についてそれぞれの文法化程度を検討する。

“让”という語彙は動詞として本来「譲る」、「譲り渡す」という意味を持っている。王振来(2006)は、“让”は初め使役標識として使われて、清の時代(1636年～1911年)から“让”が受身標識として使われ始めたと指摘する。『講談社中日辞典 第二版』によれば、現代中国語における“让”の文法的機能は以下のようにまとめられる。

- (34) 让 a. 謙る。讓歩する  
b. 讓る。讓り渡す。  
c. 勸める。案内する。  
d. 許す。…させる。…させておく。  
e. (願望を表し、呼びかけに用いる)…しよう。

f. …に(…される)。

(相原茂 編 1998:1301)

(34a)、(34b)、(34c)及び(34e)は“让”の動詞としての文法機能を示し、実詞<sup>37</sup>の用法である。(34d)は“让”の使役標識、(34f)は“让”の受身標識としての文法機能を示し、虚詞の用法である。

王振来(2006)は受身標識の“被”は「蒙る」の意味から発展して生まれたと指摘している。『中日大辞典 第二版』によれば、現代中国語における“被”の文法的機能は以下のようにまとめられる。

(35) 被 a. 掛け布団。

b. 覆う。

c. 遭う。受ける。被る。

d. …される(仕手を特定しないで受け身となる)。

e. …に(…される)。…から(…される)。(受身の形で仕手が示される)

(相原茂 編 1998:67)

(35a)は“被”の名詞としての文法機能を示し、実詞の用法である。(35b)、(35c)は“被”の動詞としての文法機能を示し、実詞の用法である。(35d)、(35e)は“被”の受身標識としての文法機能を示し、虚詞の用法である。“被”の虚詞としての役割は受身標識しかない。

(34)-(35)が示すように、“让”は受身標識以外に、4つの実詞の用法と1つの虚詞の用法がある。“被”は受身標識以外に、3つの実詞の用法がある。“让”は虚詞としては、受身標識、使役標識の両方で使用されており、一方、“被”は虚詞としては、受身標識としてのみ用いられる。つまり、“被”は

---

<sup>37</sup> 実詞とは、中国語では、名詞や動詞、形容詞など、単独で具体的な意味を持つ語を指す。

受身標識として専門的に用いられ、受身標識としての文法化程度は“让”よりは高いと考えられる。

#### 4.4.3.2 N<sub>1</sub>への「責任付与」

前節で論じたように、“让”は最初は使役標識として使われて、その後受身標識として使われるようになった。受身標識“让”は使役標識“让”から発展したという仮説を立て、次の例を考えよう。

(36) 小明 让 小王 打了 小张。

明さん rang 王さん 殴る-PRF 張さん

(明さんは王さんに張さんを殴らせた。)

“让”使役構文(36)では、N<sub>1</sub>“小明(明さん)”は動作主ではないが、使役主として、「張さんを殴った」ということの発生に対して一定の責任が捉えられる。(36)のV“打(殴る)”の動作対象が“小明(明さん)”自分になると、次の文になる。

(37) 小明 让 小王 打了 自己。

明さん rang 王さん 殴る-PRF 自分

(明さんは王さんに自分を殴らせた。)

(37)が示すように、「明さんは王さんに自分を殴らせた」という状況は、“小明(明さん)”は「王さんが自分を殴る」ことに対する責任を持つと同時に、“小明(明さん)”自身が動作を受ける対象である。“自己(自分)”を省略すると、文は使役文であるのか受身文であるのか、曖昧性が生じる。

(38) 小明 让 小王 打了。

明さん rang 王さん 殴る-PRF

(明さんは王さんに殴らせた。/明さんは王さんに殴られた。)

(39) 小明 被 小王 打了。

明さん bei 王さん 殴る-PRF

(明さんは王さんに殴られた。)

(38)においては、「明さんは王さんに殴らせた」という使役文、「明さんは王さんに殴られた」という受身文の両方に捉えられる。しかし、(38)を受身文として捉えられても、N<sub>1</sub>“小明(明さん)”は動作対象であると同時に、V“打(殴る)”という動作の遂行に一定の責任があるため、話し手がN<sub>1</sub>“小明(明さん)”は「自分を殴る」という行為に責任があることをしばしば積極的に含意する。“被”を用いる(39)においては、N<sub>1</sub>“小明(明さん)”は動作・行為の動作対象としてのみ捉えられるので、N<sub>1</sub>に責任を付与するのは困難であると考えられる。従って、“让”受身構文(38)はN<sub>1</sub>“小明(明さん)”が積極的に出来事に参加し、出来事の発生に対して責任を持っているというニュアンスがあるのに対し、“被”受身構文には同様のニュアンスは含まれない。これを検証するため、“让”受身構文、“被”受身構文両方とも適格である例(40)を、次に話し手がN<sub>1</sub>に責任を付与するという主観的な態度を表す文脈要素を加えた例(41)を観察しよう。

(40) 他 {让/ 被} 小偷 偷了。

彼 rang bei 泥棒 盗む-PRF

(彼は泥棒に盗まれた。)

(41) 他 很粗心 {让/ ?被} 小偷 偷了。

彼 不注意 rang bei 泥棒 盗む-PRF

(彼は不注意で泥棒に盗まれた。)

(40)では、“让”受身構文も“被”受身構文も適格である。(41)では、N<sub>1</sub>“他(彼)”は「不注意」なので、「泥棒に盗まれた」に対して責任があるというニュアンスが含まれている。そのため、出来事の発生に対してN<sub>1</sub>の責任を認めるという意味を含意する“让”受身構文は適格であるが、N<sub>1</sub>に対して責任の意味を含意していない“被”受身構文は不適格である。



(42) 我们 {让/ 被} 敌人 打败了。

私たち rang bei 敵 打ち負かす-PRF

(私たちは敵に打ち負かされた。)

(43) 经过拼死抵抗, 我们 还是 {?让/ 被} 敌人 打败了。

必死の抵抗も空しく 私たち やはり rang bei 敵 打ち負かす-PRF

(必死の抵抗も空しく、私たちはやはり敵に打ち負かされた。)

(42)では、“让”受身構文も“被”受身構文も適格である。(43)では、N<sub>1</sub>“我们(私たち)”は「必死の抵抗」をしたので、「敵に打ち負かされた」という出来事に対しての責任を認めるニュアンスが含まれていない。そのため、N<sub>1</sub>に責任があるという意味を表す“让”受身構文は不適格であるが、N<sub>1</sub>への責任の意味を表さない“被”受身構文は適格である。

以上の分析から明らかなように、“让”受身構文は、話し手がN<sub>1</sub>に、出来事に対する責任を付与することをしばしば積極的に含意する。

#### 4.4.3.3 N<sub>1</sub>の「非被害認識」

4.4.3.1節で論じたように、受身標識“被”は「蒙る」の意味から発展して生まれたという背景により、“被”受身構文には、N<sub>1</sub>は受動的に影響結果を受けるという意味がある。それに対して、受身標識“让”は使役標識の“让”から発展して生まれたという背景により、“让”受身構文のN<sub>1</sub>は影響結果に対して何らかの能動的働きかけがあると考えられる。次にN<sub>1</sub>の「被害認識」を表す文脈要素を加える例を観察しよう。

(44) 小明 {让/ 被} 同学 借走了 车。

明さん rang bei クラスメート 借りて行く-PRF 車

(明さんはクラスメートに車を借りて行かれた。)

(45) 小明 {?让/ 被} 同学 借走了 车。结果迟到了。

明さん rang bei クラスメート 借りて行く-PRF 車

(明さんはクラスメートに車を借りて行かれてしまった。その結果、遅刻した。)

(46) 今天天气很好。小明 {让/?被} 同学 借走了 車  
明さん rang bei クラスメート 借りて行く-PRF 車  
就 走着 去了 学校。

～と 歩いて 行く-PRF 学校

(今日はいい天気だ。明さんはクラスメートに車を借りて行かれたので、歩いて学校に行った。)

(44)では、“让”受身構文も“被”受身構文も適格である。(45)では、N<sub>1</sub>“小明(明さん)”は受動的に「車を借りて行かれた」、その結果「遅刻した」という被害を認識している。この場合、“让”受身構文は不適格であるが、“被”受身構文は適格である。(46)では、「いい天気」なので、N<sub>1</sub>“小明(明さん)”は「車を借りて行かれた」が、「歩いて学校に行った」という結果に対する被害の認識はない。この場合、“让”受身構文は適格であるが、“被”受身構文は不適格である。

以上の分析から明らかなように、N<sub>1</sub>の「非被害認識」を表す場合には、“让”受身構文が用いられる。“让”受身構文は、N<sub>1</sub>の被害認識がないということを表す機能的特徴を持っている。

#### 4.5 結び

本章では、中国語の受身文における各構文の使用状況、基本的特性を分析し、具体的な構文である“让”受身構文の意味・機能を明らかにした。その結果は(47)-(50)のようにまとめられる。

(47) 中国語の受身文における各構文の使用状況:

中国語には、“被”受身構文、“让”受身構文、“叫”受身構文、無標受身構文などの受身文が存在する。これらの具体的な受身文の中に、どのような場合においても適格となる構文は存在しない。“被”受身構文のみ適格である場合があり、また、無標受身構文のみ適格である場合がある。(4.2 節参照)

(48) 中国語の受身文の基本的特性:

(i) 中国語の受身文の視点は  $N_1$  (動作対象) / (受影主) に置かれる。無標受身構文の焦点は  $N_2$  (動作主) であるが、有標受身構文の焦点は VP の表す動作・行為/影響・変化である。(4.3 節参照)

(ii) 中国語の受身文は、一般に、V の表す動作・行為によって  $N_1$  への影響が捉えられない場合には不適格となる。しかし、V の表す動作・行為によって  $N_1$  が特徴付けられる場合か、V の表す動作・行為によって  $N_1$  に  $N_2$  が関与することになる場合には、文は適格となる。

(4.3 節参照)

(49) “让” 受身構文に課される意味的・機能的制約:

(i) “让” 受身構文は、 $N_2$  が非意図的な動作主である場合には不適格となる。(4.4.2.1 節参照)

(ii) “让” 受身構文は、 $N_2$  の  $N_1$  に対する認識を表現する場合には不適格となる。(4.4.2.2 節参照)

(iii) “让” 受身構文は、 $N_2$  が文中に明示されていない場合には不適格となる。(4.4.2.3 節参照)

(iv) “让” 受身構文は、VP の表す動作・行為/影響・変化が  $N_1$  に対して「有益」である場合には不適格となる。(4.4.2.4 節参照)

(v) “让” 受身構文は、話し手が出来事の実現の「可能性」に対する態度を表現する場合には不適格となる。(4.4.2.5 節参照)

(50) “让” 受身構文の意味的・機能的特徴:

(i) “让” 受身構文は、話し手が  $N_1$  に、出来事に対する責任を付与することをしばしば積極的に含意する。(4.4.3.2 節参照)

(ii) “让” 受身構文は、 $N_1$  の被害認識がないということを表す機能的特徴を持っている。(4.4.3.3 節参照)

## 第 5 章 中国語の使役文

### 5.1 はじめに

伝統的な立場からの使役文の研究においては、“使役句（使役文）”という用語を用いる代わりに、“兼语句（兼語文）”と呼ばれることが多い。しかし、“这个大学有很多学生学汉语（この大学には中国語を勉強する学生が多くいる）”のような兼語文は実際には使役態を表さないため、「兼語文」を「使役文」と同じ文法概念と見なすことはできないと王垂新（2011）は指摘している。近年の言語学の発展に伴い、木村英樹（2000；2012）、张豫峰（2006；2007）、张黎（2012）、楊凱榮（2018）などの研究者は中国語にもヴォイスという文法概念を認め、「使役文」に注目する研究も多く見られる（叶向阳 2004；邵敬敏・赵春利 2005；今村圭 2011；木村英樹 2012；三宅登之 2012）。

中国語では、“让”使役構文、“叫”使役構文、“使”使役構文、“把”使役構文などが存在する。しかし、“把”構文について、それは使役文であるのか能動文であるのかについて、その判断の基準が、今までの研究の中では未だに統一されていない。本論文におけるヴォイスの体系の観点に立てば、“把”構文は使役態を表す“把”構文と能動態を表す“把”構文に分けられる。そのため、使役文としての“把”構文を“把”使役構文と呼ぶことにする。“把”使役構文は有標使役構文の 1 種である。本論文は“让”、“叫”、“使”、“把”などのヴォイス標識を用いない使役文を無標使役構文と呼ぶ。

“让”使役構文、“叫”使役構文、“使”使役構文、“把”使役構文については、多くの研究成果が出されている（吕叔湘 1980；岩田憲幸 1983；陳月吾 1992；加納光・平井勝利 1994；木村英樹 2000；叶向阳 2004；邵敬敏・赵春利 2005；今村圭 2011；三宅登之 2012）。しかし、これらの研究は様々な角度から各使役構文を分析してはいるものの、“让”使役構文、“使”使役構文、“叫”使役構文、“把”使役構文の相違点が統一的観点から明らかにされているとは言えない。つまり、使役文に関する研究はいまだ不十分であると考えられる。

本章では、まず、中国語の使役文における各構文の使用状況を概観する。また、中国語の使役文の基本的特性を分析する。最後に、“让”使役構文、“使”使役構文、“叫”使役構文、“把”使役構文を互いに比較対照しながら、それぞれの意味的・機能的特徴を明らかにする。

## 5.2 中国語の使役文における各構文の使用状況

現代中国語には、“让”使役構文、“叫”使役構文、“使”使役構文、“把”使役構文、無標使役構文などの使役文が存在する。以下の例を通して、これらの構文の使用状況を観察する。

(1) a. 父亲 最终 让 他 买了 车。

父親 ついに rang 彼 買う-PRF 車

(父親はついに彼が車を買うことを許した。)

b. 妈妈 叫 小红 去 买 菜。

母親 jiao 紅ちゃん 行く 買う 食材

(母親は紅ちゃんを食材買いに行かせた。)

c. 大学城的发展 使 小镇经济 也 繁荣起来。

大学エリアの発展 shi 小さな町の経済 も 繁栄する-始める

(大学エリアが発展して、小さな町の経済も繁栄し始めた。)

d. 两杯酒 就 把 老张 喝醉了。

二杯の酒 だけで ba 張さん 飲む-酔う-PRF

(二杯の酒を飲んだだけで、張さんは酔ってしまった。)

(2) 两杯酒 就 喝醉了 老张。

二杯の酒 だけで 飲む-酔う-PRF 張さん

(二杯の酒を飲んだだけで、張さんは酔ってしまった。)

(1a)は“让”使役構文、(1b)は“叫”使役構文、(1c)は“使”使役構文、(1d)は“把”使役構文、(2)は無標使役構文である。

(3) a. 父亲 最终 让 他 买了 车。

父親 ついに rang 彼 買う-PRF 車

b.\*父亲 最终 叫 他 买了 车。

父親 ついに jiao 彼 買う-PRF 車

c.\*父亲 最终 使 他 买了 车。

父親 ついに shi 彼 買う-PRF 車

d.\*父亲 最终 把 他 买了 车。

父親 ついに ba 彼 買う-PRF 車

e.\*父亲 最终 买了 车 他。

父親 ついに 買う-PRF 車 彼

(父親はついに彼が車を買うことを許した。)

(3)が示すように、出来事「父親はついに彼が車を買うことを許した」を中国語の使役文で表す際、“让”使役構文(3a)は適格であるが、“叫”使役構文(3b)、“使”使役構文(3c)、“把”使役構文(3d)、無標使役構文(3e)は不適格である。

(4) a. 妈妈 让 小红 去 买 菜。

母親 rang 紅ちゃん 行く 買う 食材

b. 妈妈 叫 小红 去 买 菜。

母親 jiao 紅ちゃん 行く 買う 食材

c.\*妈妈 使 小红 去 买 菜。

母親 shi 紅ちゃん 行く 買う 食材

d.\*妈妈 把 小红 去 买 菜。

母親 ba 紅ちゃん 行く 買う 食材

e.\*妈妈 去 买 菜 小红。

母親 行く 買う 食材 紅ちゃん

(母親は紅ちゃんを食材買いに行かせた。)

(4)が示すように、出来事「母親は紅ちゃんを食材買いに行かせた」を中国語の使役文で表す際、“让”使役構文(4a)、“叫”使役構文(4b)は適格であるが、“使”使役構文(4c)、“把”使役構文(4d)、無標使役構文(4e)は不適格である。

- (5) a.\*大学城的发展 让 小镇经济 也 繁荣起来。  
 大学エリアの発展 rang 小さな町の経済 も 繁荣する-始める
- b.\*大学城的发展 叫 小镇经济 也 繁荣起来。  
 大学エリアの発展 jiao 小さな町の経済 も 繁荣する-始める
- c. 大学城的发展 使 小镇经济 也 繁荣起来。  
 大学エリアの発展 shi 小さな町の経済 も 繁荣する-始める
- d.\*大学城的发展 把 小镇经济 也 繁荣起来。  
 大学エリアの発展 ba 小さな町の経済 も 繁荣する-始める
- e.\*大学城的发展 也 繁荣起来 小镇经济。  
 大学エリアの発展 も 繁荣する-始める 小さな町の経済  
 (大学エリアが発展して、小さな町の経済も繁荣し始めた。)

(5)が示すように、出来事「大学エリアが発展して、小さな町の経済も繁荣し始めた」を中国語の使役文で表す際、“使”使役構文(5c)は適格であるが、“让”使役構文(5a)、“叫”使役構文(5b)、“把”使役構文(5d)、無標使役構文(5e)は不適格である。

- (6) a.\*两杯酒 就 让 老张 喝醉了。  
 二杯の酒 だけで rang 張さん 飲む-酔う-PRF
- b.\*两杯酒 就 叫 老张 喝醉了。  
 二杯の酒 だけで jiao 張さん 飲む-酔う-PRF
- c.\*两杯酒 就 使 老张 喝醉了。  
 二杯の酒 だけで shi 張さん 飲む-酔う-PRF
- d. 两杯酒 就 把 老张 喝醉了。  
 二杯の酒 だけで ba 張さん 飲む-酔う-PRF

e. 两杯酒 就 喝醉了 老张。

二杯の酒 だけで 飲む-酔う-PRF 張さん

(二杯の酒を飲んだだけで、張さんは酔ってしまった。)

(6)が示すように、出来事「二杯の酒を飲んだだけで、張さんは酔ってしまった」を中国語の使役文で表す際、“把”使役構文(6d)、無標使役構文(6e)は適格であるが、“让”使役構文(6a)、“叫”使役構文(6b)、“使”使役構文(6c)は不適格である。

(3)-(6)をまとめて観察すると、それぞれの出来事を表す際に、“让”使役構文、“叫”使役構文、“使”使役構文、“把”使役構文、無標使役構文の適格性は異なる。どのような場合においても適格となる構文は存在しない。

“让”使役構文のみ適格である場合があり、また、“使”使役構文のみ適格である場合がある。

### 5.3 中国語の使役文の基本的特性

本節では、まず中国語の使役文の情報構造を明らかにする。また同じくヴォイス構文の下位分類である能動文、受身文との比較対照の観点から、中国語の使役文は、使役構文ごとの使役主の意図性の違いを含意するという特性を分析する。

#### 5.3.1 使役文の情報構造

本論文の2.5.4節では、使役文の構造を明らかにした。使役文は無標使役構文と有標使役構文に分けられる。使役標識 *cm* (causative voice marker) の有無によって、VP (述語動詞句) と  $N_2$  の位置関係も変わる。使役文の構造、第2章の(47)の使役文の定義及び3.3.1節で論述した視点、焦点の判断基準に基づけば、中国語の使役文の情報構造は表5-1のようにまとめられる。



表 5-1 使役文の情報構造

	視点			焦点
無標使役構文	N <sub>1</sub>	VP		N <sub>2</sub>
	〈使役主〉 / 〈使役主〉兼 〈動作対象〉	動作・行為 / 影響・変化		〈動作主〉
有標使役構文	N <sub>1</sub>	am	N <sub>2</sub>	VP
	〈使役主〉 / 〈使役主〉兼 〈動作対象〉	使役標識	〈動作主〉	動作・行為 / 影響・変化

表 5-1 が示すように、一般に、無標使役構文の視点も有標使役構文の視点も N<sub>1</sub> 〈使役主〉 / 〈使役主〉兼 〈動作対象〉に置かれる。無標使役構文の焦点は N<sub>2</sub> 〈動作主〉であるが、有標使役構文の焦点は VP の表す動作・行為 / 影響・変化である。

### 5.3.2 使役主の意図性の暗示

本論文の第 2 章ではヴォイス構文の体系に基づいて、使役文、能動文、受身文の構造や定義を明らかにした。使役文、能動文、受身文は構造が共通している部分があるが、使役文が表す出来事の内容は、能動文、受身文が表す出来事の内容を含む例がある。

(7) 父亲 最终 让 他 买了 车。

父親 ついに rang 彼 買う-PRF 車

(父親はついに彼が車を買うことを許した。)

(8) a. 他 买了 车。

彼 買う-PRF 車

(彼は車を買った。)

b. 车 被 他 买了。

車 bei 彼 買う-PRF

(車は彼に買われた。)

(7)-(8)が示すように、使役文(7)は能動文(8a)及び受身文(8b)の表す出来事「彼は車を買った/車は彼に買われた」をその中に含んでいる。使役文(7)の表す事態における参加者は、使役主である“父亲(父親)”、動作主である“他(彼)”、動作対象である“车(彼)”の3つである。能動文(8a)と受身文(8b)の表す事態における参加者は、動作主である“他(彼)”と動作対象である“车(彼)”の2つである。従って、使役文には使役主という特有の参加者が存在するが、能動文や受動文には使役主は存在しない。

西村義樹(1998)は「行為と使役」を論じる際、ある行為の動機や意図はその行為の原因の一種であると指摘する。言い換えれば、動作・行為の遂行は、その動作・行為に影響を与える参加者の意図性と関連している。使役文において、動作・行為に影響を与える参加者は動作主と動作対象以外に使役主もある。また、使役主の意図性に注目し、中国語の“让”使役構文、“叫”使役構文、“使”使役構文、“把”使役構文の使い分けを分析する研究もある(加納光・平井勝利 1994; 木村英樹 2012)。

- (9) a. 小明 {让 / 叫 / 使 / 把} 妈妈 担心坏了。  
 明さん rang jiao shi ba 母親 心配する-壊れる-PRF  
 (明さんは母親をひどく心配させた。)
- b. 小明无意识的动作 {?让 / ?叫 / 使 / \*把} 妈妈  
 明さんの何気ない行動 rang jiao shi ba 母親  
 担心坏了。  
 心配する-壊れる-PRF  
 (明さんの何気ない行動が母親をひどく心配させた。)
- c. 小明故意离家出走 {让 / 叫 / \*使 / 把} 妈妈  
 明さんは故意に家出したこと rang jiao shi ba 母親  
 担心坏了。  
 心配する-壊れる-PRF  
 (明さんは故意に家出したことは母親をひどく心配させた。)

(9a)が示すように、使役主“小明(明さん)”の「ひどく心配する」ということに対する意図性が明示されていない場合、“让”使役構文、“叫”使役構文、“使”使役構文、“把”使役構文は全て適格である。(9b)が示すように、使役主“小明无意的动作(明さんの何気ない行動)”、動作主“妈妈(母親)”は「ひどく心配する」ということに対して意図性を持っていないと明示する場合、“让”使役構文、“叫”使役構文、“把”使役構文は不適格(不自然)となるが、“使”使役構文のみ適格である。(9c)が示すように、使役主“小明故意离家出走(明さんは故意に家出したこと)”は「ひどく心配する」ということに対する意図性が明示されている場合、“让”使役構文、“叫”使役構文、“把”使役構文は適格であるが、“使”使役構文のみ不適格となる。従って、中国語の使役文は、使役主の意図性の有無によって話し手が異なる構文を使い分ける。一般的に、“使”使役構文は、その使役主は非意図的な参与者であると話し手が認識していることを含意する。“让”使役構文、“叫”使役構文、“把”使役構文は、その使役主は意図的な参与者であると話し手が認識していることを含意する。

以上の分析に基づいて、中国語の使役文は、具体的な使役構文ごとの使役主の意図性の有無に対する話し手の認識を含意するという特性があると言える。

#### 5.4 “让/叫/使/把”使役構文の意味的・機能的分析

本節では、中国語の“让”使役構文、“叫”使役構文、“使”使役構文、“把”使役構文に関する先行研究を踏まえて、意味構造に基づいて使役文の分類を試みる。また、分類した各使役構造と“让”使役構文、“叫”使役構文、“使”使役構文、“把”使役構文の対応関係<sup>38</sup>を考察し、それぞれの意味的・機能的特徴を統一的な基準で説明する。

---

<sup>38</sup> 本論文では、“让”使役構文、“叫”使役構文、“使”使役構文、“把”使役構文と各使役構造との対応関係を考察する際、「\*」はその使役構文が不適格であることを示し、「?」はその使役構文の容認度が低いことを示す。「\*」や「?」が付いている使役構文、すなわち、不適格や容認度が低い使役構文は当該の使役文と対応できないと見なしている。

#### 5.4.1 先行研究

使役を表す“让”、“叫”、“使”、“把”について、呂叔湘（1980）は次のように説明している。“让”は“致使（致使）”、“容许（許容）”、“听任（一任）”を表し、その後に必ず兼語が付く。“让”はしばしば“愿望（願望）”を表現する際に用いられる。“叫”は「致使」を表し、その後に必ず兼語が付く。“使”は「致使」を表し、その後に必ず兼語が付く。“把”は「致使」を表し、一般的に動結構造の述語動詞が付く（筆者訳）。しかしながら、「致使」、「許容」、「放任」、「願望」が具体的にどのようなものを指すのか、“让”、“叫”、“使”、“把”を用いて使役を表す際にどのような意味的・機能的特徴があるのかについて、呂叔湘（1980）は詳しくは説明していない。

加納光・平井勝利（1994）は談話分析の観点から、現代中国語の所謂使役構文「Xが Yに/を Vさせる」として取り扱われてきた狭義の使役表現に用いる“使”、“让”“叫”を考察し、次のように指摘する。

(10) 「使」の用いられる使役表現は、Xが、Yのコントロール不可能な事態、状況の変化を半ば自然発生的に出現させるものとして話し手が認識し、判断したときに選択され使用される表現形式であるということが出来る。

「让」の用いられる使役表現は、客観的行為活動としては、「Xが Yに～させる」という使役関係を表わしてはいるが、Xから Yへの使役的働きかけは、Yの自発的な行為を現実のものにさせるためのものであり、Xの側から一方的、強制的に動作行為をさせる/しむけるというものではない。Yの側に事前に存在している事態や動作・行為を起こそうという意志や状態に対し、Xがある働きかけをすることにより、Yの行為を實現に導くという構造を持った表現であるということが出来る。

「叫」を用いた使役表現は、Xの意図する使役行為が Xの意図をストレートに反映させた形で Yの動作・行為を引き起こさせ実行させるもの、

として話し手が判断するときに選択使用される表現形式であると言うことができる。

(加納光・平井勝利 1994:99,104,109)

(10)のように、加納光・平井勝利(1994)は“让”使役構文、“叫”使役構文、“使”使役構文が選択される基準を示している。しかしながら、各使役構文の選択の基準が「事態のコントロール可能不可能」、「自然発生」、「自発的な行為」、「意図する使役行為」といった具合に統一的視点に基づいていないため、“让”使役構文、“叫”使役構文、“使”使役構文の意味上・機能上の示差的特徴は捉えられていない。

木村英樹(2012)は中国語のヴォイス構文に関して、先ず(I)指示使役文、(II)許容使役文、(III)誘発使役文、(IV)受影文の4つのタイプの構文を取りあげ、「X c Y V」で表示し、それぞれの構造と意味を関連付けて説明した。指示使役文とは、主語に立つ人物Xが人物Yに、動作・行為Vを遂行させようとしむける事態を述べる構文であり、許容使役文とは、人物Yが動作・行為Vを遂行することを人物Xが許容する、ないしは放任するという事態を述べる構文である。指示使役文と許容使役文の被使役者Yの行為は、通常、目的性の行為として構文化され、Yの動作・行為は[+意志性]である。誘発使役文は、Yに何らかの状態または変化が生じる状況をXが誘発するという事態を述べる構文である。誘発使役文の主語Xは原因としての使役者、すなわち、非意図的な誘発者であり、述語が表す状態や変化は〈目的〉ではなく、[-意志性]の状態や変化を意味すると指摘している。木村英樹(2012)はさらに「スル」と「ナル」というパラメータを抽出し、動作・行為の〈スル〉を意味する述語形式をA、状態・変化の〈ナル〉を意味する述語形式をSで表記して、各構文の対立と相関の関係を分析し、「処置文」を(V)「執行使役文」と改めて、使役文の一種であることを明確にした。木村英樹(2012)に基づけば、中国語のヴォイス構文の種類は(11)のようにまとめられる。

(11) (= 第 2 章の(1))

(I) 指示使役文  $\textcircled{X}$  叫  $\textcircled{Y}$  A

(II) 許容使役文 X 让  $\textcircled{Y}$  A

(III) 誘発使役文 X 使  $\nabla Y$  S

(IV) 受影文  $\nabla X$  被  $\textcircled{Y}$  AS

(V) 執行使役文  $\textcircled{X}$  把  $\nabla Y$  AS

(A: 〈スル〉 S: 〈ナル〉 AS: 〈スル-ナル〉)

(木村英樹 2012:198,203)

○印は、当該の人またはモノが何らかの動作・行為を「〈スル〉主体」であることを示す。ただし、Xの働きかけが具体的な動作として示されないことが指示使役文の特徴であるという点を考慮し、Yの動作の具体性と区別する意味で、Xについて点線の○印で表示し、▽印は、当該の人またモノが何らかの状態・変化に「〈ナル〉主体」であることを示すと木村英樹(2012)は指摘している。木村英樹(2012)の指摘から明らかなように、“叫”、“让”、“使”、“把”はそれぞれ指示使役文、許容使役文、誘発使役文、執行使役文の代表的な使役標識である。本論文は使役文を分類する際、方法や分類の基準について、主に木村英樹(2012)の研究を参考とする。しかしながら、さらに多くの例を観察すると、木村英樹(2012)の指示使役文、許容使役文、誘発使役文、執行使役文と“叫”、“让”、“使”、“把”は必ずしも「一対一」の対応関係ではない。また、“警察让犯人跑了(警察は犯人を逃がしてしまった)”、“这本书使我重新审视了自己的研究方法(この本は、私に自分の研究方法について改めて考えさせた)”のような例は木村英樹(2012)が分類した各使役文に含まれていないという問題点がある。

高見健一(2011)は日本語の使役文について、使役主と被使役主がともに人間の場合、使役主の地位、使役主と被使役主の関係や事象との関わり方によって、使役を「強制」使役、「説得」使役、「指示」使役、「許容・放任」使役に分けている。使役主が無生物の場合、それが原因となって当該事象が生じることを表す使役を「原因」使役と呼び、当該事象の発生を食い止められなかった責任を主語が感じているという点を表す使役を「責任」使役と呼

ぶ。「強制/説得/指示/許容・放任」使役の使役主は、当該の事象を意図的に生じさせている。しかし、「原因/責任」使役の使役主は、当該の事象を意図的には生じさせていないと指摘している。つまり高見健一（2011）は日本語の使役文を使役主の意図性の有無によって「強制/説得/指示/許容・放任/原因/責任」使役に分ける。使役文を分類する際、使役事態の参与者の意図性を考察している点において、高見健一（2011）は木村英樹（2012）と同じである。

#### 5.4.2 意味構造に基づく使役文の分類

本節では、第一に、“让”使役構文、“叫”使役構文、“使”使役構文、“把”使役構文という有標使役構文の表示方法を示す。第二に、使役文を分類する基準を検討する。第三に、意味構造に基づいて中国語の使役文を分類する。

##### 5.4.2.1 使役文の構造の表示方法

本論文の第2章2.3節で示したように、各構文要素の文法的な役割と語順によって、“让”使役構文、“叫”使役構文、“使”使役構文、“把”使役構文を(12)のように表示することができる。

(12) N<sub>1</sub> cm N<sub>2</sub> VP

(12)では、N<sub>1</sub>は文中の一番目に位置する名詞句を表し、N<sub>2</sub>は文中の二番目に位置する名詞句を表し、VPは述語動詞句を表し、cm(causative voice marker)は使役標識を表す。

##### 5.4.2.2 〈+意図〉と〈-意図〉

5.4.1節で論じたように、加納光・平井勝利（1994）、高見健一（2011）、木村英樹（2012）の使役文に関する研究は、事態における参与者の意図性に注目しているのが共通点である。この「参与者の意図性」は使役という事態において、重要な情報である。しかし、加納光・平井勝利（1994）は中国語

の使役文の各構文を論じる際、“叫”を用いた使役表現の X (N<sub>1</sub> の表す参与者) の意図性のみを考察し、“使/让”を用いた使役文の N<sub>1</sub> が表す参与者の意図性や N<sub>2</sub> が表す参与者の意図性については言及していない。木村英樹 (2012) は誘発使役文の使役者 (N<sub>1</sub> の表す参与者) は明らかに非意図的な誘発者、指示使役文の使役者は積極的な使役者であると指摘したが、許容使役文の使役者の意図性については明確な指摘をしていない。そして、木村英樹 (2012) の指示使役文、許容使役文の被使役者 (N<sub>2</sub> の表す参与者) の行為は、通常、目的性の行為であるという主張によれば、指示使役文、許容使役文の N<sub>2</sub> の表す参与者は意図的な行為者と考えられるが、この点についても木村英樹 (2012) は明確には指摘していない。本論文では、N<sub>2</sub> の表す参与者の意図性も分析の射程に入れ、N<sub>1</sub> と N<sub>2</sub> の表す参与者の意図性の有無を次の (13) のように定義し、それを基準として使役文を分析する。

(13) 参与者の意図性の有無:

本論文では、客観的な事実に限らず、使役事態の参与者が動作・行為の遂行、あるいは影響・変化の発生に対して意識的な態度や目的性を有していると話し手が主観的に認識している場合、その参与者を有意図的な参与者と見なし、〈+意図〉で表示する。また、使役事態の参与者が動作・行為の遂行、あるいは影響・変化の発生に対して無意識・無目的であると話し手が主観的に認識している場合、その参与者を非意図的な参与者と見なし、〈-意図〉で表示する。

実際には、「参与者の意図性の有無」は話し手の主観的認識であるため、例文のみから判断するのは難しいと思われる。参与者の態度が〈+意図〉であるか〈-意図〉であるかは、“故意(わざと)”、“无意间(無意識に)”、“不小心(不注意)”、“不留神(うっかり)”、“为了(～のために)”などの副詞や接続詞で明示的に捉えられるが、多くの場合、会話や会話場面などの長い文脈要素を加えないと、論証できない。本論文であげる例文は先に参与者の意図性の有無を仮定している文である。そして、ある程度参与者の意図性を表す副詞や接続詞、短い文脈要素を加えたうえで、文を分析する。



#### 5.4.2.3 〈スル〉と〈ナル〉

木村英樹（2012）は述語（VP）の意味する状況を、[+意志性]の動作を意味する表現〈スル〉、[-意志性]の状態や変化を意味する表現〈ナル〉、動作・行為を表すVと結果を表すRの結合からなるVR構造に対応する表現〈スル-ナル〉に分類し、それを基準としてヴォイス構文を分析した。ここには、〈スル〉的表現の動詞として“看病（診察する）”、“念（朗読する）”、〈ナル〉的表現の動詞として“興奮（興奮する）”、“老（老ける）”、〈スル-ナル〉的表現の動詞として“拽倒（引く-倒れる）”、“烧掉（燃やす-落ちる）”などがあげられている。そして、加納光・平井勝利（1994）によれば、各使役標識の選択はその述語動詞が表す動作・行為がコントロールできるかどうかにも関わっている。長屋尚典（2015）によれば、自動詞は、さらに、非能格動詞と非対格動詞に二分される。前者には意図的ないし意志的な行為を表す動詞が多く、後者には状態動詞、非意図的動詞などが多い。従って、意図性の有無から動詞を分類することができる。本論文では、VPの表す動作・行為/影響・変化の性質を次の(14)のように分類し、それを基準として使役文を分析する。

#### (14) VPの表す動作・行為/影響・変化の性質:

本論文では、VPの表す動作・行為/影響・変化の性質を〈スル〉、〈ナル〉、〈スル-ナル〉に分類する。動作主がコントロールできる動作・行為/影響・変化を意図的な動作・行為/影響・変化と見なして〈スル〉で表示し、動作主がコントロールできない動作・行為/影響・変化を非意図的な動作・行為/影響・変化と見なして〈ナル〉で表示する。〈スル〉動詞と〈ナル〉動詞の組み合わせの場合、そのVPの表す動作・行為/影響・変化の性質を〈スル-ナル〉で表示する。

〈スル〉、〈ナル〉は、一般的に、動詞の他・自という統語的特性を表し、項構造と関わる動詞の分類を指す。しかし、本論文における〈スル〉、〈ナル〉はこのような動詞の他・自に対応したものではなく、動詞の表す動作・

行為/影響・変化のコントロール可・コントロール不可に対応している。中国語では、“开（開ける/開く）”、“气（怒らせる/怒る）”、“笑（あざ笑う/笑う）”などの動詞は文脈により、〈スル〉としても解釈でき、〈ナル〉としても解釈できることもある。また、もともと形容詞である“红（赤い）”、“干净（きれい）”などは“红（赤くなる）”、“干净（きれいになる）”のように〈ナル〉として解釈することもある。“打哭（殴る-泣く）”、“喝醉（飲む-酔う）”のような“动结式（VR構造）”の動詞は、一般的に、〈スル-ナル〉として解釈する。本論文では、可能な限り VP の表す動作・行為/影響・変化の性質の解釈が曖昧でない例をあげて使役文を分析する。

#### 5.4.2.4 使役文の意味構造の分類表

本論文では、文の構造、N<sub>1</sub>とN<sub>2</sub>の表す参加者の意図性の有無、VPの表す動作・行為/影響・変化の性質によって、中国語の使役文の意味構造を表5-2のように分類する。

表 5-2 使役文の意味構造の分類表

使役構造	N <sub>1</sub>	cm	N <sub>2</sub>	VP
I	+意図		+意図	スル
II	+意図		-意図	スル
III	-意図		+意図	スル
IV	-意図		-意図	スル
V	+意図		+意図	ナル
VI	+意図		-意図	ナル
VII	-意図		+意図	ナル
VIII	-意図		-意図	ナル
IX	+意図		+意図	スル-ナル
X	+意図		-意図	スル-ナル
XI	-意図		+意図	スル-ナル
XII	-意図		-意図	スル-ナル

N<sub>2</sub>の表す参与者、すなわち、被使役主兼 VP の動作主は意図性を持って、コントロールできない非意図的な動作・行為/影響・変化をするということは論理的にあり得ない。そのため、[N<sub>2</sub>+意図 VP ナル]と[N<sub>2</sub>+意図 VP スル-ナル]という使役構造 (=網掛け表示部)、すなわち、使役構造 V、使役構造 VII、使役構造 IX、使役構造 XI の例は実際には存在しない。従って、本論文は、中国語の使役文を分類した結果、使役構造 I、使役構造 II、使役構造 III、使役構造 IV、使役構造 VI、使役構造 VIII、使役構造 X、使役構造 XII という 8 つの使役構造を取りあげる<sup>39</sup>。

#### 5.4.3 “让/叫/使/把”使役構文と各使役構造の対応関係

本節では、さらに多くの例をあげ、“让”使役構文、“叫”使役構文、“使”使役構文、“把”使役構文と前節で分類した意味構造が異なる使役構造の対応関係を考察する。

##### 5.4.3.1 使役構造 I：許容使役

本論文では、〈スル〉の VP に対して N<sub>1</sub> と N<sub>2</sub> が共に意図性を持っていると話し手が認識している際に用いる [N<sub>1</sub>+意図 N<sub>2</sub>+意図 VP スル] という使役構造を許容使役と呼ぶ。許容使役は、一般的に N<sub>1</sub> は N<sub>2</sub> が VP を遂行することを許容するという事態を表す。

- (15) a. 老师 {让 /\*叫 /\*使 /\*把} 迟到的学生 进了 教室。  
 先生 rang jiao shi ba 遅刻した学生 入る-PRF 教室  
 (先生は遅刻した学生を教室に入らせた。)

---

<sup>39</sup> 吕叔湘 (1980) は “让我们永远在一起! (いつまでも一緒にいられるように)” のような N<sub>1</sub> が明示されていない「願望」を表す文を「使役文」としてあげている。しかしながら、本論文では、“让我们永远在一起! (いつまでも一緒にいられるように)” のような文について「使役文」として扱わない。

b. 老师 允许 迟到的学生 进了 教室。

先生 許容する 遅刻した学生 入る-PRF 教室

(先生は遅刻した学生が教室に入ることを認めた。)

(16) a. 这个学校 {让 /\*叫 /\*使/\*把} 学生 穿 便服 上学。

この学校 rang jiao shi ba 学生 着る 私服 登校する

(この学校は学生が私服で登校することを認める。)

b. 这个学校 许可 学生 穿 便服 上学。

この学校 許可する 学生 着る 私服 登校する

(この学校は学生が私服で登校することを許可する。)

(15)-(16)の N<sub>1</sub> “老师 (先生)”、“这个学校 (この学校)”は、具体的な指示や動作が明示されてはいないが、“进教室 (教室に入る)”、“穿便服上学 (私服で登校する)”という動作・行為の遂行に対して目的性を持っているため、〈+意図〉の態度と捉えられる。(15)-(16)の N<sub>2</sub> “迟到的学生 (遅刻した学生)”、“学生 (学生)”は“进教室 (教室に入る)”、“穿便服上学 (私服で登校する)”という動作・行為の遂行に対して意識的な態度を持っているため、〈+意図〉と捉えられる。(15b)-(16b)が示すように、使役標識を「許容」の意味を有する動詞 (=波線部) “允许 (許容する)”、“许可 (許可する)”に置き換えても、文の意味はほとんど変わらない。(15)-(16)が示すように、“让”使役構文は許容使役と対応でき、“叫”使役構文、“使”使役構文、“把”使役構文は許容使役と対応できない。

#### 5.4.3.2 使役構造Ⅱ：要求使役

本論文では、〈スル〉の VP に対して N<sub>1</sub> は意図性を持ち、N<sub>2</sub> は意図性を持たないと話し手が認識している際に用いる [N<sub>1</sub>+意図 N<sub>2</sub>-意図 VP スル] という使役構造を要求使役と呼ぶ。要求使役は、一般的に N<sub>1</sub> が「要求、命令」などの方法で自分の目的を N<sub>2</sub> へ伝達し、N<sub>2</sub> に VP を遂行させようとする事態を表す。

- (17) a. 老师 {让 / 叫 / \*使/\*把} 学生 来 办公室 领书。  
 先生 rang jiao shi ba 学生 来る 事務室 本を受け取る  
 (先生は学生に事務室に来て、本を受け取るようにさせた。)
- b. 老师 要求 学生 来 办公室 领书。  
 先生 要求する 学生 来る 事務室 本を受け取る  
 (先生は学生に事務室に来て本を受け取るようにと言った。)
- (18) a. 妈妈 {让 / 叫 / \*使/\*把} 小红 去 买菜。  
 母親 rang jiao shi ba 紅ちゃん 行く 食材を買う  
 (母親は紅ちゃんを食材買いに行かせた。)
- b. 妈妈 命令 小红 去 买菜。  
 母親 命令する 紅ちゃん 行く 食材を買う  
 (母親は紅ちゃんを食材買いに行くように命令した。)

(17)-(18)の N<sub>1</sub> “老师 (先生)”、“妈妈 (母親)”は、具体的な動作は明示されていないが、“领书 (本を受け取る)”、“买菜 (食材を買う)”という動作・行為の遂行に対して目的性を持っているため、〈+意図〉の態度と捉えられる。(17)-(18)の N<sub>2</sub> “学生 (学生)”、“小红 (紅ちゃん)”は“领书 (本を受け取る)”、“买菜 (食材を買う)”という動作・行為の遂行に対して目的性を持っていない〈-意図〉の態度と捉えられる。(17b)-(18b)が示すように、使役標識を「要求」の意味を有する動詞 (=波線部) “要求 (要求する)”、“命令 (命令する)”に置き換えても、文の意味はほとんど変わらない。(17)-(18)が示すように、“让”使役構文、“叫”使役構文は要求使役と対応でき、“使”使役構文、“把”使役構文は要求使役と対応できない。

#### 5.4.3.3 使役構造Ⅲ：無作為使役

本論文では、〈スル〉の VP に対して N<sub>1</sub> は意図性を持たず、N<sub>2</sub> は意図性を持つと話し手が認識している際に用いる [N<sub>1</sub>-意図 N<sub>2</sub>+意図 VP スル] という使役構造を無作為使役と呼ぶ。無作為使役は、一般的に N<sub>1</sub> が本来何らかの働きかけで N<sub>2</sub> の動作・行為を阻止すべきところ、十分に有効な働きか

けをしなかったため、N<sub>2</sub>の意図的なVPの遂行を阻止できなかったという事態を表す。

(19) 警察 (不留神) {让/?叫/\*使/\*把} 犯人 跑了。

警察 うっかり rang jiao shi ba 犯人 逃げる-PRF

(警察は(うっかりして)犯人を逃がしてしまった。/警察は犯人に逃げられた。)

(20) 我军 {让/?叫/\*使/\*把} 敌军 突破了 防线。

わが軍 rang jiao shi ba 敵 突破する-PRF 防衛線

(わが軍は敵に防衛線を突破させてしまった。/わが軍は敵に防衛線を突破された。)

(19)-(20)のN<sub>1</sub>“警察(警察)”、“我军(わが軍)”は“跑(逃げる)”、“突破防线(防衛線を突破する)”という動作・行為の遂行に対して〈一意図〉の態度を持っていると捉えられる。(19)-(20)のN<sub>2</sub>“犯人(犯人)”、“敌军(敵)”は“跑(逃げる)”、“突破防线(防衛線を突破する)”という動作・行為の遂行という目的があり、〈+意図〉の態度と捉えられる。(19)-(20)が示すように、“让”使役構文は無作為使役と対応でき、“叫”使役構文、“使”使役構文、“把”使役構文は無作為使役と対応できない。

ここで注意すべきことは、(19)-(20)は受身文であるのか使役文であるのか曖昧性が生じる場合があるということである。その理由について、江藍生(2000)は、受身文と使役文の曖昧性はそれらに共有の形式、“让/叫”構文が存在することが原因であると指摘する。しかし、現実には言語を使う時、“让/叫”構文が受身文であるのか使役文であるのかについては、一般に文脈によって判断できる。また、文脈の中に示されなくても意思の伝達に影響がないため、判断の必要がないこともある。

#### 5.4.3.4 使役構造Ⅳ：誘動使役

本論文では、〈スル〉のVPに対してN<sub>1</sub>とN<sub>2</sub>が共に意図性を持たないと話し手が認識している際に用いる[N<sub>1</sub>-意図 N<sub>2</sub>-意図 VPスル]という使役

構造を誘動使役と呼ぶ。誘動使役は、一般的に  $N_1$  は意図性のないものや事柄であるが、それが原因になって、 $N_2$  の VP の遂行を誘発するという事態を表す。

(21) 这本书 {让 /\*叫 / 使 /\*把} 我 重新 审视了 自己的研究方法。

この本 rang jiao shi ba 私 改めて 考える-PRF 自分の研究方法  
(この本は、私に自分の研究方法について改めて考えさせた。)

(22) 小明 昨晚 没 回家 却 忘记 打电话 了,

明ちゃん 昨晚 NEG 家に帰る のに 忘れる 電話を掛ける SFP

{让 /\*叫 / 使 /\*把} 妈妈 出门 找了 好久。

rang jiao shi ba 母親 外出する 探す-PRF 長いこと

(明ちゃんは昨晚家に帰らないのに電話を掛けるのを忘れたため、母親が外で長いこと探した。)

(21)において、 $N_1$  “这本书(この本)”は無意識的なものであるため、〈一意図〉の態度と捉えられる。“重新审视自己的研究方法(自分の研究方法について改めて考える)”は $N_2$  “我(私)”の自発的な行為ではない。 $N_2$  は VP の遂行に対して意識的な態度を持っていないため、〈一意図〉と捉えられる。(22)は、 $N_1$  “昨晚没有回家却忘记打电话了(家に帰らないのに電話を掛けるのを忘れた)”という行為の主体  $N_1$  “小明(明ちゃん)”は“出门找好久(外で長いこと探す)”という動作・行為の遂行に対して意図性を持っていないため、〈一意図〉の態度と捉えられる。“出门找好久(外で長いこと探す)”は $N_2$  “妈妈(母親)”の自発的な行為ではない。 $N_2$  は VP の遂行に対して意識的な態度や目的性を持っていないため、〈一意図〉の態度と捉えられる。(21)-(22)が示すように、“让”使役構文、“使”使役構文は誘動使役と対応でき、“叫”使役構文、“把”使役構文は誘動使役と対応できない。

#### 5.4.3.5 使役構造VI: 主観助力使役

本論文では、〈ナル〉の VP 対して  $N_1$  は意図性を持ち、 $N_2$  は意図性を持たないと話し手が認識している際に用いる[ $N_1$ +意図  $N_2$ -意図 VP ナル]と

いう使役構造を主観助力使役と呼ぶ。主観助力使役は、一般的に  $N_1$  が外部条件に関する原因であり、 $N_1$  という条件において、その中の動作主は意図性を持って VP の表す影響・変化を推進する有効な条件を作り、 $N_2$  が VP の表す影響・変化になることを実現させるという事態を表す。

(23) 老张 努力 工作 {让/\*叫/使/\*把} 孩子 上了 好的学校。  
張さん 懸命 働く rang jiao shi ba 子供 入る-PRF 良い学校  
(張さんは懸命に仕事をしたので、子供が良い学校に入るようになった。)

(24) 老王 到处 找投资 {让/\*叫/使/\*把} 这部电影 最终  
王先生 方々 投資を募る rang jiao shi ba この映画 最終的に  
顺利 上映。  
順調 上映する  
(王さんは方々に投資を募ったので、最終的にこの映画は順調に上映された。)

(23)-(24)の  $N_1$  の中の動作主“老张(張さん)”、“老王(王さん)”は  $N_2$  “孩子(子供)”、“这部电影(この映画)”が VP “上好学校(良い学校に入る)”、“顺利上映(順調に上映する)”ということの実現を目指して、“努力工作(懸命に仕事をする)”、“到处找投资(方々に投資を募る)”という有効な外部条件を作った。そのため、 $N_1$  には〈+意図〉という態度が捉えられる。 $N_2$  “孩子(子供)”、“这部电影(この映画)”は“上好学校(良い学校に入る)”、“顺利上映(順調に上映する)”の実現に対して目的性を持っていることを表していないため、〈-意図〉の態度と捉えられる。(23)-(24)が示すように、“让”使役構文、“使”使役構文は主観助力使役と対応でき、“叫”使役構文、“把”使役構文は主観助力使役と対応できない。

#### 5.4.3.6 使役構造Ⅷ：客観原因使役

本論文では、〈ナル〉の VP に対して  $N_1$  と  $N_2$  が共に意図性を持っていないと話し手が認識している際に用いる [ $N_1$ -意図  $N_2$ -意図 VP ナル] という使役構造を客観原因使役と呼ぶ。客観原因使役は、一般的に  $N_1$  が非意図の



原因として、N<sub>2</sub>にVPの影響・変化が発生することを誘発するという事態を表す。

(25) a. 这件衬衣 {\*让/\*叫 / 使/\*把} 老王 看起来 很 有精神。  
このシャツ rang jiao shi ba 王さん 見た目 とても 元気  
(このシャツは王さんを元気に見えるようにした。)

b. 由于 (穿了) 这件衬衣, 老王 看起来 很 有精神。  
~ので 着る このシャツ 王さん 見た目 とても 元気  
(このシャツ(を着ている)ので、王さんは元気に見える。)

(26) a. 经济 一直 不景气 {\*让/\*叫 / 使/\*把} 越来越多 的  
経済 ずっと 不景气 rang jiao shi ba ますます多くの  
人 失去了 工作。  
人 失う-PRF 仕事  
(経済がずっと不景気で、ますます多くの人が仕事を失った。)

b. 因为 经济 一直 不景气, 越来越多 的人  
~なので 経済 ずっと 不景气 ますます多くの 人  
失去了 工作。  
失う-PRF 仕事  
(経済がずっと不景気なので、ますます多くの人が仕事を失った。)

(25)のN<sub>1</sub>“这件衬衣(このシャツ)”は無意識な物、(26)のN<sub>1</sub>“经济一直不景气(経済がずっと不景気であること)”は客観的に発生したことであるため、(25)-(26)のN<sub>1</sub>は〈一意図〉である。(25)-(26)のN<sub>2</sub>“老王(王さん)”、“越来越多的人(ますます多くの人)”は“看起来很有精神(元気に見える)”、“失去工作(仕事を失う)”という影響・変化の発生に対して意識的な態度や目的性を持っていないため、〈一意図〉である。(25b)-(26b)が示すように、使役標識を、原因を示す接続詞(=波線部)“由于(~ので)”、“因为(~なので)”に置き換えても、文の意味はほとんど変わらない。(25)-(26)が示すように、“使”使役構文は客観原因使役と対応でき、“让”使役構文、“叫”使役構文、“把”使役構文は客観原因使役と対応できない。

#### 5.4.3.7 使役構造Ⅹ：人間対象使役

本論文では、〈スル-ナル〉のVPに対してN<sub>1</sub>は意図性を持ち、N<sub>2</sub>は意図性を持たないと話し手が認識している際に用いる[N<sub>1</sub>+意図 N<sub>2</sub>-意図 VP スル-ナル]という使役構造を人間対象使役と呼ぶ。人間対象使役は、一般的にN<sub>1</sub>はVPの発生に対して「意図がある」、「責任がある」原因であると同時にVPの動作対象であり、N<sub>2</sub>がVPの発生に積極的に関わっていないという事態を表す。

(27) 你故意半年也不回来!

你 真是 {让 / 叫 / \*使 / 把} 人 想死了。

あなた 本当に rang jiao shi ba 私 思う-死ぬ-PRF

(あなたわざと半年も帰って来ないなんて! 私、死ぬほどあなたを思っていたのよ。)

(28) 小明跟妈妈吵架，离家出走了。

他 {让 / 叫 / \*使 / 把} 妈妈 担心坏了。

彼 rang jiao shi ba 母親 心配する-壊れる-PRF

(明さんは母親と喧嘩して、家出した。彼は母親をひどく心配させた。)

(27)-(28)のN<sub>1</sub>“你(あなた)”、“小明(明ちゃん)”はVP“想死(死ぬほど思う)”、“担心坏(ひどく心配する)”ということに対して目的性を持っていると話し手が認識するため、〈+意図〉である。N<sub>2</sub>“人(私)”、“妈妈(母親)”はVP“想死(死ぬほど思う)”、“担心坏(ひどく心配する)”ということに対して意図性を持っていないと話し手が認識しているため、〈-意図〉である。(27)-(28)が示すように、“让”使役構文、“叫”使役構文、“把”使役構文は人間対象使役と対応でき、“使”使役構文は人間対象使役と対応できない。

#### 5.4.3.8 使役構造Ⅻ：物対象使役

本論文では、〈スル-ナル〉の VP に対して N<sub>1</sub> と N<sub>2</sub> が共に意図性を持っていないと話し手が認識している際に用いる [N<sub>1</sub>-意図 N<sub>2</sub>-意図 VP スル-ナル] という使役構造を物対象使役と呼ぶ。物対象使役は、N<sub>1</sub> が VP の発生の原因であると同時に VP の動作対象であり、一般的に N<sub>2</sub> が VP の発生を予想していないという事態を表す。

(29) 两杯酒 就 { \*让 / \*叫 / \*使 / 把 } 老张 喝醉了。

二杯の酒 だけで rang jiao shi ba 張さん 飲む-酔う-PRF

(二杯の酒を飲んだだけで、張さんは酔ってしまった。)

(30) 过期的便当 { \*让 / \*叫 / \*使 / 把 } 老王 肚子 吃坏了。

賞味期限切れの弁当 rang jiao shi ba 王さん お腹 食べる-壊れる-PRF

(賞味期限切れの弁当を食べて、王さんはお腹を壊した。)

(29)-(30)の N<sub>1</sub> “两杯酒 (二杯の酒)”、“过期的便当 (賞味期限切れの便当)”は物、V “喝 (飲む)”、“吃 (食べる)”の動作対象であり、VP “喝醉 (飲んで酔っ払う)”、“吃坏肚子 (食べてお腹を壊す)”に対して意図性を持っていないため、〈一意図〉である。N<sub>2</sub> “老张 (張さん)”、“老王 (王さん)”は VP “喝醉 (飲んで酔っ払う)”、“吃坏肚子 (食べてお腹を壊す)”に対して意図性を持っていないと話し手が認識しているため、〈一意図〉である。(29)-(30)が示すように、“把”使役構文は物対象使役と対応でき、“让”使役構文、“叫”使役構文、“使”使役構文は物対象使役と対応できない。

#### 5.4.4 “让/叫/使/把”使役構文の意味的・機能的特徴

本論文では、中国語の使役文に関する先行研究を踏まえて、事態の参与者の意図性及び VP の性質によって使役文を分類し、“让”使役構文、“叫”使役構文、“使”使役構文、“把”使役構文と各使役構造の対応関係を考察した。考察の結果は以下の表 5-3 のようにまとめられる。

表 5-3 “让/叫/使/把”使役構文と各使役構造の対応関係

使役構造の種類		具体的な使役構文			
		“让” 使役 構文	“叫” 使役 構文	“使” 使役 構文	“把” 使役 構文
許容使役	N <sub>1</sub> +意図 N <sub>2</sub> +意図 VP スル	○	×	×	×
要求使役	N <sub>1</sub> +意図 N <sub>2</sub> -意図 VP スル	○	○	×	×
無作為使役	N <sub>1</sub> -意図 N <sub>2</sub> +意図 VP スル	○	×	×	×
誘動使役	N <sub>1</sub> -意図 N <sub>2</sub> -意図 VP スル	○	×	○	×
主観助力使役	N <sub>1</sub> +意図 N <sub>2</sub> -意図 VP ナル	○	×	○	×
客観原因使役	N <sub>1</sub> -意図 N <sub>2</sub> -意図 VP ナル	×	×	○	×
人間対象使役	N <sub>1</sub> +意図 N <sub>2</sub> -意図 VP スルーナル	○	○	×	○
物対象使役	N <sub>1</sub> -意図 N <sub>2</sub> -意図 VP スルーナル	×	×	×	○

(○: 対応できる ×: 対応できない)

表 5-3 が示すように、“让”使役構文は許容使役、要求使役、無作為使役、誘動使役、主観助力使役、人間対象使役と対応でき、客観原因使役、物対象使役と対応できない。“叫”使役構文は要求使役、人間対象使役と対応でき、許容使役文、無作為使役、誘動使役、主観助力使役、客観原因使役、物対象使役と対応できない。“使”使役構文は誘動使役、主観助力使役、客観原因使役と対応でき、許容使役文、要求使役、無作為使役、人間対象使役、物対象使役と対応できない。“把”使役構文は人間対象使役、物対象使役と対応でき、許容使役文、要求使役、無作為使役、誘動使役、主観助力使役、客観原因使役と対応できない。結論として、「使役主は意図性があるか否か」、「被使役主は意図性があるか否か」、「動作はコントロールできるか否か」という統一的な基準で“让”使役構文、“叫”使役構文、“使”使役構文、“把”使役構文の意味的・機能的特徴は以下のようにまとめることができる。

(31) “让”使役構文の意味的・機能的特徴:

“让”使役構文は、[N<sub>1</sub>－意図 N<sub>2</sub>－意図 VP ナル/スル-ナル]という意味構造に用いられない。“让”使役構文は、[N<sub>2</sub>+意図 VP スル]という意味構造に適する唯一の使役構文である。

(32) “叫”使役構文の意味的・機能的特徴:

“叫”使役構文は、[N<sub>1</sub>+意図 N<sub>2</sub>－意図 VP スル/スル-ナル]という意味構造のみに用いられる。ただし、[N<sub>1</sub>+意図 N<sub>2</sub>－意図 VP スル/スル-ナル]という意味構造には、“叫”使役構文だけでなく、ほかの使役構文を用いることもできる。

(33) “使”使役構文の意味的・機能的特徴:

“使”使役構文は、[N<sub>2</sub>－意図 VP ナル]という意味構造に用いられる。[N<sub>2</sub>－意図 VP スル]の場合、[N<sub>1</sub>－意図 N<sub>2</sub>－意図 VP スル]という意味構造にも“使”使役構文が用いられる。“使”使役構文は[N<sub>1</sub>－意図 N<sub>2</sub>－意図 VP ナル]という意味構造に適する唯一の使役構文である。

(34) “把”使役構文の意味的・機能的特徴:

“把”使役構文は、[VP スル-ナル]という意味構造にのみ用いられる。“把”使役構文は[N<sub>1</sub>－意図 N<sub>2</sub>－意図 VP スル-ナル]という意味構造に適する唯一の使役構文である<sup>40</sup>。

(31)-(34)により、“让”使役構文、“叫”使役構文、“使”使役構文、“把”使役構文の意味上・機能上の示差的特徴が示された。各使役構文はそれぞれの意味的・機能的特徴によって、話し手の使役事態に対する主観的認識を反映する。具体的な文脈により、「使役主に責任付与」、「被使役主が責任を逃れる」、「被使役主に同情する」、「使役結果を意外に感じる」などのニュアンスが生じる。

---

<sup>40</sup> “把”使役文の[VP スル-ナル]という意味構造のみ用いられるという点は、呂叔湘(1980:494-495)が指摘する「動結構造は“把”を用いる使役文の成立要件である」という点と一致している。

## 5.5 結び

本章では、中国語の使役文における各構文の使用状況、基本的特性を分析し、具体的な構文である“让”使役構文、“叫”使役構文、“使”使役構文、“把”使役構文の意味的・機能的特徴を明らかにした。その結果は(35)-(37)のようにまとめられる。

(35) 中国語の使役文における各構文の使用状況:

中国語には、“让”使役構文、“叫”使役構文、“使”使役構文、“把”使役構文、無標使役構文などの使役文が存在する。これらの具体的な使役文の中に、どのような場合においても適格となる構文は存在しない。

“让”使役構文のみ適格である場合があり、また、“使”使役構文のみ適格である場合がある。(5.2 節参照)

(36) 中国語の使役文の基本的特性:

(i) 中国語の使役文の視点は  $N_1$  〈使役主〉 / 〈使役主〉 兼 〈動作対象〉 に置かれる。無標使役構文の焦点は  $N_2$  〈動作主〉 であるが、有標使役構文の焦点は VP の表す動作・行為 / 影響・変化である。(5.3.1 節参照)

(ii) 中国語の使役文は、使役構文ごとの使役主の意図性の違いを含意するという特性がある。(5.3.2 節参照)

(37) “让/叫/使/把”使役構文の意味的・機能的特徴:

(i) “让”使役構文は、[ $N_1$  - 意図  $N_2$  - 意図 VP ナル/スル-ナル] という意味構造には用いられない。“让”使役構文は、[ $N_2$  + 意図 VP スル] という意味構造に適する唯一の使役構文である。(5.4.4 節参照)

(ii) “叫”使役構文は、[ $N_1$  + 意図  $N_2$  - 意図 VP スル/スル-ナル] という意味構造のみに用いられる。ただし、[ $N_1$  + 意図  $N_2$  - 意図 VP スル/スル-ナル] という意味構造には、“叫”使役構文だけでなく、ほかの使役構文を用いることもできる。(5.4.4 節参照)

(iii) “使”使役構文は、[N<sub>2</sub>－意図 VP ナル]という意味構造に用いられる。[N<sub>2</sub>－意図 VP スル]の場合、[N<sub>1</sub>－意図 N<sub>2</sub>－意図 VP スル]という意味構造にも“使”使役構文が用いられる。“使”使役構文は[N<sub>1</sub>－意図 N<sub>2</sub>－意図 VP ナル]という意味構造に適する唯一の使役構文である。

(5.4.4 節参照)

(iv) “把”使役構文は、[VP スル-ナル]という意味構造にのみ用いられる。“把”使役構文は[N<sub>1</sub>－意図 N<sub>2</sub>－意図 VP スル-ナル]という意味構造に適する唯一の使役構文である。

(5.4.4 節参照)

## 第 6 章 結論

### 6.1 議論のまとめ

本論文では、現代中国語のヴォイスという言語現象を全体的に検討し、中国語のヴォイス構文の体系を明らかにしたうえで、機能的構文論の方法を用いて能動文、受身文、使役文の意味・機能を分析した。本論文での議論の要点を、次のようにまとめることができる。

#### 6.1.1 中国語のヴォイスに関する概念

本論文では、先行研究を踏まえて、中国語の言語現象と関連付けながら、「ヴォイス」、「ヴォイス構文」という概念を改めて定義した。

##### (1) (= 第 1 章の(18))

本論文におけるヴォイス:

ヴォイスとは、動作・行為を中心とした客観的には同一の事態を、名詞句の意味役割と文法関係の対応関係の変更などの理由で、複数の言語形式で表現される文法現象である。(1.2 節参照)

##### (2) (= 第 1 章の(22))

本論文におけるヴォイス構文:

ヴォイス構文とは、意味役割の異なる参加者が明示するか否かに関わらず 2 つ以上ある、動作・行為を中心とした事態を表す文である。

(1.2 節参照)

#### 6.1.2 中国語のヴォイス構文の体系

本論文では、中国語のヴォイス構文の構造及び体系化の基準を検討し、中国語のヴォイス構文の体系を明らかにした。

第一に、ヴォイス構文の体系という総合的視座から、中国語の能動文、受身文、使役文の定義を提案した。



(3) (= 第 2 章の(48))

本論文における中国語の能動文、受身文、使役文の定義:

(i) 中国語の能動文とは、2 つ以上の参加者が関わっている動作・行為を中心とする事態を表す構文において、主語の位置にある名詞句の担う意味役割が中心動作の〈動作主〉となる文である。(2.5.3 節参照)

(ii) 中国語の受身文とは、2 つ以上の参加者が関わっている動作・行為を中心とする事態を表す構文において、主語の位置にある名詞句の担う意味役割が中心動作の〈動作対象〉あるいは中心動作から間接影響を受ける〈受影主〉となる文である。(2.5.3 節参照)

(iii) 中国語の使役文とは、2 つ以上の参加者が関わっている動作・行為を中心とする事態を表す構文において、主語の位置にある名詞句の担う意味役割が〈使役主〉あるいは〈使役主〉兼〈動作対象〉となる文である。(2.5.3 節参照)

第二に、先行研究に基づいて、能動文、受身文、使役文の下位分類を考察した。能動文、受身文、使役文の下位分類は以下の通りである。

(4) (= 第 2 章の(49))

能動文、受身文、使役文の下位分類:

(i) 中国語の能動文は、無標能動構文、“把”能動構文、“将”能動構文、“给”能動構文に分類される。(2.5.4 節参照)

(ii) 中国語の受身文は、無標受身構文、“被”受身構文、“叫”受身構文、“让”受身構文などに分類される。(2.5.4 節参照)

(iii) 中国語の使役文は、無標使役構文、“叫”使役構文、“让”使役構文、“使”使役構文、“把”使役構文、“令”使役構文に分類される。(2.5.4 節参照)

第三に、日本語のヴォイス構文と比較対照することによって、中国語のヴォイス構文の体系上の特徴を検討した。

(5) (= 第 2 章の(50))

中国語のヴォイス構文の体系上の特徴:

(i) 中国語のヴォイス構文の体系は複雑で、その形式は多様であるという統語的特徴がある。(2.6.1 節参照)

(ii) 中国語のヴォイス構文の体系は複雑で、その中のそれぞれの具体的な構文は、「能動」、「受身」、「使役」以外にも多くの意味を表し分けているという意味的特徴がある。(2.6.2 節参照)

(iii) 中国語では、能動文と受身文は〈不完全対応〉という関係であり、受身文と使役文は〈共通構造〉があるという関係である。(2.6.3 節参照)

### 6.1.3 中国語の能動文、受身文、使役文の意味・機能

本論文では、中国語の能動文、受身文、使役文を考察した。その結果、能動文、受身文、使役文の基本的特性を明らかにした。さらに、能動文、受身文、使役文における具体的な構文（“把”能動構文、“让”受身構文、“让”使役構文、“叫”使役構文、“使”使役構文、“把”使役構文）の意味・機能を以下の通り説明した。

(6) (= 第 3 章の(78))

中国語の能動文の基本的特性:

(i) 中国語の能動文の視点は、一般に、 $N_1$ 〈動作主〉に置かれる。無標能動構文の焦点は  $N_2$ 〈動作対象〉 / 〈受影主〉であるが、有標能動構文の焦点は VP の表す動作・行為 / 影響・変化である。(3.3.1 節参照)

(ii) 中国語の能動文は客観的に出来事を描写することができる。

(3.3.2 節参照)

(7) (= 第 3 章の(79))

“把”能動構文に課される意味的・機能的制約:

(i) “把”能動構文は、V の表す動作・行為を通して、 $N_2$ の「絶対的狀態変化」あるいは「相対的狀態変化」があったということが捉えられる

場合に成立する。一方、N<sub>2</sub>の「絶対的状態変化」も「相対的状態変化」も捉えられない場合、“把”能動構文は成立しない。(3.4.2.1節参照)

(ii) N<sub>2</sub>がVの表す動作・行為の前に存在している場合、すなわち、N<sub>2</sub>が「絶対的既存性」あるいは「相対的既存性」を有する場合には、“把”能動構文が成立する。一方、N<sub>2</sub>が「絶対的既存性」も「相対的既存性」も有さない場合には、“把”能動構文は成立しない。(3.4.2.2節参照)

(8) (=第3章の(80))

“把”能動構文の意味的・機能的特徴:

(i) “把”能動構文は、話し手がN<sub>2</sub>に関心を持っていること、N<sub>1</sub>に責任付与すること、影響結果を意外に感じることに、N<sub>2</sub>への影響が「強影響」ということをしばしば積極的に含意する。(3.4.3節参照)

(ii) “把”能動構文は、「命令・警告」文に出現できる、影響結果を表すN<sub>3</sub>と共起できるという機能的特徴を持っている。(3.4.3節参照)

(9) (=第4章の(48))

中国語の受身文の基本的特性:

(i) 中国語の受身文の視点はN<sub>1</sub>〈動作対象〉/〈受影主〉に置かれる。無標受身構文の焦点はN<sub>2</sub>〈動作主〉であるが、有標受身構文の焦点はVPの表す動作・行為/影響・変化である。(4.3節参照)

(ii) 中国語の受身文は、一般に、Vの表す動作・行為によってN<sub>1</sub>への影響が捉えられない場合には不適格となる。しかし、Vの表す動作・行為によってN<sub>1</sub>が特徴付けられる場合か、Vの表す動作・行為によってN<sub>1</sub>にN<sub>2</sub>が関与することになる場合には、文は適格となる。

(4.3節参照)

(10) (=第4章の(49))

“让”受身構文に課される意味的・機能的制約:

(i) “让”受身構文は、N<sub>2</sub>が非意図的な動作主である場合には不適格となる。(4.4.2.1節参照)

(ii) “让”受身構文は、N<sub>2</sub>のN<sub>1</sub>に対する認識を表現する場合には不適格となる。(4.4.2.2節参照)

(iii) “让”受身構文は、N<sub>2</sub>が文中に明示されていない場合には不適格となる。(4.4.2.3 節参照)

(iv) “让”受身構文は、VPの表す動作・行為/影響・変化がN<sub>1</sub>に対して「有益」である場合には不適格となる。(4.4.2.4 節参照)

(v) “让”受身構文は、話し手が出来事の実現の「可能性」に対する態度を表現する場合には不適格となる。(4.4.2.5 節参照)

(11)(=第4章の(50))

“让”受身構文の意味的・機能的特徴:

(i) “让”受身構文は、話し手がN<sub>1</sub>に、出来事に対する責任を付与することをしばしば積極的に含意する。(4.4.3.2 節参照)

(ii) “让”受身構文は、N<sub>1</sub>の被害認識がないということを表す機能的特徴を持っている。(4.4.3.3 節参照)

(12)(=第5章の(36))

中国語の使役文の基本的特性:

(i) 中国語の使役文の視点はN<sub>1</sub>〈使役主〉/〈使役主〉兼〈動作対象〉に置かれる。無標使役構文の焦点はN<sub>2</sub>〈動作主〉であるが、有標使役構文の焦点はVPの表す動作・行為/影響・変化である。(5.3.1 節参照)

(ii) 中国語の使役文は、使役構文ごとの使役主の意図性の違いを含意するという特性がある。(5.3.2 節参照)

(13)(=第5章の(37))

“让/叫/使/把”使役構文の意味的・機能的特徴:

(i) “让”使役構文は、[N<sub>1</sub>-意図 N<sub>2</sub>-意図 VP ナル/スル-ナル]という意味構造には用いられない。“让”使役構文は、[N<sub>2</sub>+意図 VP スル]という意味構造に適する唯一の使役構文である。(5.4.4 節参照)

(ii) “叫”使役構文は、[N<sub>1</sub>+意図 N<sub>2</sub>-意図 VP スル/スル-ナル]という意味構造のみに用いられる。ただし、[N<sub>1</sub>+意図 N<sub>2</sub>-意図 VP スル/スル-ナル]という意味構造には、“叫”使役構文だけでなく、ほかの使役構文を用いることもできる。(5.4.4 節参照)

(iii) “使”使役構文は、[N<sub>2</sub>-意図 VP ナル]という意味構造に用いられる。[N<sub>2</sub>-意図 VP スル]の場合、[N<sub>1</sub>-意図 N<sub>2</sub>-意図 VP スル]とい

う意味構造にも“使”使役構文が用いられる。“使”使役構文は[N<sub>1</sub>－意図 N<sub>2</sub>－意図 VP ナル]という意味構造に適する唯一の使役構文である。

(5.4.4 節参照)

(iv) “把”使役構文は、[VP スル-ナル]という意味構造にのみ用いられる。“把”使役構文は[N<sub>1</sub>－意図 N<sub>2</sub>－意図 VP スル-ナル]という意味構造に適する唯一の使役構文である。

(5.4.4 節参照)

以上の結論から、中国語のヴォイスの本質により深く迫ることが可能となる。中国語には、話し手の主観性を示す「視点」、「焦点」という要因により能動文、受身文、使役文が選択されるという普遍性がある。中国語の能動文、受身文、使役文には、それぞれ複数の構文が含まれる。無標能動構文、“把”能動構文、“被”受身構文、“让”受身構文、“让”使役構文、“使”使役構文などの具体的な構文の選択は、「視点」、「焦点」という話し手の主観性に左右される。これに加えて、出来事の参与者への「責任付与」、出来事の結果に対する「意外性」、出来事の参与者の立場・被害認識・意図性に対する認識などの、話し手の主観性にも決定づけられている。そのため中国語のヴォイス構文は、モダリティ助詞、参与者の意図性を表す副詞が用いられない場合や、意志動詞、非意志動詞が区別されない場合にも、構文のレベルでより精確に話し手の主観性が表現できる。つまり、中国語には、構文の違いによって細かな意味の違いを表し分けるといふ個別性があると言える。

## 6.2 本論文の独自性

本論文がこれまでの研究と大きく異なる点は主に次の3点である。(i)ヴォイスの体系という総合的視座から能動文、受身文、使役文を分析した点。(ii)ヴォイス構文を分析する際、文の表す出来事の参与者の主観性も視野に入れたという点。(iii)述語動詞句やヴォイス構文、使役構造を分類する際、いくつかの基準を組み合わせ、すべての可能なパターンを検討したうえで、言語事実によって存在しないパターンを排除し、実際に存在するパターンを取り上げた点。以上の3点を通して中国語のヴォイスを考察することにより、以下のような新しい知見が得られた。

本論文は、上記(i)の点に基づいて、中国語の能動文と使役文の定義を明確にした。言語学で言う「使役」は、一般的に「因果関係」を意味の中核とする文を指すため、「因果関係」を基準として“把”能動構文、“得”能動構文がしばしば使役文と見なされることもある(李臨定 2011; 木村英樹 2012)。一方、本論文は、中国語のヴォイス構文の体系を明らかにしたうえで、ヴォイス構文としての能動文、使役文を判定する際、「因果関係」よりも「N<sub>1</sub>の意味役割」を優先基準と考え、ヴォイス構文の体系に基づいて、能動文、使役文を定義した。(2.5.3 節参照)

本論文は、上記(ii)の点に基づいて、“把”能動構文の成立要件を明らかにした。先行研究において、“把”能動構文の成立は「影響結果」、「N<sub>2</sub>の自立性」に制約される(王力 1943; 張伯江 2000、2001)。しかし、なぜ“他把机会错过了(彼はチャンスを逃した)”、“老张终于把房子盖了(張さんはやっと家を建てた)”という文は「影響結果」、「N<sub>2</sub>の自立性」という制約条件を満たさなくても成立するのかについては、先行研究はこれらの例文を“特殊例句(特殊的な例文)”と見なすのみであり、その成立の理由は明確に説明していない。本論文は、先行研究における「影響結果」制約、「N<sub>2</sub>の自立性」制約に基づいて、「N<sub>2</sub>の状態変化」、「N<sub>2</sub>の既存性」という制約を新たに提案した。上記の例文の N<sub>1</sub>(動作主)の主観的視角から「N<sub>2</sub>の状態変化」、「N<sub>2</sub>の既存性」を考えると、“他把机会错过了(彼はチャンスを逃した)”の N<sub>1</sub>“他(彼)”にとって N<sub>2</sub>“机会(チャンス)”は「存在している→存在しない」という「相対的状态変化」が捉えられる。“老张终于把房子盖了(張さんはやっと家を建てた)”の N<sub>2</sub>“房子(家)”は V“盖(建てる)”という動作の前に既に N<sub>1</sub>“老张(張さん)”の意識の中に存在している。N<sub>1</sub>“老张(張さん)”にとって N<sub>2</sub>“房子(家)”は「相対的既存性」を有する。これらの“把”能動構文は「N<sub>2</sub>の状態変化」、「N<sub>2</sub>の既存性」制約を満たすため、適格となる。このように本論文では、“把”能動構文の適格性を統一的な原則で説明できるようにした。(3.4.2 節参照)

本論文は、意味構造によって中国語の使役構造を分類する際、上記(iii)の方法を用いた。N<sub>1</sub>と N<sub>2</sub>の意図性の有無(〈+意図〉/〈-意図〉/〈スル-ナル〉)、VPの性質(〈スル〉/〈ナル〉/〈スル-ナル〉)に準じて全てのパタンの使

役構造を作り出し、論理的にあり得ないパターンと、実例が存在しないパターンを排除し、実例が存在しているパタンのみを取り上げた。このように、“警察让犯人跑了（警察は犯人を逃がしてしまった）”、“这本书使我重新审视了自己的研究方法（この本は、私に自分の研究方法について改めて考えさせた）”のような先行研究の分類には当てはまらない例文も含めて、網羅的に使役文を分類した。（5.4.2 節参照）

本論文は、中国語の“把”能動構文、“让”受身構文、“让”使役構文などの具体的なヴォイス構文を分析する際、機能的構文論の方法を用いた点にも特徴がある。本論文は、機能的構文論に関する先行研究を踏まえて、文の構造に基づいて、統語的観点だけではなく、話し手の視点や焦点、伝達意図、話し手の、事態の参与者の主観性に対する認識などの多角的な観点から、“把”能動構文、“让”受身構文、“让”使役構文、“叫”使役構文、“使”使役構文、“把”使役構文の意味・機能の解明を試みた。

### 6.3 今後の課題

本論文は現代中国語のヴォイスに関して、能動文、受身文、使役文の意味・機能を中心に分析した。しかしながら、現段階では、主に中国語の範囲の中でのみ各ヴォイス構文を比較して研究している。得られた見解が中国語に特有であるのか、ほかの言語と比べた場合に中国語のヴォイス構文はどのような特性があると考えられるのかについて、まだ詳しく検討するには至っていない。中国語のヴォイスをより深く理解するためには、個別言語の枠を越えて言語類型論の観点からも中国語のヴォイス構文を研究することが必要だと考えている。これからの課題として、日本語を含む他言語との比較対照も視野に入れて、中国語のヴォイス構文を引き続き研究を進めていきたい。

## 参考文献

### 中国語の文献（ピンイン順）

- 丁声树 1961.《现代汉语语法讲话》，北京：商务印书馆。
- 范晓 2001.〈动词的配价与汉语的把字句〉，《中国语文》第4期，309-319页。  
北京：中国社会科学院语言研究所。
- 古川裕 2003.〈现代汉语感受谓语句的句法特点——“叫/让/使/令”字句和“为”字句之间的语态变换〉，《语言教学与研究》第2期，28-37页。北京：北京语言大学。
- 古川裕 2005.〈现代汉语的“中动语态句式”——语态变换的句法实现和词法实现〉，《汉语学报》总第10期，22-32页。北京：华中师范大学。
- 黄伯荣，廖序东(编)1991.《现代汉语》，北京：高等教育出版社。
- 胡裕树(编)1979.《现代汉语》，上海：上海教育出版社。
- 江蓝生 2000.〈汉语使役与被动兼用探源〉，江蓝生(编)《近代汉语探源》，221-236页。北京：商务印书馆。
- 蒋绍愚 1994.《近代汉语研究概况》，北京：北京大学出版社。
- 金立鑫 1997.〈“把”字句的句法、语义、语境特征〉，《中国语文》第6期，415-423页。北京：中国社会科学院语言研究所。
- 金立鑫 2002.〈“把”字句的配价成分及其句法结构〉，《『现代中国語研究』》第4期，1-11页。東京：朝日出版社。
- 李临定 2011.《现代汉语句型(增订本)》，北京：商务印书馆。
- 刘海波 2015.〈现代汉语被动句中施事者隐现的历史原因探析——兼谈使役和被动兼用〉，《云南师范大学学报(对外汉语教学与研究版)》第13卷，62-67页。昆明：云南师范大学。
- 刘培玉 2002.〈把字句的句法、语义和语用分析〉，《华中师范大学学报》第5期，134-139页。武汉：华中师范大学。
- 刘月华 1983.《实用现代汉语语法》，北京：外语教学与研究出版社。
- 陆俭明 2016.〈从语言信息结构视角重新认识“把”字句〉，《语言教学与研究》第1期，1-13页。北京：北京语言大学。
- 鲁元宝 2005.《日汉语言对比研究》，北京：华语教学出版社。



- 吕叔湘 1948.《汉语语法论文集》1984 增订本,北京:商务印书馆。
- 吕叔湘 1957.《中国语法要略》,北京:商务印书馆。
- 吕叔湘 1979.《语法分析问题》,北京:商务印书馆。
- 吕叔湘(编)1980.《现代汉语八百词》,北京:商务印书馆。
- 孟艳丽 2002.〈也论“把”字句的主题和焦点〉,《解放军外国语学院学报》第 3 期,44-46 页。洛阳:解放军外国语学院。
- 屈哨兵 2008.《现代汉语被动标记研究》,湖北:华中师范大学出版社。
- 邵敬敏,赵春利 2005.〈“致使把字句”和“省隐被字句”及其语用解释〉,《汉语学习》第 4 期,11-18 页。延吉:延边大学。
- 沈家煊 2002.〈如何处置“处置式”——论把字句的主观性〉,《中国语文》第 5 期,387-399 页。北京:中国社会科学院语言研究所。
- 沈力 1996.谈汉语的使役句和被动句的结构,『中国語学』第 243 号,75-84 页。東京:日本中国語学会。
- 施春宏 2010.〈从句式群看“把”字句及相关句式的语法意义〉,《世界汉语教学》第 24 卷,291-308 页。北京:北京语言文化大学。
- 王灿龙 1998.〈无标记被动句和动词的类〉,《汉语学习》第 5 期,15-19 页。延吉:延边大学。
- 王还 1985.〈“把”字句中“把”的宾语〉,《中国语文》第 1 期,48-51 页。北京:中国社会科学院语言研究所。
- 王力 1943.《中国现代语法》1985 年重印本,北京:商务印书馆。
- 王振来 2006.〈从语法化和方言的角度考察被动标记〉,《汉语学习》第 4 期,13-17 页。延吉:延边大学。
- 王振来 2009.〈现代汉语被动标记的功能〉,《辽宁师范大学学报》第 3 期,88-91 页。大连:辽宁师范大学。
- 杨德峰 2008.《日本人学汉语常见语法错误释疑》,北京:商务印书馆。
- 杨国文 2002.〈汉语“被”字式在不同种类的过程中的使用情况考察〉,《当代语言学》第 1 期,13-24 页。北京:中国社科院语言所。
- 叶向阳 2004.〈“把”字句的致使性解释〉,《世界汉语教学》总第 68 期,25-38 页。北京:北京语言文化大学。

- 岳中奇 2001.〈处所宾语“把”字句中动词补语的制约机制〉，《汉语学习》第 2 期，17-23 页。延吉：延边大学。
- 张斌(编)2001.《现代汉语虚词词典》，北京：商务印书馆。
- 张伯江 2000.〈论“把”字句的句式语义〉，《语言研究》第 1 期，28-40 页。武汉：华中科技大学中国语言研究所。
- 张伯江 2001.〈被字句和把字句的对称与不对称〉，《中国语文》第 6 期，519-524 页。北京：中国社会科学院语言研究所。
- 张伯江 2013.《什么是句法学》，北京：商务印书馆。
- 张黎 2012.〈汉语句式系统的认知类型学的分析——兼论汉语语态问题〉，日中对照言語学会(编)『日本語と中国語のヴォイス』，211-229 页。東京：白帝社。
- 张万禾 2007.〈“被，给，叫，让”的意愿性与其宾语从缺的关系〉，《汉字文化》第 1 期，45-48 页。北京：北京国际汉字研究会。
- 张谊生 2013.〈句法层面的语序与句子层面的语序——兼论一价谓词带宾语与副词状语表程度〉，《语言研究》第 3 期，40-51 页。武汉：华中科技大学中国语言研究所。
- 张豫峰 2006.《现代汉语句子研究》，上海：学林出版社。
- 张豫峰 2007.〈关于现代汉语致使态的思考〉，《汉语学习》第 6 期，25-30 页。延吉：延边大学。
- 赵清永 1993.〈对被动句的再认识〉，《北京师范大学学报》第 6 期，98-103 页。北京：北京师范大学。
- 赵元任 1979.《汉语口语语法》(吕叔湘译)，北京：商务印书馆。
- 朱德熙 1980.《现代汉语语法研究》，北京：商务印书馆。
- 朱德熙 1982.《语法讲义》，北京：商务印书馆。

#### 日本語の文献（五十音順）

- Bolinger, Dwight 1977. *Meaning and Form*. London: Longman. (中右実訳 1981.『意味と形』，東京：こびあん書房)
- 相原茂(編)1998.『講談社中日辞典 第二版』，東京：株式会社講談社。

- 石塚政行 2015. 「意味役割」, 斎藤純男, 田口善久, 西村義樹(編)『明解言語学辞典』, 12 頁。東京: 三省堂。
- 石村広 2000. 「中国語結果構文の意味構造とヴォイス」, 『中国語学』第 247 号, 142-157 頁。東京: 日本中国語学会。
- 石村広 2011. 『中国語結果構文の研究—動詞連続構造の観点から—』, 東京: 白帝社。
- 今井敬子 1987. 「清代北京語文法の再検討—“被”、“叫”、“让”をめぐって—」, 『信州大学教養部紀要』第 21 号, 101-110 頁。松本: 信州大学教養部。
- 今村圭 2011. 「現代中国語に見られる“让”と“叫”の使役表現について」, 『中国研究』第 19 号, 53-66 頁。柏: 麗澤大学中国研究会。
- 岩田憲幸 1983. 「“使”、“令”と使役構文」, 『中国語学』第 230 号, 44-51 頁。東京: 日本中国語学会。
- 内田恵, 前田満 2007. 『語用論』, 東京: 英潮社。
- 王亜新 2011. 『中国語の構文』, 東京: 株式会社アルク。
- 大塚高信(編)1970. 『新英文法辞典』, 東京: 三省堂。
- 風間喜代三, 上野善道, 松村一登, 町田健 2004. 『言語学 第 2 版』, 東京: 東京大学出版会。
- 加藤晴子 2012. 「ヴォイスとその周辺—中国語—」, 『語学研究所論集』第 17 号, 117-127 頁。東京: 東京外国語大学語学研究所。
- 加藤宏紀 2006. 「現代中国語の二重目的語構文とヴォイス構文における「授与」と「取得」」, 『神奈川大学言語研究』第 28 号, 25-36 頁。横浜: 神奈川大学。
- 加納光, 平井勝利 1994. 「現代中国語における「使」、「让」、「叫」を用いた使役表現の考察」, 『四日市大学論集』第 6 巻第 2 号, 91-109 頁。四日市: 四日市大学学会。
- 神尾昭雄, 高見健一 1998. 中右実(編)『談話と情報構造』, 東京: 研究社。
- 木村英樹 2000. 「中国語ヴォイスの構造化とカテゴリ化」, 『中国語学』第 247 号, 19-39 頁。東京: 日本中国語学会。

- 木村英樹 2012. 『中国語文法の意味とカタチ—「虚」的意味の形態化と構造化に関する研究』, 東京: 白帝社。
- 木村英樹, 楊凱榮 2008. 「授与と受動の構文ネットワーク—中国語授与動詞の文法化に関する方言比較文法試論—」, 生越直樹, 木村英樹, 鷺尾龍一(編) 『ヴォイスの対照研究』, 65-92 頁。東京: くろしお出版。
- 木村英樹, 鷺尾龍一 2008. 「東アジア諸語にみるヴォイスの多様性と普遍性—序に代えて—」, 生越直樹, 木村英樹, 鷺尾龍一(編) 『ヴォイスの対照研究』, 1-20 頁。東京: くろしお出版。
- 木村雄太郎 2008. 「ベトナム語授与動詞 cho の文法化—使役動詞から接続詞へ—」, 生越直樹, 木村英樹, 鷺尾龍一(編) 『ヴォイスの対照研究』, 143-154 頁。東京: くろしお出版。
- 玄幸子 2006. 「現代中国語文法化理論による近世語の態(Voice)の分析」, 『関西大学外国語教育研究』第 11 号, 1-11 頁。大阪: 関西大学外国語教育研究機構。
- 古賀裕章 2015. 「ヴォイス(態)」, 斎藤純男, 田口善久, 西村義樹(編) 『明解言語学辞典』, 17-18 頁。東京: 三省堂。
- 古賀悠太郎 2013. 「「視点」研究の枠組みを求めて—移動動詞文を例に—」, 『神戸外大論叢』第 63 号, 169-188 頁。神戸: 神戸市外国語大学研究会。
- 古賀悠太郎 2014. 『現代日本語の「視点」の体系に関する研究—移動動詞文、授与動詞文、受動文を中心に—』, 博士学位論文。神戸: 神戸市外国語大学大学院外国語学研究科。
- 小林立 1986. 「中国語における使役と受身の表現について」, 『香川大学一般教育研究』第 30 巻, 121-130 頁。高松: 香川大学一般教育部。
- 黄利斌 2013. 「ヴォイスに関する日中対照研究—受身・使役を中心として—」, 『岩大語文』第 18 号, 42-50 頁。盛岡: 岩手大学語文学会。
- 斎藤純男, 田口善久, 西村義樹(編) 2015. 『明解言語学辞典』, 東京: 三省堂。
- 佐々木勲人 1997. 「中国語における使役と受動の曖昧性」, 筑波大学現代言語学研究会(編) 『ヴォイスに関する比較言語学的研究』, 133-160 頁。東京: 三修社。

- 佐々木勲人 2013. 「ヴォイス構文と主観性—話者の言語化をめぐる—」, 『木村英樹教授還暦記念 中国語文法論叢』, 315-331 頁。東京：白帝社。
- 柴谷方良 1982. 「ボイス：日本語と英語」, 『講座日本語学』第 10 巻, 256-279 頁。東京：明治書院。
- 柴谷方良 2000. 「ヴォイス」, 仁田義雄, 益岡隆志(編)『文の骨格』, 120-186 頁。東京：岩波書店。
- 謝新平 2001. 「日中両語の使役と受動の接近する類似点と相違点」, 『福岡教育大学国語科研究論集』第 42 号, 5-85 頁。宗像：福岡教育大学国語国文学会。
- 高橋弥守彦 2012. 「“被字句”と対応する日本語について」, 日中対照言語学会(編)『日本語と中国語のヴォイス』, 39-65 頁。東京：白帝社。
- 高橋弥守彦 2014. 「日本語受身文の中国語訳について」, 『日中言語対照研究論集』第 16 号, 23-44 頁。東京：日中対照言語学会。
- 高橋弥守彦 2017. 『中日対照言語学概論—その発想と表現』, 東京：株式会社日本僑報社。
- 高見健一 1997. 『機能的統語論』, 東京：くろしお出版。
- 高見健一 2011. 『受身と使役—その意味規則を探る』, 東京：開拓社。
- 張岩紅 2012. 「日本語の受身文に対応する中国語について」, 日中対照言語学会(編)『日本語と中国語のヴォイス』, 67-81 頁。東京：白帝社。
- 陳月吾 1992. 「使令動詞と使役助動詞—中国語の使令動詞と日本語の使役助動詞との比較対照—」, 『福井工業大学紀要 第一部』, 第 22 号, 105-111 頁。福井：福井工業大学。
- 杜暉 2012. 『中国語の受身表現について—無マーカー受身文と各受身マーカーを中心に—』, 修士学位論文。新潟：新潟大学大学院現代社会文化研究科。
- 中右実, 西村義樹 1998. 『日英語比較選書 5 構文と事象構造』, 東京：研究社。
- 中島悦子 2007. 『日中対照研究 ヴォイス—自・他の対応・受身・使役・可能・自発—』, 東京：株式会社おうふう。

- 長屋尚典 2015. 「項構造」, 斎藤純男, 田口善久, 西村義樹(編)『明解言語学辞典』, 82-84 頁。東京:三省堂。
- 久野暲 1983. 『新日本文法研究』, 東京:大修館書店。
- 久野暲, 高見健一 2005. 『謎解きの英文法 文の意味』, 東京:くろしお出版。
- 平山邦彦 2018. 「中国語語順体系に貫かれた構成原則について—基本語順の設定とその核心的 SVO の位置づけを中心に—」, 『拓殖大学語学研究』第 137 号, 57-100 頁。東京:拓殖大学言語文化研究所。
- 三宅登之 2009. 「行為連鎖の観点から見た中国語の“被”構文」, 『語学研究所論集』第 14 号, 33-64 頁。東京:東京外国語大学語学研究所。
- 三宅登之 2012. 『中級中国語 読みとく文法』, 東京:白水社。
- 安井二美子 1999. 「“把”構文述部における必要条件」, 『中国語学』第 246 号, 154-163 頁。東京:日本中国語学会。
- 安井稔(編)1996. 『コンサイス英文法辞典』, 東京:三省堂。
- 楊凱榮 2018. 『中国語学・日中対照論考』, 東京:白帝社。
- 李藝 2017. 『現代日本語のヴォイスに関する研究—中国語との対照を交えて—』, 博士学位論文。神戸:神戸市外国語大学大学院外国語学研究科。
- 劉月華, 潘文娛, 故韡 1991. 相原茂(監訳)『現代中国語文法総覧』, 東京:くろしお出版。
- 劉丹青 2013. 杉村博文, 大西博子, 島村典子, 鈴木慶夏, 西香織, 橋本永貢子(訳)『語順類型論と介詞理論』, 大阪:日中言語文化出版社。
- 廖郁雯 2012. 「日本語の格と中国語の介詞構造—「デ格」と“被(bèi)”構造の関係—」, 日中対照言語学会(編)『日本語と中国語のヴォイス』, 147-166 頁。東京:白帝社。
- 鷺尾龍一, 三原健一 1997. 『日英語比較選書 7 ヴォイスとアスペクト』, 東京:研究社。

## 謝辞

本論文を執筆するにあたり、多くの方々にお世話になった。

研究活動全般にわたり終始暖かい激励と格別のご指導をいただいた朱継征先生、大竹芳夫先生、江畑冬生先生、福田一雄先生に心から感謝を表したい。平成 20 年度中国円借入金材育成事業の助成を受け、新潟大学経済学部客員研究員として中国語の文法に関する研究を始めた。客員研究員受け入れ期間終了後、朱継征先生のおかげで大学院生として新潟大学で続けて文法を研究することができた。博士前期・後期課程の主指導教員の朱継征先生からは、学位論文の構成など、始めの段階から多くの有意義なご指導を頂戴した。また、生活面においても多大なるご高配をいただいた。博士前期・後期課程の副指導教員の大竹芳夫先生からは、本論文の基盤となる学術論文・口頭発表の原稿の細部にわたり多くの有益なご指摘をいただくとともに、暖かく励ましの言葉も頂戴した。博士後期課程の副指導教員の江畑冬生先生からは、統語論に関する知識を教えていただき、博士学位論文について多くの適切なご指摘を頂戴した。博士前期課程から博士後期課程 1 年生にかけて副指導教員としてご指導をいただいた福田一雄先生からは、機能文法、語用論といった言語学の基礎を築いていただき、修士学位論文について貴重なご指導を頂戴した。先生方からいただいたご助言とご支援のおかげで、諦めることなくこれまでやり遂げることができ、本論文を完成させることができた。ここに記して深甚なる謝意を表したい。

学位論文提出資格審査の際に、土屋太祐先生、山田陽子先生、辻照彦先生から、貴重なご指摘を頂戴した。山梨大学の町田茂先生、東京外国語大学の加藤晴子先生からは『日中言語対照研究論集』第 22 号に発表した論文に関して熱心なご助言を頂戴した。新潟大学言語研究会、新潟大学東アジア学会、日本中国語学会の口頭発表の際には、新潟大学の高田晴夫先生、秋孝道先生、ジョージ・オニール先生、干野真一先生、愛知大学の荒川清秀先生、筑波大学の佐々木勲人先生、暨南大学の邵敬敏先生、上海外国語大学の金立鑫先生をはじめとした学会関係者の先生方から貴重なご示唆をいただいた。石田純子先生、川西裕也先生をはじめ、新潟大学大学院現代社会文化研究科の先生

方にもお世話になった。これら先生方のおかげで、素晴らしい学術環境で研究を進めることができた。本論文に関する研究にご助言ご支援をいただいた先生方に心より御礼を申し上げたい。

また、本論文の日本語をチェックしてくださった齋藤忠雄氏、日比トム氏、日比晶子氏、小林康子氏、宗像竜司氏にも心より感謝の気持ちを表したい。

最後に、博士学位論文執筆中、長きにわたり精神面、経済面の支えとなった中国に住む両親と夫、在宅研究に協力してくれた息子についても書き留めておきたい。

2020年6月

杜 暉



